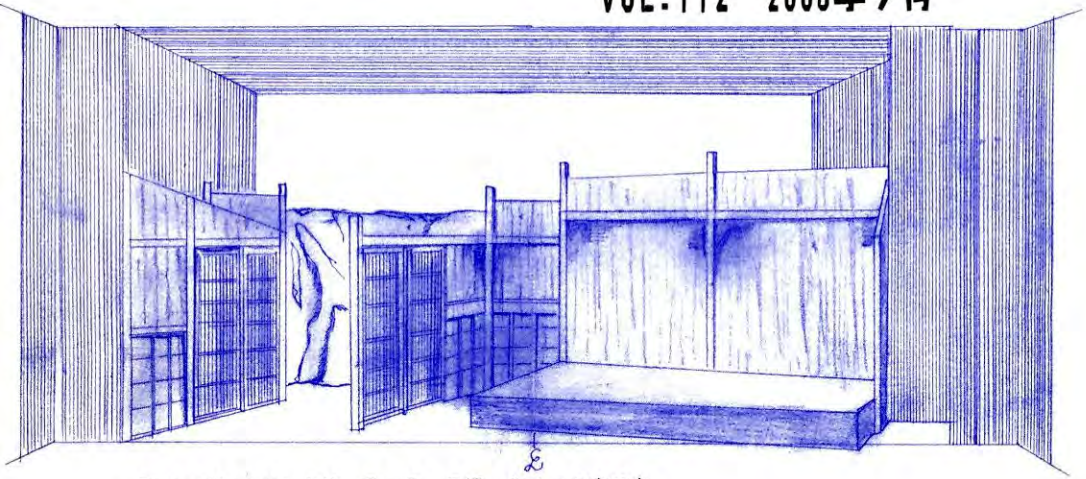
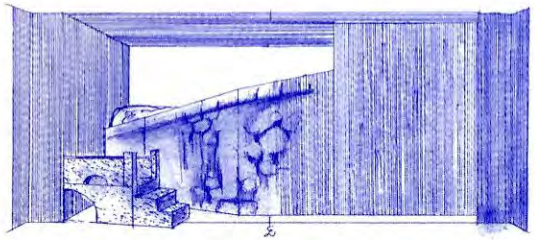
全日本リアリズム演劇会議

演劇会議

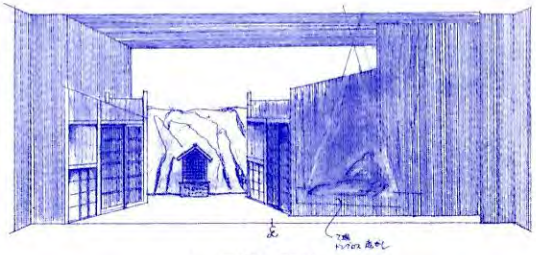
VOL.112　2003年7月



『ウメコがふたり』より　2・3・5場　ウメコの家の中



4・6場　川のほとり



1・7場　路地

ベルリン滞在記　芳地　隆介
銀河ホールの10年　川村　光夫
17年も続いた横浜の憲法劇　岩橋　宣隆
ソウル・はじめの一歩　長谷川由里

全リ演東会議2003年（夏）ゼミナール

夏だ！躍動&交流だ！　IN熱海

◇8月23日（土）～24日（日）

◇熱海ビレッチ（民営国民宿舎）

静岡県熱海市梅園町21の7

8月23日（土）
受付（15:30～16:00）
挨拶・問題提起　こばやしひろし
（16:00～16:30）
特別講演
『多様化する今日の芝居の世界と観客』
小川信夫先生（16:30～17:45）
夕食・交流会（18:00～21:00）
21:00からは各自の部屋で

会　費　13,000円
（夕食・朝食・交流会費含む）
＊中高生 9,000円　子供8,000円
大人（家族の方）10,000円

8月24日（日）
朝　食（7:00～ 9:00）
分科会（9:00～12:00）　チューター
(1)創作劇を生み出し、演出力をたかめるために　こばやしひろし氏（全リ演議長）
(2)舞台上の仕掛け・いろいろ
演田重行氏（劇団蒼生樹代表）
(3)野口体操教室　寺島康子先生
(4)制作を強化するために
福島明夫氏（青年劇場代表）
(5)イキイキ何でもしゃべろう若者交流会

総会日程

8月22日（金）　13:00～14:30　運営委員会
15:00～18:00　総会
23日（土）　9:00～15:00　総会
会場はゼミと同じ熱海ビレッチ

全リ演西会議定期総会

8月22日（金）午後6時開会

23日（土）午後3時閉会

会場　京都八幡　養福寺会館

費用　6000円（予定）

西会議ゼミナール

8月23日（土）午後6時開会

24日（日）午後3時閉会

会場　京都八幡　養福寺会館

費用　1万円（予定）

内容

「熱闘10分間芝居」No.3

「即興ワークショップ」No.2

講師　絹川　友梨さん

東京芸術座『ウメコがふたり』

原作　安藤美紀男　　脚本　さねとうあきら
演出　杉本　孝司　　美術　幡野　寛
（撮影　藤原輝人）
2003年３～４月　アトリエ公演

幡野（はたの）　寛（ひろし）

１９４９年　山梨県生。
東京芸術座附属演劇研究所６期生を経て、１９７２年東京芸術座入団、現在に至る。劇団演出部に所属し、舞台美術（装置）を担当。
劇団員の故松下朗、園良昭に師事し、舞台美術を研鑽。
１９７７年、東京本公演・ロルカの「ベルナルダ・アルバの家」で一人立ちし、
１９７９年、サラクルーの「怒りの夜」
１９８１年、本田英郎作「勲章の川」
その後、リリアン・ヘルマンの「子供の時間」（82年）、平石耕一脚本「冒険者たち」（88年）、かたおかしろう作「男どあほう大忠臣」（90年）、平石耕一脚本「花」（95年）、橋本忍脚本・乾一雄劇化「私は貝になりたい」（95年）、平石耕一作「ウィンダミア・レディ」（02年）、平石耕一脚本「稲の旋律」（03年）など東京本公演を担当。この間、アトリエ公演での美術担当作品多数。現在、日本舞台美術家協会々員。
（東京芸術座　郡司）

舞台公演

◇劇団ひの
『煙が目にしみる』
11月30日～12月14日
堤　泰之／作　佐藤利勝／演出

◇劇団はぐるま
『雪女郎　ヒダのハスクナ夢語り』
2月21日～3月2日
林　大輔／作　汲田正子／演出

◇劇団支木
『恋におちて』
3月21～23日
伊藤一郎／作・演出
（写真は稽古中）

◇青年劇場
『袖振り合うも』
4月4～15日
山内　久／作　堀口　始／演出

◇劇団名芸
『ほたる追想』
4月4～6日
栗木英章／作　片野耕治／演出

◇劇団埼芸
『雪やこんこん』
5月24・25・31日　6月1日
井上ひさし／作　川村武夫／演出

◇劇団海鳴り
『死神』
5月11日
我孫子令／脚本　いがらし陽子／演出

◇関西芸術座
『ひとりぼっちのロビンフッド』
5月14～18日
飯田栄彦／原作　大塚雅史／演出
宮地　仙／脚色

◇劇団大阪
『スナーを探して』
5月16～18・22～25日
広島友好／作　熊本　一／演出

演劇会議

2003年7月12日発行　第112号

◆もくじ◆

グラビア（舞台）…… 1

ベルリン滞在記 ……芳地　隆介　6

銀河ホールの10年　あれこれ（1）
　―柿落しのこと言葉のこと ……川村　光夫　23

17年も続いた横浜の憲法劇 ……岩橋　宣隆　28

ソウル・はじめの一歩 ……長谷川由里　32

北から南から（劇団通信）…… 35

栗原省の『ガラスの動物園』
　――和歌山で見た地域演劇――……川村　光夫　51

観劇雑感　劇団湖（三笠）『幌内鉄道明治一番列車』
　―わが街三笠Ⅱ・鉄道編―　……宮津　泰子　53

劇評　東京芸術座『ウメコがふたり―露地裏の虹』 ……鈴木　太郎　55
　劇団埼芸『雪やこんこん―湯の花劇場物語』 ……〃　57
　福岡現代劇場・演戯集団ばあくぅ『夜の来訪者』 ……星野　明彦　58
　関西芸術座『ひとりぼっちのロビンフッド』 ……神沢　和明　61
　劇団大阪『スナーを探して』 ……〃　63
　四紀会「冬の桜」……今泉おさむ　65
　かすがい「銀色の狂騒曲」 ……〃　66
　神戸ドラマ館ボレロ　「こんにちは、母さん」 ……〃　67

西会議「熱闘10分間芝居」戯曲
　結婚申し込み「ささの葉さらさら」より ……楠本幸男／作　69
　公園―待ち合わせ……広島友好／作　72

情報ＢＯＸ …… 86
　研さん　さようなら　弔辞　86
　住所変更　87
　兵庫県劇団協議会創立35周年記念　懸賞戯曲募集の最終結果　87
　第68回公演「煙が目にしみる」アンケート（『劇団ひの』№173から）　88

2003年7月中旬以降の公演…… 89

全日本リアリズム演劇会議　住所録 …… 90

舞台

◇劇団すがお
『合縁奇縁』
5月23～25日
坂下初代／作・演出

◇福岡現代劇場
『夜の来訪者』
5月24～31日
J・Bプリストリィー／作
猿渡公一／演出

◇劇団かすがい
『銀色の狂想曲』
6月6・7日
高橋正圀／作　楢崎英三／演出

公演

ベルリン滞在記

劇作家　芳地　隆介

5月から6月にかけてのベルリンの空は、若葉が映えて実に美しい。3、4月のどんよりした空が嘘のようである。

昨年の3月末から6月の末にかけて、ベルリンに滞在した。そこを拠点に旅もしてきた。国内では、ドレスデン、ワイマール、国外では、ブタペスト、アムステルダム、ワルシャワ、クラクフ、アウシュビッツ等々をである。

目的は3つあった。1976年、当時の東ドイツの演劇際に招待されたとき、いわゆる大衆的と言われる舞台が観られなかったので、それを含めて芝居を観ること、2つ目には、東ヨーロッパ、とりわけ旧社会主義国の変化を見てみたいこと、併せて1945年、日本と同じく敗戦を経過してのドイツの暮らしぶりを知りたい。目的の半分くらいは達せられた。3ヵ月というのは、無論充分とは言えない。1年くらい住んでみたかった。

演劇1

ベルリンのポツダム広場、東京の日比谷といった所。最初に観たのが、昨年できたらしいステラ・ミュージカルシアターでの『ノートルダム』。5面くらいあるセリの上がり下がりで、舞台の進行は実にスピーディ。俳優は怪我をしないか、と心配になる。エンター

ベルリン国立オペラ座

テーメントに徹しており、バスを仕立てた観光客が詰めかけている。入場料は日本円にして約7000円。高いのは、ウォルトディズニーへ版権を支払っているせいらしい、ということがあとで分かった。

ベルリーナ・アンサンブルの近くに「パラスト」というレビュー劇場がある。昔の「日劇」とパリーの「ムーラン・ルージュ」の出し物を一緒にしたような舞台。がスケールは桁違いだ。観客席は2000人を越すだろう。此処も観光客が詰め掛け、当日では入れない。3時間、観客をたっぷり楽しませる。4000円。

その近くに「メトロ・カバレット・シアター」というのがある。たかをくって此処なら大丈夫であろうと、当日行ったが入れてくれなかった。俳優は男女2人。舞台は駅のホーム風。長椅子が1脚。ピアノ弾きと、アコーディオン弾きが各1人。この二人の登場も、一見浮浪者風に、駅のゴミ箱を漁りながら出て来る。しゃれている。漫談風と歌と2人のコント風の芝居で、2時間。老若男女の観客は笑い転げていた。ドイツ語のできないぼくは、ぽつんとして疎外感をたっぷり味わうことにはなったけれど。約1500円。

クーダム通り（東京の銀座のような通り）にも、2つの大衆劇場がある。1軒では、男優ばかり7人で小振りなミュージカルを演っていた。小さな舞台ではあったが、サッカー場であろう観客席を組んで、其処でそれぞれ歌でのやりとり、個性的な俳優ばかりで、実に魅力的であった。

もうひとつの小屋ではウェルメードな喜劇を演っていた。簡単な

構成風舞台で、電話での取り違えや、人違いなどを軸に展開し、途中で、女装した男優を前にして女優がふきだしそうになり立ち往生しそうになる愛敬などもあって、観客をよく笑いに乗せていた。２つの劇場とも観光客で、ほぼいっぱい。その劇場、ぼくが入ったら、席には、おじさんがすでに座っている。「これは、ぼくの席だと思うが……」とチケットを見せたが、「いや、ここは俺の席だよ」とその彼もチケットを出してゆずらない。後ろの席に座っていた中年の夫婦連れの神さんが、ぼくのチケットを見て「これ、明日のじゃないの?」「え?……」間違えたらしい。「いいわよ、いいわよ、この席空いてるんだから、観ていけばいいわよ」と屈託がない。彼らの並びの席に着いて、無駄足を踏まずにすんだ。

ベルリン・フィルを聞き、モダンダンスを観た、これは面白かった。レストラン風シアター（「ウインター・ガルテン」）で、コント、マジック、ダンス、等を並べた出し物も観た。その中に、日本のコントが１つはさまれていた。日本風の着物を着た男と、もう１人の男が空手などの所作をしながら、やりとりを進める。着物の男が口三味線で「さくら、さくら」を唸ったりするのだが、１つ終わる度に首を前にだすようにしておじぎの真似をする。その度にドッと笑いがくる。不愉快きわまりなかった。

しかし観客は実によく芝居を楽しんでいる。そしてよく食いよく喋べっている。どの劇場の入り口でも、２、３種類のパンと飲物を売っている。

ついでに言えば、ターミナルや人の集まる所では、様々な国の（無論、アジア風焼きそば等も）様々な食い物が、ファーストフードとして売られている。彼らは、腹がへれば時間かまわず所かまわず食ってるのじゃないかしら……、間違いない。

街と人と

ぼくの住んでいた所の近くの駅は、Ｓバーン（電車）もＵバーン（地下鉄）もハイデル

ベルガー駅と言い、歩いて5、6分のところにあった。バスもであるが、たいてい座れる。電車は夜になると駅員が居るのだが、昼間は誰も居ない。地下鉄は昼も夜も居ない。切符は自動券売機で買い、自分で刻印する。無論時々だが、いきなり検札係が乗り込んで来て、正規に乗車しているかどうかが調べられる。罰金はおよそ７０００円。何時だったか、何食わぬ顔して隣で座っていたおっさんが、いきなり立ち上がり、身分証明書を提示して検札にあったのには仰天した。切符は持っていたので、事無きを得たけれど。

Ａ、Ｂ、Ｃ地区と別れてはいるが、同じ地区内であれば、電車も地下鉄もバスも共通券で、２時間約２５０円。つまり２時間以内であれば、どれに乗ってもよい。12時間券で約５００円。この切符さえ買っておけば、１日中乗り回すことができる。時間さえ残っていれば、人から貰うこともできる。ぼくは、この券で、観光客がよく利用するという市内一周の路線バス（２階建）によく乗った。もちろん観光バスもちゃんと出ているが、当然のことながら皆よく知っていて、この路線バスを観光替わりに利用する客が多いせいで、時期や時間帯によっては、とても混んでるときがある。

ある日、Ｕバーンに乗ろうとして硬貨が無く、自動券売機に紙幣を入れようとしたのだが、どうしても入らない。学生風の若者が、見かねて代わりに手助けをして入れようとしてくれた……、のだが、やはり紙幣は入らない。残念といった顔をして青年は去って行った。小銭を取りに引き返して来るか、それとも無賃乗車してしまうか、（検札にさえ合わなければ、行けるのだから……）一瞬頭をかすめた。先程の青年が引き返して来た。自分の財布から硬貨を取り出し、ぼくの紙幣と取り換えてくれた。しかも実にていねいに数えながら。にっこりして青年は階段を上って行った。

芝居を観に行くときの駅で、その帰り道で、美術館を訪ねたとき、その帰りの駅で、人々は実に親切であった。歩きながら地図を見ていると「何処に行きたいのだ?」と尋ねてく

れる。「乗り換え駅まで同じだから、一緒に乗って行こう。そこで教えてあげる」と同じ芝居で客席にいた中年の紳士。「ちょっと待て、次の電車じゃないと目的の駅には行かないから」老眼鏡にかけかえ、ぼくの持ち歩いている路線図を見ながらの初老のおじさん。クーダム通りでバスに乗り込み、行く先を聞くと、「このバスは行かない」運転手が素っ気なく答えたので急いで降りたら、ぼくに向かってバスの窓に、１１９番と指で書いて教えてくれた乗客のなかの中年婦人。

ワイマールでは、2人の孫を連れて散歩していたおばさんは、ゲーテ記念館まで案内してくれた。ドレスデンでは「ぼくは旧市街に住んでるから、そこまで一緒に行きましょう」実に気の良さそうな青年が、旧市街の入り口まで連れだってくれた。ドイツ人のみならずであった。モンゴリアンから来て居るという女性。在独19年になるという韓国婦人、トルコの青年。数え上げればきりがない。しかし、のちに述べるが、外国人に対する応対、他の国々を旅した時にも変わらなかった。

さて、たいていの店は6時で閉店。ハイデルベルガー駅に向かう途中に、30代半ばの女性がテントを張って営業している花屋さんがある。ぼくは夕方になると、その前を通って駅に向かうから自然となじんで挨拶を交わす。花を買った。「どこから来たの、中国?」（という質問、今回はやたらに多かった。その理由についての推測はのちに述べる）「日本から」「どれくらいかかるの?」「〇〇マルク」「へーッ、此処にある花全部より高いんだ、ハハ……」。が、彼女がそこまで通って来ているのはＢＭＷ車であった。実によく働いている。殴る真似をして見せながら「亭主とは、喧嘩して別れたの。娘が一人いるけど」あっけらかんと笑っている。そういえば、小学校5、6年くらいの少女が、銭勘定を手伝いながら木箱を台にして勉強をしているのを、時々見かけた。この店も6時には閉められる。

個人商店が実に多いのだが、無論すべて土、日は休み。スーパーが土曜日2時半まで。

ベルリン『ベルリーナ・アンサンブル』近くのシュプレツ

だから土曜日は混雑する。デパートも平日は6時まで（サマータイムでは8時まで）、日曜日は休業。壊れかかったタバコの自販機はあるにはあるが（だから、出てくるかどうか信用できないので1度も買ったことがない）、その他の自販機は一切ない。それらをフォローするためか、ガソリンスタンドには、必要最小限度の、例えば水とかタバコ等は遅くまでおいてある。無論、レストランやバーは除かれるけれども。それで食っていけてる、生活が成り立っているのだ。何時だったか6時ぎりぎりになって、いつも買いに行ってるタバコ屋へ急いだのだが、一瞬の時間切れ、で売ってくれなかった。

10数年くらい前になるが、法律施行後、職業基準監督所のような所が、6時を過ぎてもカーテンをひいて、室内で仕事をしているかどうかを、抜打ちに巡回して違反を取り締まっているというのを、新聞のドイツ・ルポで読んだことがある。

いまや日本では、スーパー等は開店中の時間を、むしろ延長している。複雑な感慨におそわれる。労働時間を短縮して、ワーク・シェアリング、労働を分け合い、リストラに抵抗することがなぜできないのであろうか。労働者への皺寄せをいつまで甘受していくつもりであろうか。この国、とてつもない暗い淵に立たされている、と思われる。

演劇2

20数年振りのベルリーナ・アンサンブル。ブレヒトの腰掛けた銅

像も劇場のたたずまいも、そして劇場内もまったく変わっていない。やはり気持ちは高ぶる。最初に観たのがペータ・ヴァイスの『追跡と殺害』という芝居。精神障害者病棟が2階建の舞台として組まれて、中央に浴槽。皮膚病に苦しむ主人公（マラー）が水浴療法をしている。彼を殺害しようとする看護婦の恰好したコルデー。芝居の背景にはフランス革命があって、サブタイトルに『サド侯爵の演出のもとにシャラトラン保護施設の演劇グループによって上演された』が付くらしい。紙数と浅学のためにこれ以上触れられないが、風呂に浸かった主人公と家政婦や看護婦とのやりとりで進行し、無論真水が使われ、時には女優も裸をさらし（この芝居に限らずであったが）、舞台全体を廻して観せ、エキセントリックな見せ場を臆面なくてらいなく創っていく。その有無を言わせない力強さには、圧倒されたり辟易させられたりもする。２４００円。

非商業系の芝居は、のちにも触れるが、演出のコンセプトが強引な（と、思える）まで明解である。だから観る側にすれば、それに賛成か反対かの、自分なりの意志表示ができる。それが一種爽快な感じにさせられる。

よく知られているように、非商業系の芝居は全てレパトリーシステムであるから、月末には来月のレパトリーの一覧表が、劇場のカウンターに置いてあり自由に持っていける。数劇場からそれらを集めて来てつき合わせ、その月の観たい芝居の、自分なりのその月のスケジュールを作っておく。

ローザ・ルクセンブルグ通りのフォルクス・ビューネ（民衆劇場）へ、一覧表を取りに行った。ブレヒトの『バール』を演っている。幾人かが窓口でチケットを買って入っているので、聞いたら「当日券はある」と言う。混んでるだろうと思い、後ろの方の席を買った。１２００円。入ったらガラガラ、６、７００であろう席の３分の１程度。うーん、ブレヒトの芝居は、いまやドイツでもこの程度の支持であるのか、つい軽率な判断をした。

が、この浅はかさ、のちに見事なしっぺがえしを食うことにはなるのだが。

舞台は装置や効果音が面白く、言葉のメリハリが明確（と、推測であるが）で、ある種の格調を感じさせた。カーテンコール、少ない観客がどんな反応を示すか、興味があった。変わらなかった。延々と拍手。観客数の多少に関係無く、舞台への熱い激励。これはどの劇場でも同じであった。俳優は随分力ずけられることであろう。

同じくフォルクス・ビューネで『終着駅、アメリカ』を観た。この時も、いきなり行ってチケットが手に入った。後ろの方の席で、１２００円。この時はほぼ満員。これまた、本ものの皿を割ったり卵焼きを投げ付けたり、舞台奥にある風呂場をビデオに写し出して見せ、最終場面では、舞台全体を斜めに持ち上げてフィナーレ。途中の場面転換では、舞台全面の上部にスーパーで日時の経過と登場人物の簡単な説明（なぜか英語で）がでる。だから暗転にはならない。

ぺちゃくちゃ喋りながら、時々キスをしあっている若いカップルが、隣に座っている。他の場所でやればいいではないかッ、と、そうも言えず。舞台で女優が裸になると、女の子は男の子の目を覆ってみたりして、じゃれあっている。客席の居心地は、きわめて異化的（？）であった。こんなことは珍しい。

ベルリーナ・アンサンブルでブレヒトの『アルトゥロ・ウイの興隆』が演られる日、『バール』を観たときの経験から混んでるはずはなかろうと、たかをくっていきなり劇場に足を運んだ。キャンセル待ちの人達が並んでいる。「えッ、こんなに……」あなたも待つつもりなら、ここに名前をひかえるから、と窓口嬢が紙片を見せる。甘かった。50番目あたりだ。多分駄目だろうけど、と彼女の視線が笑っている。名前を書いた。その日10人くらいは入れただろうか、無駄足だった。それ以降は、電話で予約を入れることにした。予約番号を告げさえすれば確実になった。スケジュールの都合で『アルトゥロ・ウイ』はついに

観ることができなかった。

予約番号をとって、ベルリーナ・アンサンブルへシェークスピアの『リチャード2世』を観に行った。現代風に翻案して演じられ、またしても真水が散らされ泥が投げられ本火が出される。ぼくなどは、少々辟易するのだが、しかし演出のテンションの高さと俳優の緊張感には圧倒させられた。暗転の度に拍手である。それにも仰天した。

5月の1ヵ月間は、ドイツ語圏の演劇祭が、今年はベルリンで開催されている。『バール』を除いて前述の作品はいずれも参加演目である。

その演劇祭のために、日本から制作者のグループ（新国立劇場、シアターX、パブリックシアター、ニッセイ劇場、日経新聞等々）や国際交流基金での人達が招待されて来ていて、ベルリーナ・アンサンブルで出会った。観劇後、招待期間最後の夜であったらしく、ぼくも誘われ最後の晩餐に加わった。なかでは、オーストリアから来て演じた『ファースト』（上演時間10時間）が、最も感銘深かったというのが共通の感想である。ぼくは、上演時間の長さを聞いて尻込みし観に行かなかった。悔いが残った。

観劇全体としての意見は別れていた。真水や真泥や本火など、やたらに本物を舞台に乗せるというのは、どうも受け入れ難い、いやあれこそインパクトがあって面白い、と喧々諤々であった。本物が舞台に出てくるのは20数年前と変っていない。感慨深かった。舞台はフィクション、ぼくは前者の意見に賛成であった。

旅と人と

ベルリンの住まいからバスで10分位の所に、あまり大きくなく種類も少ないが、日本人の経営している「だるま」屋という食糧店があり、たいていのものは手に入る。味噌も醤油も、米はカリフォルニア産のコシヒカリ、日本での倍の値段ではあるが、それさえ辛抱

すれば1日の内、1、2食は日本食でやっていける。家具付きの部屋であったから、大体の調理器具も揃っている。ベルリンでの生活も1ケ月も過ぎれば、日常のリズムが生まれ、見慣れた風景になる。

ベルリンからは、飛行機で1、2時間飛べば外国だ。ハンガリーのブタペストへ行った。《ドナウの真珠》と言われているようだが、ドナウ河をはさんでブタ地区とペスト地区に別れていて、まさに街全体が美術館といった趣である。物価が安い。いくらか英語も通じる。1年くらい住んでみたくなった。「1ヵ月くらいで飽きるんじゃないか」同行の者に一笑された。

横にそれた通りに、韓国食堂「天厨」という小さな店があった。少しあやしい日本語で30半ばの女性が、迎え入れてくれた。彼女は、韓国人ではあるが名古屋に2年半留学したことがあるという。料理人の主人は中国人、だから中国語、韓国語は当然のこと、ハンガリー語、英語、日本語ができる。滞在が永くなると、あまりうまいとは思えなかったけれど、ついアジア風の食い物にちかずきたくなる。何度も通り過ごしていたのだが入り口の小さい、まさに「ありがとう」と看板に書いてある、日本人のやっている料理店を見つけた。開店して3年半になる。ブタペストには1千人くらいの日本人が住んでるという。やたらにスズキの車が多かった。ハンガリーに工場があるらしい。

オペラ座を過ぎて少し行った所に西洋美術館がある。よく知られていることではあるが、ヨーロッパの美術館の収集数は、どこも膨大な点数、それだけで圧倒される。ぼくは絵を観るのが好きだから、旅行先での美術館は見逃さないようにしているのだが、今回の旅では体力的にいささか困惑した。

地下の喫茶室で一休みしていたら、ブタペストに住む友人のアパートに転がり込んでの一人旅だという、若い女性に出会った。宮本輝の「ドナウの旅人」を読んで、「ドナウ河

の畔で、珈琲を飲んで帰りたい」と思って来てみた、と言う。オペラを安く観るには3階席で十分、劇場入り口が普通席と別だから、ちょっと癪だけど、と笑った。4月の半ば、日本人に出会ったのは彼女だけであった。

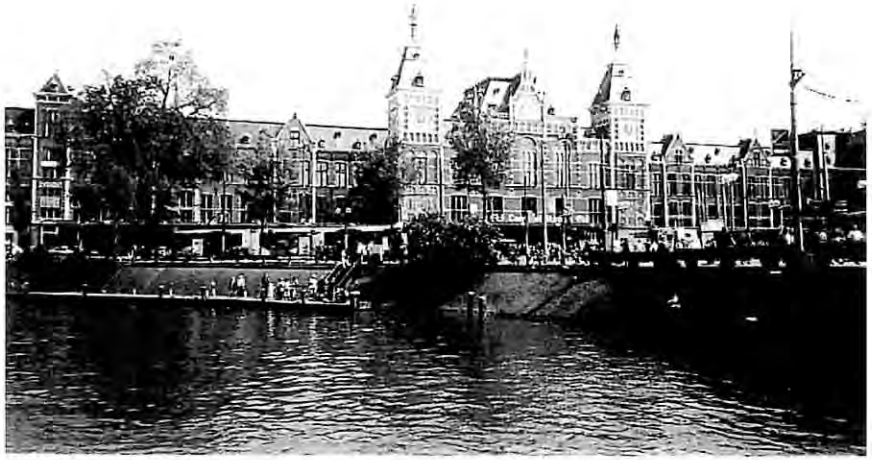
5月になると、見違えるようにベルリンの空は美しい。ベルリンから、飛行機で約1時間、オランダのアムステルダムへ行った。ベルリンはハードな感じがするけれど、それだけに整然としており、街全体の調和がとれているように思える。それに比べるとアムステルダムはソフトな感じではあるが、雑然とした趣である。特に中央駅の近辺一角は、様々な人種が往来して混雑狼雑である。その事情のひとつは、のちに分かることになるのだが。

が、アムステルダムに来てホッとした。英語が通じる、運河の乗合ボートのチケット売り場でもキオスクのおじさんでも、正確な英語を話す。仕事柄当然、であるかも知れないが、ヴァン・ゴッホ美術館を、花屋のおじさんに聞いても、レンブラントの家を散歩中のおばあさんにうかがっても、アンネ・フランクの記念館を、子ども連れの母子に尋ねても、きれいな英語で応えてくれる。お粗末きわまりないこちらの質問、恥じ入ってしまった。早くから海外に進出していたお国柄のせいであろうか。人口1500万人、観光立国のなさしめるところであろうか。

中央駅のほんの隣に、堂々と「飾り窓」が栄えていて、夜の通り、混雑した観光客に混じって歩いて行くと、自然にジーダイク地区に流れて行く。その威風さに眩惑させられる。混雑猥雑さに、少しホッさせられるのは、このせいであったのかも知れない。

が、この国オランダはワーク・シェアリングが、最も有効に機能していると言われている。

ポーランドも社会主義が崩れて10年あまりだ。ナチスの空爆によって徹底的に破壊されたワルシャワ、17世紀、当時の王が首都を、クラクフからワルシャワへ移転した。爆撃を



オランダ　アムステルダム中央駅

逃れたクラクフは、日本で言えば京都といった所であろうか。そのクラクフからバスで1時間30分、アウシュヴィッツがある。6月初旬、両都市を訪ねた。ベルリンから空路1時間。ワルシャワでは、定番と言われてるであろうキューリ夫人記念館やショパン博物館などを、道行く人に尋ねるのだが、ほとんど「分からない」と答える。不親切なのか関心がないのか、本当に知らないのか、そのいずれかであったのだろうが、アムステルダムの人達とは相当に違っていて、最初のうちは戸惑った。社会主義崩壊後10年あまり、そのことと関係しているに違いない。若者はともかく、中年以上の人たちがひどく素っ気なかった。地図を見ながら、徹底的に歩くことにした。日本のガイドブックの地図はよくできていて、大体たどり着くことができた。

ワルシャワから急行ノンストップで2時間あまり、クラクフに着く。クラクフには、2、3年前に完成した「日本技術・美術館」、通称「漫画館」がある。日本の浮世絵4600点が収集されているという。映画監督のアンジェ・ワイダが最終的に仕上げたものらしい。実際には300点くらいしか展示してなかった。浮世絵は痛みやすいので、ある期間交替しながら展示しているのだという。

その美術館の片隅に、軽い日本食を出しているビュッフェがある。日本の青年が運営していた。食しながら話し込んだ。かつての「連帯」のワレサ、劇作家のムロジェック、カントー等、多義にわたっての話し合いのあと、「多分もうご存知ないでしょうが、ぼくは、

石川淳の孫で一郎と言います」仰天させられた。ぼくの所には全集がある。「困ったことがあったら、何なりとどうぞ」その後会えずに帰ることになってしまった。

よく知られているように、アウシュヴィッツ第1収容所は、博物館にされていて、例の収容者の遺品が詰め込まれている。映像等でとっくに承知済みではあるのだが、あらためて現物を目の前にするには、やはり格別の覚悟がいる。バスが近ずき棟が見え出すと、やはり胸をしずめなければならなくなる。遺品を見ていて、急に嗚咽する白人女性が居た。男性が抱きとめている。バスで10分くらいの所に、第2収容所がある。

第1収容所を見て、第2収容所を見るに耐えられなくなった幾人かが、バスから降りて来られなくなった。広大な敷地に、収容所がそのままが残されている。

この土地を候補に上げ、土地を提供しよう、あるいはさせようとしたのには、どんないきさつや葛藤や軋轢や裏工作があったのか、無かったのか。土地を提供した連中は、どんな思いで過ごしたのか。ふっとそんなことを考えさせられた。ポーランドにおける負の遺産（ユダヤ人虐殺）、近年取り沙汰されていることが伝わってきている。

クラクフに戻って、行き当たりばったりに路面電車に乗った。均一料金。ここでも切符は自分で買って自分で刻印しなければならない。刻印機が古くてうまく差し込めない。狭い車内にも、幾つかある別な刻印機に差し込もうとするのだが、うまくいかない。見かねたのか、初老のおじさんが立ち上がり、もっと力を入れるんだよ、とやってくれた。乗客が笑っていた。寡黙で実直そうなそのおじさん、手を振って先に降りて行った。「いつまでもお元気で」どうしても伝えたかったのだが……。

演劇3

ベルリンに帰ると、多和田葉子さんの詩の朗読と高瀬アキ（ジャズピアニスト）さんの

ポーランド　アウシュヴィッツ第２収容所

ピアノとのセッションがあるから、ぜひ観るように、とシアターXの上田さんからファックスが入っていた。通りと番地さえ分かっていれば、ベルリンの地所は訪ねやすい。壊れかかったビルの入り口には落書きが所せましと書かれている。（落書きが実に多いのだが）まさかここではあるまい、隣の金属オブジェを造っているらしいアトリエの青年に聞いたら、其処だという。まさしくアングラ、今時日本には、こんな所はあるまい、建物があったにしても消防署に厳しくチェックされ使用不可能であろう。観客は60、70人くらいであろうか。詩の朗読とピアノが掛け合う。詩は前半はドイツ語、後半一部分日本語。ドイツ人がひどく喜んでいる。小柄な女性で、ちょっと素っ気なく表情をあまり現さずに、多分ドイツ人に対する相当な皮肉も込められていて、一種の可憐さに見えるところが受けているのであろう。日本語の朗読は、同じ言葉のニュアンスの違いを語呂合わせも含めて並べたり、物事の多面性を風刺して見せたりで、一種の透明感を表現しようとしている風に見受けられた。ピアノが言葉に負けずに、それ以上に力強く面白かった。ピンポン玉を鍵盤の上に放り込んで弾くなどのアドリブなどもあって、楽しませてくれた。

ベルリーナ・アンサンブルを背にして歩いて15分くらいの所に、ゴーリキ劇場がある。ブレヒトの『セチュアンの善人』を観た。装置が面白かった。主役の女優もよく演っていた。が演出面では不満が残った。そのひとつの例は、シェン・テとシュイ・タを2役に見

まがうように演じていることである。仮面を付けずに演っているので、かつらと衣装で完全に別人のように見えてしまう。無論演じ分けは見事であるのだが、見事であることによって、逆に二面性が薄れてしまう。薄れては戯曲の意図からはずれてしまうではないか。歌の唄い方にも疑問が残った。日本ではもう何度も観た芝居であるから、ぼくの好みもできあがっているのかも知れない。ドイツでの評判や批評が知りたかったのだが、今回ははたせなかった。ほぼ満員。２４００円。

ドイツでは時々議論の相手になってもらう、演劇学者のライナー夫妻は、ちょうど仕事でウィーンに出かけられていて、帰国寸前にしか会うことができず、相手になってもらう機会を失った。

同じくブレヒトの『コーカサスの白墨の輪』は、ゴーリキ劇場とは反対の、やはりベルリーナ・アンサンブルから歩いて10分くらいの所にあるドイツ劇場で観た。ほぼ満員。２４００円。

大小様々な発泡スチロールを舞台いっぱに散らばらしてある装置は、面白かった。しかしこの舞台にも不満が残った。そのひとつは、アツダクを酔っ払いにし過ぎて演じさせていて、そのためかやたらにテンションをたかくしている。２つ目はグルシェが若すぎる、生活感がただよわないのだ。しかし、そうであっても最後の場面ではやはり感銘を受けた。無論台本を知っているということもあるけれども、滞在期間後半になってくると、ドイツの舞台になじんできたせいでもあるだろう。

みてきたように言葉は分からなくても、楽しめるとこらはふんだんにある。演技、装置、照明、効果、コスチュウム、そして何よりも観客の様々、人様々を観る楽しみである。

暮らしと人と

電車には、自転車、乳母車がどんどん乗ってくる。そのための駅のスロープやエスカレーターは、ほとんど設備されていないから、自転車は横に担いで、乳母車はそこに行き会わせた男性が必ず片方を持ってあげて階段を上り下りする。ベルリン市内の道路には、車道と、車道側に自転車道（ベージュ色で）と、歩道が必ず設けられている。最初の頃、分からなかったものだから、自転車道を歩いていて、しょっちゅうベルを鳴らされて閉口した。

かつて、日本の赤字国鉄民営化問題が起こっていた頃、ぼくは最必要以外は車をやめて、駅まで自転車で行って列車に乗ろう、そのために列車の最後部に、自転車専用の車両を連結するよう国鉄に申し入れ運動をやろう、と言って一笑に付されたのを思い出した。

いま日本の道路のすべてに、自転車道を設ける公共事業をおこしたら、景気回復の一助になり、二酸化炭素の減少にも役立ち、一石二鳥ではあるまいか。本気である。

日本の同じ家賃であれば、ベルリンでは東京の倍の広さの部屋が借りられる。１９４５年同じように焼け野が原になった国である。

日本の敗戦当時、１軒でも多く１部屋でも早く、と考えたとしても無理はなかったかも知れない。しかしそのときにこそ列島大改造が必要だったのだ。無論政治の問題であり責任ではあるのだが。

テレビでは、ＢＢＣ（イギリス）とＣＮＮ（アメリカ）を見ることになる。アジアの時間帯では圧倒的に中国のニュースが多い。１週間に１、２回、日本のニュースは５秒くらいだが、中国は10秒から２分くらい。「中国人か？」とよく尋ねられた事情はこのあたりにあるだろう。ヨーロッパからみたアジアは、中国なのである。

にもかかわらず、日本のアニメがふんだんに放映されている。深夜になると、蕎麦屋が舞台のアニメまで流れている。

国と国との、というよりそこに住む人々との関係は、依然としていびつなのである。当

たり前、仕方がない、少しづつ正していけばいい。勇み足になってはいけないのだ。この国の首脳達の高ぶり方が、滑稽かつ悲惨に見えてくる。

ドイツ人口８２００万人、フランス５８００万人、オランダ１５００万人、ポーランド３８００万人、ハンガリー１０００万人、等々ヨーロッパに、日本より人口の多い国々はない。人口が多い国が大国などというのは錯覚である。太平洋戦争前の錯覚、経済成長という錯覚、有事〇〇という錯覚、抜き差しならないぬかるみに、足を取られているように見える。

ＢＢＣにもＣＮＮにも、スカンジナビアの国々はほとんどニュースにのぼってこないのだ。ニュースにのぼらないためにはどうするか。Ｇ７とかＧ８などと、舞い上がってはいけないのだ。本気になって生活の質を変えなければならない。

芝居を考えるというのは、そういうことであるはずだ。ベルリンでそんなことを、夢想していた。

（03・6・1）

銀河ホールの10年　あれこれ（1）

—柿落としのこと、言葉のこと

ぶどう座主宰・劇作家　川村　光夫

93岩手国民文化祭を契機として建設されたわが町の劇場、銀河ホールが開館して10年になる。建設の経緯などについては何度も書いているので、ここではその後のことを書くことにしたい。小さな町の文化施設として地域演劇運動の拠点として、何か出来たのか出来なかったのか、心のおもむくまま記すこととする。

１９９３年11月6日、人々の期待と不安の中で柿落し公演が行われた。不安というのは、人口4千余の小さな町が、13億円もの金をかけ、それが果して町民の仕合せとどうつながるのか、という疑問を持つ人も少なくなかったからである。

柿落とし公演の千田演出

柿落しは設計者の清水裕之教授（名古屋大学）の提案で、専門演劇人と地元勢（劇団ぶどう座、コーラスあかまんま、湯本鬼剣舞など）との合同公演と決まった。台本は地元からということで私が担当して、『夢喰いあらし』という祝祭劇を書いて、俳優座の千田是也先生に演出をお願いしたら、私が先生主宰の演劇研究団体の一員という御縁もあってか、快く引き受けてくださり、俳優まで手配してくださった。こうして先生門下の俳優とわがぶどう座員を中心とするキャストが出来上った。御高齢でもあることから演出助手に劇団東演の松川暢生、制作に横川功を依頼。かつての拙作上演のスタッフという御縁である。

この劇の陰の主役となる怪物「大荒肢」は、他人の夢を喰うことで生きのびている巨大な怪物である。その命名は同郷の作家三浦浩樹の作品「月夜の道化者」からお借りしたものであるが、その発想はどうやら土地に伝わる「沢内年代記」にあるのではと推察した。拙作はそれに北海道からの炭坑離職者がこの村に迷いこむという現代的部分を加えて劇とした。詳しい筋書きを記すのはやめよう。ただここで現れた大荒肢なる怪物は、やがて10年後の10周年記念公演にも現れてくることだけを予告しておきたい。

東京でも稽古を積み、銀河ホールに移ってからも先生は温泉旅館に泊りこんで、1週間ほどかけて、上演

の日を迎えた。稽古中こんな挿話があった。

劇中で人が夢をみると「夢こ玉」という虹色の玉が肉体を離れて宙に浮かぶことになっている。それを見

柿落とし公演「蝶が群れ飛ぶ舞台」

るや怪物大荒肢は得たりと玉に食いつく。すると夢みた人の命はたちまち失なわれ、骸となった身体からは無数の美しい蝶が飛び立つ。そこのところを先生は色とりどりの蝶を釣竿のようなものを使ってみごとに飛ばした。

あまりみごとなので別の場面でもう一度みせてほしいと先生に話したら、「うん、うん」と聞いておられたが、翌日になったら私の希望とはまるで別のところに、これまたみごとに蝶をとばしたのである。他人の意見を黙って聞き、それをはるかに越える舞台を一夜のうちに出現させた先生の演出力と、齢90にしてこの若さに脱帽であった。

先生はそのおりの公演パンフの座談会で、言葉について次のように発言しておられる。

「いや面白いです。土地の言葉で土地の伝説を書かれて、ことごとく面白い。言葉もね、方言はある意味で邪道ですけど、しかし方言以外にない。言葉というのは相手に働きかけて何かを変えたり動かしたりするものでしょう。そういう言葉の重み、それが最近の言葉にはなくなって、只のお喋りになっている。こんな軽薄なものありゃしない。（中略）本当はそれを現代語でやりたいんですが東京ではなかなか難かしい。そこで原点で堀り出したい」。

「方言はある意味で邪道」とおっしゃるのは、あくまで現代の演劇は現代語でやるべきだという主張があるのだろう。だが、それができにくくなっている状況へのいらだちと、ふり返るようにしてみておられる方言への視線を感ずる。

「観察によって知識はつくられる
だが観察するには知識がいる」
B・ブレヒト

演劇の言葉としての方言

銀河ホールの10年という主題から少々離れるが、ここで方言について書いておきたい。

「今日までも多くの演劇人が方言について関心を寄せてきた。民話劇の中で独得の地域語を創り出した木下順二は、地域語に対する全土語という上原専禄の造語を紹介して、全土語（つまり共通語）は、地域の生命力みたいなものを消してしまった」という意味の発言をしている（68年「国語通信」）。

別役実は「方言には不思議な力があります。方言で芝居をすると反応が違う。たとえば観客の体が自然に揺れてくる。標準語は耳で聞き取ろうとするが、方言は体で感じとろうとする」（02年元旦の朝日新聞）と指摘する。

言うまでもなく劇の言葉は、日常語をそのまま再現すればすむというものではない。日常語と舞台語とでは、次元が違う。作品と言葉の関係をみることにしよう。

木下順二の方言は、綿密に方言辞典に当たりながら、全国の方言を編みこんだ言葉である。その言葉によって木下民話劇は、全国に通用し、しかもそれぞれの故郷を感じさせるというものとなった。木下方言は様式化を予定した民話劇のために編みだされたものである。

それに対して真船豊の初期作品は、ギリギリの苦しい生活の中で苦闘する下層農民のエゴイステックなまでの心境をリアルに表現するものだった。そして伊賀山昌三翻案『結婚の申込』の秋田弁の痛快さは、たちまち人びとの共通語的虚飾を引きはがし、舞台の上と下との人間を裸にしてしまう。描こうとする劇世界と、そこでの言葉はひとつのものなのだ。

方言は失われつつあるが、地域生活の深層にはまだまだ色濃く残っている。われら地域演劇人こそ、多様な地域語によって、地域の活力を引き出すべきではあるまいか。

一方、その方言を舞台の言葉として肉体化しなければならない俳優の側の問題がある。かつて方言は共通語と比べ一段低いものとされていた時代がある。その時代の俳優は方言を低俗なものとして、愚鈍な者の言葉として、侮べつ的に扱っていた。その底には中央は高く地方は低いという考えが根底にあってのことである。さすがに最近はその風潮はうすらいできた。そのせいかむしろ反対に、地域語のもつ表現力に魅力を感じてきている人も多い。だがその魅力を充分感じとることができずに、方言は単に地方色を表すためだけぐらいに考え、やたら濁音を入れてうす

汚れた言葉にしてしまう人もすくなくない。方言の劇をやろうと思うならば、まずその魅力（音の響き、奇抜斬新な意味内容）に惚れこむことである。それが感じられなかったら、やめたほうがよい。

演劇祭シンポジウム

柿落し公演に先だって、93岩手国民文化祭が開かれた。銀河ホールでは10月15、16の両日、民話劇と語りの芸能として開催され、これが後に第1回銀河ホール地域演劇祭と位置ずけられることとなる。

その第2日目に、「地域と民話劇」というシンポジウムが開かれた。パネラーは劇作家木下順二、児童文学者松谷みよ子、社会学者見田宗介、コーディネーターとして劇作家のふじたあさや、そして末席に私が連なった。

今読み返してもなかなか充実した内容だったが、ここでは前段との続きで、方言あるいは言葉の問題での興味深い発言二つを紹介しよう。そのひとつが木下順二による『夕鶴』の登場人物の役名をいかにして選んだかということである。

「私は方言という言葉を使わず地域語と言いますが、3人の男がみんな地域語を使っているのに女性である「つう」は純粋日本語―これも私がつけたんですが、それを話している。世界が一つの時にはそれで通じるのに、世界が分かれていくと通じなくなる。それで結局（つうは）飛び出してゆく。（五十数年前の戦時中は）ちょっとでも不穏な話をしているとすぐ引っぱられてゆく。仲間同士でも信じられなくなる。そういうことで言葉の断絶というものが根本にあったんでしょう。同母音で揃えたんです。「ゆうづる」というのは全部「U」でしょう。「よひょう」が「O」、「うんず」はU、こういう名前の使い方を考えて、民話をもうひとつ違うドラマにしようと思って書いたんです」。

実はその数年前お目にかかったおり、「夕鶴」の登場人物の名前はどのようにして決めたのですかとたずねたことがある。その時作者は「音だな」と言っただけだった。私はすこし調子にのって、「惣ど」も「運ず」も、惣という名のつく人、運という名のつく人の総称、つまり多勢の人の代表。……複数だから「うんず」。つまらぬ洒落を言ったものである。

もうひとつはその日上演した劇団あしぶえの『セロ弾きのゴーシュ』に関する見田宗介教授の感想についてである。

「昼食のとき聞いたんですが、あの舞台をそのままアメリカの演

劇祭に持ってゆかれるという話ですが、そのことはとても面白いと思うんです。日本語のまま言葉が分からなくても、あの物語は人間と動物の話ですから言葉以前の問題になる。日本語じゃない所にそのまま持っていけるというのは本当に面白いですね」。

ご承知のように、その後、劇団あしぶえの『セロ弾きのゴーシュ』は、アメリカの演劇祭で最高の賞を得たのである。

左　銀河ホール
右　付属uホール（展示室・稽古場）

同氏は宮沢賢治の話から言葉の問題へ及んでこうも言う。賢治はエスペラント語と方言とをよく使った。「エスペラント語というのは、国家の壁を上から乗り越える言葉、世界語です。一方、方言というのは、地域に根ざすことで、国家を乗り越えることになると思うんです」。

なるほどそういうことか、国家という束縛から逃れることになるんだ。方言の世界に浸った時のあの解放感、あれにはそういう理由があったんだ。

だが書き添えておかなければならないことは、私自身日常生活ではほとんど方言を失い、せいぜい村の老人たちと会話を交わす時以外は使うことがなくなった。これが現実である。ところが不思議なことに劇作に向かうと、死語になったと思っていた方言までもが、われもわれもと湧き出てくる。私は劇の中で人間回復をはかろうとしているのかも知れない。当分は共通語と方言と二刀流でゆくしかあるまい。

「銀河ホールの10年」を書こうと思って始めた仕事だが、これまで書いてきたことは、最初の年1年間の出来事と、それにともなう回想にとどまっている。もっとも急いで単なる年代順の出来事の羅列を書くつもりはない。次回は銀河ホール10年の事業の中心となってきた、「地域演劇祭」をめぐって書くことにしたい。

註、本文中にあるシンポジウムの記録を読みたい人は、500円切手を同封して銀河ホール（〒029—5511　岩手県湯田町上野々39—195—2）に申込めば、コピーをしてお送りします。

17年も続いた横浜の憲法劇

憲法劇上演実行委員会委員長　岩橋　宣隆（弁護士）

1　横浜の憲法劇

今年の5月10日の夜、100人近い出演者はエンディングで、力いっぱい「手のひらに憲法」、「がんばれ憲法！　ファイト・ザ・憲法」と歌い続け踊り続けました。450人の観客は手拍子と歓声で呼応してくれました。2時間20分の上演で、舞台と観客が一体となった瞬間でした。

横浜では、市民の手づくりの憲法劇が17年間続いています。題して、わたしたちの憲法劇「がんばれッ！日本国憲法」です。毎年5月3日の憲法記念日の前後に3回上演しています。舞台には小学生から70代の方まで、100人近い人が上がります。観客数は毎年約1800人で、17年間で延べ約3万400人にもなりました。

毎年マスコミでも取り上げられ、1997年には、「日本ジャーナリスト会議（JCJ）のJCJ特別賞を受賞し、また2000年には横浜弁護士会の人権賞を受賞しました。横浜の憲法劇が刺激になって、埼玉や広島、福岡でも新しく憲法劇が生まれて、毎年上演されています。また、神奈川県内でも藤沢などにもひろまっています。

2　憲法劇の魅力・特徴

横浜の憲法劇には、いくつかの魅力や特徴があります。

まず1つ目は、「憲法を身近なものとして考えよう」という基本理念です。憲法というと一見堅苦しくなじみがないように思われがちですが、しかし私たちの日々の生活、暮らしを支えている身近なものです。憲法劇は、憲法が普通の市民の生活とともにあること、生活のなかに憲法を生かすことを訴えます。この考えは、17年前、最初に憲法劇を準備した時に参加者の1人である主婦の方が訴えたことです。この精神は脈々と今も受けつがれています。そのため、神奈川県内で最近1年間に起きた具体的な出来事や事件を、できるだけ分かりやすく取り上げるようにしています。ときには、事件の当事者に舞台に立ってもらうこともあります。1997年の舞台では、私立高校を不当に解雇された先生自身に、自分の役を演じてもらいましたし、また、同級生からのいじめで

自殺したこどものご両親に直接心情を述べていただいたこともあります。

2つ目は、ミュージカル風の芝居だということです。3つか4つの芝居を歌と踊りでつないでいくのです。10代から70代までの数十人の合唱と群舞はパワーがあって、観客に元気を与えてくれます。特に、若者の熱気が舞台いっぱいに溢れて、そのエネルギーが観客に伝わり、舞台と観客が一体となります。伴奏は、生バンドです。「くろだゆうじ＆織音座」が最初から担当してくれており、音楽の楽しさと魅力や威力も目いっぱい発揮してくれています。無論、全部オリジナル・ソングです。実行委員会のメンバーが作詞し、それを黒田雄治さんが作曲します。憲法ソングは、これまでに100曲以上にもなります。エンディングで歌われた冒頭の曲は、最初の年から歌われ続けているスタンダードナンバーです。

3つ目は、何より明るく、楽しいことです。深刻な事件でも、ユーモアあり、ギャグあり、かけあい漫才ありの楽しい舞台に仕立て上げられています。このような台本を最初に作り、毎年書き下ろしてくれているのが、アマチュア劇団「蒼生樹」の座長濱田重行さんです。濱田さんは演出も手懸けてくれており、100人近い参加者のエネルギーと迫力を引き出してくれています。濱田さんは、素人の出演者に対して、上手さを要求しません。一生懸命やることだけを要求します。手抜きの演技をすれば、おとなでも子どもでも本気になって叱ります。怒鳴られて、けい古場で泣き出すおとなもいます。

4つ目は、若い人が極めて多いことです。出演者の半数は10代です。大学生、高校生、中学生そして小学生もいます。憲法劇を観て自分も出たいと思ったり、友達に誘われて集まってきた若い人たちです。憲法劇で育った若い人たちが運営や裏方にも参加してくれています。憲法と聞いただけで、私には関係ないという若い人やおとなが多い今の世の中で、横浜の憲法劇はなぜか若い人たちから支持されています。学校では

学べないことや魅力が、憲法劇にはあるのでしょう。おとなも子どももみんなが力を合わせて、上演という一つの目標に向かう経験はいまどき貴重です。また、社会のさまざまな問題を目の当たりにして、自分なりに深く考えたり悩んだりしています。さまざまな学校から集まってきていますので、お互いに情報を交換したり、本音で話し込んだりして、本当の友達を作っているようです。

3　長く続いた秘訣

憲法劇は、今までにないユニークな憲法運動との評価を受け、横浜では恒例のイベントになっています。最近、「長く続いた秘訣は何ですか」とよく聞かれます。1987年に初めて上演したときは、憲法施行40周年記念の1回だけの公演のつもりでした。それが好評だったため毎年上演するようになってきたのです。毎年続いてきた秘訣は、何と言っても今まで述べてきた憲法劇の魅力と特徴にあると思います。この魅力と特徴が市民、特に若い人に歓迎されて、憲法劇を観た人が翌年舞台に上がるというようにして、今日まで続いているのです。

長く続いた秘訣には、市民による手づくりの運動だからということもあります。初めの頃は、青年法律家協会の弁護士グループが中心になって市民団体と一緒にやっていましたが、そのうち、興味を持った市民一人ひとりが運営を担うようになってきました。実行委員は、教員や公務員、看護士、サラリーマン、OL、弁護士、学生、フリーターなど様々です。市民運動ですから出入りは自由です。

憲法劇は、17年間いつも順調であったわけではありません。観客数の減少、財政不足、人手不足などいろいろありました。しかし、その都度みんなで話し合い、知恵を出し合って乗り越えて来ました。市民運動が持っている「しなやかさ」と「したたかさ」が長く続いている秘訣です。

長く続けていくための秘訣は、財政が黒字でなければならないことです。1年間の運動と舞台作りで、約400万円の実費がかかります。憲法劇は、チケットを1枚1枚売って賄います。表現の自由を守るために、協賛金や補助金は受け入れません。1枚1枚売ることが運動であり、拡げるために必要なことだと考えています。

4　おわりに―憲法劇のこころざし

今年の憲法劇は、大量のリストラ問題と小中学生に昨年から配布されている副読本「心のノート」の問題、さらにイラク戦争と有事法制の問題を取り上げました。

上演後の6月6日に、有事三法案が参議院を通過し成立しました。有事三法は、憲法9条に明白に違反するものです。自衛隊の海外での武力行使を認め、アメリカの理不尽な先制攻撃に参戦し、民間・国民に戦争協力を強制するものです。憲法劇は、今後も有事法を発動させないために、また、有事法の廃止に向けて、上演を続けていくでしょう。

平和憲法を実現するまで。憲法劇を通して、憲法の素晴らしさと大切さを市民の間に草の根的にひろげていくでしょう。

これからも肩ひじはらずに楽しみながら、横浜の憲法劇をみんなで続けていきたいと思います。

（いわはし　のぶたか）

ソウル・はじめの一歩

劇団銅鑼　長谷川　由里

3月31日。成田空港から帰宅の途中、車窓から飛び込んできたのは満開の夜桜だった。「帰って来たんだ」。桜を見て日本を感じる。たった9日間だったがこの韓国滞在は初めての私に何をもたらしてくれたのだろうか――。

イラク、北朝鮮の情勢が怪しくなりつつある時『センポ・スギハァラ』の韓国公演が本決まりとなり準備を進めた。本当に渡航できるのか。無事公演できるのか等々、不安を抱きつつも韓国入国手続きを済ました私たちは一路ホテルへ向かった。広大な干潟を眺めながらソウルの街中へ。これから私たちが過ごす街だ。車もビルも人も東京と変わらない混雑ぶり、予想ではもっと漢字が多いと踏んでいたのは大変な思い違いでどこを見てもハングル文字だらけの看板群だ。ホテルは景福宮や徳寿宮に歩いて行ける位置にある。出発前から李朝文化に興味を抱きソウル内の五大古宮はぜひ訪れたいと願うのだが、仕込み、リハーサル、本番5ステージと忙しい9日間、果してそれは可能だろうか?

着いた翌日〈板門店ツアー〉に出掛けた。国境の街、板門店。勉強不足でおまけに映画「JSA」も観ていない私には想像もつかず、とにかくバスの中でガイドしている韓国人女性の言葉に耳を傾けた。李氏朝鮮王朝創建から現在まで、途中車窓の風景の説明を入れながら1時間近く話してくれた。昔旅人が休んだ、日本でいえば宿場町だろうか、多くの店々が立ち並んでいたところから〈板門店〉と名付けられたそうだ。現在は草木におおわれ野鳥が飛び交い巣を作る場所だ。

まずオドゥサン展望台を訪れた。漢江と臨津江が合流する地点、川の向こうに北朝鮮の住居群が見える。説明によると宣伝用の建物でだれも住んではいないらしい。展望台の中には北朝鮮で製造されているというラジカセやバックなどが陳列され、小学校の教室も復元されていた。続いて国連軍のベースキャンプに向かい、軍人の警護付のバスに乗り替え、施設の中でビデオ研修の後〝何事が起きても一切自分の責任とする〟という誓約書にサインしてから国境に向かった。

国境南北2kmは非武装地帯であり南側は国連軍が警護に当たっている。まず韓国側の〈自由の家〉という近代的ビルの中を2列で移動し外に出ると青い平屋が3〜4戸並んでいる。その中央の軍事停戦委員会会議場に入ると中もブルーで統一され大きなテーブルが中央に配置されていた。その縦半分に南側、向かい側に北側の代表団が座る。つまりこの建物は国境をまたいで建てられているということだ。中では自由に歩いたりカメラ撮影もできる。その間、警備兵は一寸たりとも動かず人形のように立っている。外に出て監視台に登る。錆ついた小さな立札や1m高のポールが点々と立っている。どれも国境を示しているという。そして対峙している無言の建築物たち。同じ民族でありながら現在休戦中の国と国、しかも自分たちで築いた国境ではない。遠い昔、三強国から一国に統一され、やがて日本を含む諸外国の干渉に揺さぶられ、北と南に分断された。かの大戦が決して遠い歴史ではないのだ。

軍事停戦委員会会議場内　一寸たりとも動かない国連兵（筆者中央）

さて、その大戦中、生き抜こうとする人々と滅ぼされようとする尊い命を救った人間の物語『センポ・スギハァラ』を上演する日が来た。スタッフの一部はインターネットによるボランティア募集をしたという、たくさんの申し込みの中から選りすぐりの人々が熱心に私たちやお客様をサポートし、同時通訳は有名な3人の声優の方々が担当してくれた。心憎いまでの受け入れ準備だ。

初日は教授、大使館関係等々の招待客が多かったが、2日目からは一般のお客様が多く反応が手にとるように伝わってきた。親子、学生も多い。一幕の終盤から鼻をすする音が聞える。終演後お客様を送り出したスタッフから感動の二文字を聞く。評論家大笹氏の初日レセプションでの言葉が頭をよぎる「この劇では人々の別れの場面が描かれています。この別れというものは韓国にとって胸に響くものであり、実感と感動を呼ぶことでしょう」。

ところで念願の王宮巡りだが、公演前の空き時間に徳寿宮と景福宮だけ訪れることができた。偶然にも王朝最初と最後の王宮だ。徳寿宮は7年間王宮として使われ、一時期その役割を離れたが、270年後に再び

王宮となり高宗皇帝の最後を飾った。そして景福宮、王朝を興した太祖李成桂がソウルへ遷都したのち建造した正宮である。以前読んだ「閔妃暗殺」（角田房子著）を思い描く。露・米・英などの列強国との勢力争いにいきり立つ日本、「朝鮮独立のため」という名目で勢力拡大を計るなか、赴任してきた軍人あがりの公使がロシアと親交の深い王后閔妃の暗殺を企てる。景福宮の正面を守る光化門に梯子をかけて開門しすざまじい勢いで破壊を続けながら王妃の寝所まで突進してゆく。その暴徒たちは日本軍をはじめ日本民間人と一部の朝鮮民間人、やがて白刃のもとに崩御した閔妃。その後退韓処分となった日本主謀者たちは裁判にかけられたが、全員無罪。国母を殺された朝鮮国民の恨みはどれほどのものだったろうか。51年後、日本は原爆と敗戦という罰を受けたが、朝鮮は北と南に分断される結果となった。

景福宮の本殿を守る興礼門

そして今、私たちはこのソウルで心暖かいもてなしを受け、公演文化産業研究所理事長、金先生をはじめスタッフの方々や観客、街の人々との素敵な交流が繰り広げられている。もちろん一般ツアー客同様、エステや韓国料理を味わい美酒に酔い、活気あふれる南大門市場や骨董通りの仁寺洞でのショッピング、と発展しつづける現在のソウルを感じている。

日本と韓国、それぞれ自ら過去を切り捨てるか、あるいは受け入れて教訓とし発展をとげてきたかのどちらかだろう。日本はきっと前者だったに違いなく、これから省みる機会を得ることだろう。私は、他国と共に少しづつでも歴史を深く理解し心に植えつけながら新たな道を歩んで行かなくては、と遅ればせながら思ってやまない。

金先生をかこんで

――それにしても成田からの帰宅の車窓夜桜を眺めながら、マッコリ（韓国地酒）を口にしたらさぞ美味しかろう、と私はソウルへのはじめの一歩に満足していた。

北から南から

――――――

るのですが、今回は10周年記念公演ということで、交通の便のいい「札幌市こどもの劇場やまびこ座」での公演となりました。内容も、今までのレパートリーの中から人気の高い作品を並べ、筝とのジョイントにも取り組みました。異なったジャンルの方と一緒に公演することで、今までと違った世界を創り出すことができ、新鮮な感動を覚えました。

公演班の方は、小劇場向けの『おにの子こづな』が5月の半ばから道内を巡演しています。5月下旬からは今年で最後となる『やまんばのにしき』が島根県を巡演します。その後、2つの班のメンバーが合流して、6月下旬より『ふうしゃまわる』の公演がはじまります。

週5日制や、少子化など取り巻く状況は、なかなか厳しいものがありますが、私たちの芝居を心待ちにしてくださっている方のためにも、頑張らなければと思っています。

（嶋田純子）

〔劇団新芸〕

久しぶりに近況を報告します。3月8・9日、小樽市民会館で第16回小樽市民劇場、大石章／作『永倉新八・浪士報国記事始末』二幕七場に参加しました。主演に鹿角が、重要な脇役を広光が勤め、実質的演出と舞台監督を谷川が、音響オペレーターに奥が、大道具に岡部が、といった総出での参加でした。幕末に活躍した元新選組の幹部で晩年を小樽で過ごした永倉新八を題材にした創作劇です。キャストスタッフ合計70人。邦楽、邦舞、市内4劇団等の構成で、講談あり、津軽三味線の演奏による舞あり、迫力ある殺陣ありなど作品としておもしろい仕上りになりました。ただ、広報に1回も載らなかったり、券の発売が1ヵ月前になっていたりで観客が14万の人口で600人だった点でプロデュースの小樽市民劇場運営委員会のあり方に疑問が残ります。

新芸としては3年ぶりに『小樽・運河・桜坂・第2部』を10月4日に上演します。実力No.1の渋谷健一／作、飯田信之／演出なのです。主なキャスト14人が頭の痛いところです。重要な役の若手男優4人を始め、あらゆるところで人手不足です。ユニーク・フリークシアターが全面的に参加してくれるので、女優陣は大丈夫です。どうやって進めてゆくのか見えません。が、何か良い舞台になりそうな気がしています。

来年は北海道演劇祭が小樽であります。おもしろいけど、ひどく大変な2年間になりそうです。

（宮津）

〔劇団弘演〕

待ちに待った春が来て、桜の花に酔いしれていたと思ったら、あっという間にネプタの準備が始まっている。時間が過ぎるのは早い、特に年々早くなっているような気がする。時間ドロボウは、本当にいるらしい。

さて、秋の本公演、劇団創立40周年記念、近石綏子／作『そして、あなたに逢えた』に向けてスタートを切った弘演ですが、今回は久々の大所帯、スケジュール調整に四苦八苦しながらも、楽しい稽古場です。今回初めて舞台に立つ後援会の会長さん、「私なんか、ダメダメ」と言いながらの熱演に我々の方がタジタジです。

一方、有事法案が衆議院を通過、参議院へまわるギリギリのせめぎ合いになり、いたたまれない焦燥感におそわれています。8月には、去年に

引き続き、朗読やショートドラマによる「戦争反対!! 平和のつどい」のイベントを、何としてもと、検討中です。

やることといっぱい、忙しいけど、時間ドロボウに時間をぬすまれないよう上手に使って、頑張ります。

（作間しのぶ）

〔黒石演劇研究会〕

年が明け、楽しみにしていた冬季アジア大会も弘前さくらまつりもゴールデンウィークもあっという間に過ぎ去ってしまった今日この頃ですが、皆さんはいかがお過ごしでしょうか。

さて、私たち劇研は昨年11月9・10日に高橋いさを／作、古川幸仁／演出『ここだけの話』を黒石市民文化会館多目的ホールで2日間にわたって公演しました。

キャストは6人だけど、略2人だけでの演技だったので、本番はもちろん、稽古もいろいろ大変でした。けど私は、演劇が好きだから稽古や舞台製作など大変だけど、「自分が納得でき充実できた公演だったなぁ」と終ってから反省しています。で、1週間くらいは、劇のことが頭から離れず仕事のときもボーッとなってます（笑）。

まぁその反面、会員が少ないというのが、今劇研の中で最大のピンチです。劇団の方に誘うのですが、なかなか入会してくれず…。どうしたらいいのでしょうか。うーん考えなくては…。

今年の公演も昨年と同じ場所で、第60回の公演となります!!。公演予定は11月8・9日（土・日曜日）です。今年は第60回なので、稽古や本番を気合入れて頑張っていきたいと思ってます!! ヨッシャ〜!!

（三浦由貴）

〔劇団支木〕

みなさんお久しぶりです。

支木では3月21〜23日にアトリエ公演『恋におちて』を4ステージやりました。3月なので春公演——と思いきや、昨年の秋公演がのびのびになったもの。運営委員長・伊藤一郎の「レシピ」に次ぐ第2弾を何としてもやろうということで、ひと冬の産みの苦しみをへての上演でした。

今年が40周年ということで地元の新聞に2回も前宣伝が載ったことから、初めてのお客さんが結構来てくれました。タイトルからは想像できない津軽弁のユニークな会話と展開に笑い声が絶えなく、楽しい空間を作り出すことができたと思います。

4月には総会を開き、劇団のかかえる問題や悩みを率直に話し合うことができました。全国のみなさんも同じかもしれませんが、少ない実動員数の中でひとりひとりの負担が大きくなり、定期公演をやっと開く状態。あわただしい日常に芝居をつくるエネルギーが吸収されていっているような…どんよりとした雰囲気が団内に漂っていました。でも半日にわたる話し合いでお互いの思いを理解しあい、結束できた感じです。

いまは、11月予定の40周年記念公演成功にむけて取り組んでいます！

（有馬美恵）

〔劇団だいこん座〕

現在、6月21日に公演する『冒険者たち』小田健也／作、石川富志夫／演出、鶴岡市中央公民館ホールにての稽古がすすんでいます。ネズミのガンバの冒険物語。

海がみたい。港へ行こう。船に乗るぞ。島のネズミを助けるのだ。ボーボ、ヨイショ、ガクシャ、イダテン、イカサマ、シジン、オイボレ、どん

どん仲間がふえていく。「ノロイがきたぞ！」。ネズミとイタチの闘いがくりひろげられます。一対一ではネズミはイタチにかないっこありませんが、数匹がかりで立ちむかいます。とにかくにぎやかなのです。

小学5年生、6年生が7人、中学生2人、高校生2人、大学生1人、大人が8人参加した今回の芝居は稽古場がにぎやかすぎるのです。演出の「とにかく動け！　走れ！」という声にどう動いたらよいかわからずに、でも楽しくて楽しくて毎回かしましい声がひびきわたっています。ガンバとその仲間が自由に舞台を走りまわる姿を本番で観られることをひそかに期待しているのですが……。

〔劇団銅鑼〕

☆「アンニョンハセヨー」いつもとチョット違った挨拶で劇場入り。3月下旬『センポ・スギハァラ』韓国公演は、大戦中の日本人の芝居はどうかなぁ!?　という不安を吹き飛ばして大成功。終演時には拍手、口笛、声援の大熱狂でした。〔詳しくは別項、長谷川由里の韓国公演レポートを!!〕

☆3月初旬の俳優座劇場での『大試演会』はいつもの銅鑼とは一味違う、芝居、歌、コントなどもりだくさん。お客様も当の劇団員たちも大変有意義な創作発表の場を楽しみました。

☆6月8日（日）『センポ・スギハァラ』は4年ぶりの東京公演を行います。現代の社会・世界情勢を考え上演ごとに改良を重ねています。お客様の評判や、公演模様は次号でご報告します。

☆9月12日（金）～9月15日（月・祝）東京芸術劇場小ホールにて『Big brother』（作／小関直人、演出／山田昭一）を上演します。作者の小関は普段は劇団の若手制作者。前作『池袋モンパルナス』は池袋演劇祭で大賞を受賞など大好評。今回は彼のオリジナル作品です。必ずやお楽しみいただける作品になりそうです。どうぞご期待ください。

☆『らぶそんぐ』と『センポ・スギハァラ』が旅公演に出発します。現在モウ稽古中!!全国のお客様に楽しんでいただけるように頑張ります。

（黒田志保）

〔劇団蒼生樹〕

3月8・9日、藤沢平和ミュージカル『もっと◎平和に』の5回目の上演に参加しました。藤沢市が制定した「平和条例」に基づく平和事業の一つとして、始められた平和ミュージカルですが、右翼の攻撃で市の補助は得られなくなってしまっても、市民の手作りで続けられています。これには、台本、演出で座長の濱田重行、スタッフに座員の有志が参加しました。

この春スタートに若手座員中心に神奈川県演劇連盟合同公演【「あの空の向こう」芹沢孝洋／作・演出3月15日～16日（3回公演）神奈川県立青少年センターホール】に参加し、とても良い経験となりました。この公演を通じ各スタッフとしても参加し、加盟劇団との交流も深めることができました。

また、同じく3月に劇団員有志による自主公演【『リアさんちの三姉妹』3月21日～23日（5回公演）STスポット】を行い、ご好評いただきました。

横浜の名物にもなっている憲法ミュージカル『がんばれッ日本国憲法』の17回目が上演されました。改憲論議が高まるなか、毎年違った内容で「憲法」を護るこういった運動にはめずらしく10、20代が多く参加し、若々しい力を発散しています。17年間一貫して台本、演出で濱田重行、スタッフで座員有志が参加しています。

今後の予定は、第43回公演『マクベスの妻と呼ばれた女』篠原久美子／作、勝碕若子／演出を7月11日～13日横浜市教育文化ホールで上演します。本作品は、劇団10年ぶりの再演となり、われわれ蒼生樹の成長ぶりが、観客、座員ともども楽しみな作品です。

また、9月7日（日）には、第11回岩手湯田町銀河ホール地域演劇祭において『御存知遠山藤之丞一座―痛みに耐えろよ土俵入り―』を上演いたします。新しい東北の地で新しいお客様に会えること座員一同楽しみにしております。

（岡本）

〔演劇サークル麦の会〕

全リ演の皆様、お元気ですか。ご活躍のことと思います。

さて、私たち、麦の会は、定期総会を開き、秋の公演を決定しました。以後、脚本の選定を行い、4月臨時総会を行い『わがママわがママ奮闘記』を上演することにしました。介護老人をかかえた家族を描いた作品です。

今年は、創立50年を迎え、半世紀続けてきた私たちの歩みをしっかりと受けとめて秋にむかって稽古をはじめました。

公演は、10月24、25日　六本木の麻布区民センターにて、麻布演劇市参加として行います。

久し振りに多くの会員参加で、会員一同張切っております。よろしくおねがいします。

（吉岡）

〔劇団ひの〕

はじめての通信になります。報告が遅くなりましたが、昨年11月～12月にけいこ場にて、全リ演でもお馴染み『煙が目にしみる』を3週間8ステージ上演しました。連日満席大入り（と言ってもキャパ40席）で、好評の中で幕を閉じることができました。堤泰之さんの作品は、一昨年上演した『見果てぬ夢』に続く2作目。日々の生活にある題材なので琴線に触れる部分があり、多くの人の共感をうむ作品です。前向きな側面を強調して創造に挑みました。

現在、8月2～3日にお隣、八王子市にある芸術文化会館いちょうホールで上演するシェイクスピア『夏の夜の夢』に向けて取り組んでいます。小・中学生7人と20～60代の21人、合わせて28人が、出演します。

言葉・言葉・言葉……饒舌な台詞、言葉の掛け合い、散文と韻文の結合。豊かな言葉とユーモアにあふれています。簡素な装置、極力照明や音楽を使わず、言葉の表現に重きをおき、役者と観客の想像力をひきだす舞台を目指しています。

当日は、八王子夏祭りの真っ只中。祝祭劇でもあるこの芝居をそのお祭り気分の中で、楽しく催し、一夜の夢を創りあげたいと思います。

劇団「ひの」は、今年5月に創立30周年を迎えます。6月末に「記念のつどい」。後援会さくらぐみを中心に記念誌の発刊の準備をしています。

夏ゼミにも、なるべく多くのメンバーで参加したいと思っています。よろしくお願いします。

〔東京芸術座〕

国連決議無しの不法不当な

米英軍はイラクへの侵略・破壊・多くの子どもたちを含む一般市民の犠牲など、世界の人々の願いを踏みにじり、主権国家を侵害し続けています。

日本の政府も米国に追随し、米国の先制攻撃をも支持し、それを後押しする国内の有事法制化を野党の一部を抱き込み画策しています。

この間、著名演劇人の呼び掛けでイラク戦争反対の意志表示を演劇人らしいパフォーマンスで行ないました。紀伊國屋ホール、サザンシアターを満員にし、しかもどちらも400人以上が会場に入れませんでした。

世界から戦争が無くなる日まで、NO WARの声を演劇人はあげつづけます。

こうした状況に合わせて、3月29日～4月6日、さねとうあきら／脚本、杉本孝司／演出『ウメコがふたり』をアトリエで公演を行ないました。昭和14年、日中戦争たけなわの頃を舞台に健気に生きる庶民の姿を描き、戦争の時代には決まって受ける庶民の悲哀を客席に届けました。

7月25日（金）には、夏休み児童青少年演劇フェスティバルに参加し、渋谷の都児童会館で公演します。

今年の9月公演は、六本木・俳優座劇場で11日～14日まで、旭爪あかね／原作、平石耕一／脚本・演出『稲の旋律』の公演。

ひきこもりの女性と稲作に情熱を傾ける男性との琴線に触れる交流の中で、女性が心を開き始めていく姿を描き、家族のあり方、自然との共生などを提起して行きたいと思います。

地方巡演は『十二人の怒れる男たち』（レジナルド・ローズ／作、稲垣純／演出）と『夏の庭』（湯本香樹実／作、印南貞人／演出）で、それぞれ高校と子ども劇場・おやこ劇場公演。

劇団長老、西島悌四郎さんがこの春に亡くなり、5月24日（土）稽古場で偲ぶ会をもちました。（文責・郡司）

〔青年劇場〕

皆さんお元気ですか？ 青年劇場は4月公演（4／4～15）『袖振り合うも』山内久／作、堀口始／演出、劇団総会（4／29・30）という大きな2つの山を越え、現在は『菜の花らぷそでぃ』『愛が聞こえます』『17才のオルゴール』の3作品が全国巡演中です。

総会では、劇団の置かれている現状が、リアルに討議され（東京公演での観客減少、青少年劇場公演の厳しさetc）ました。青年劇場は、創立メンバーが制度上の定年を迎え（引退ではありません）、劇団運営面と共に創造面でも世代交代が急速に求められています。しかし現実には、そこに追いつけていけてないのが実状です。今回の総会ではその内的要因と外的要因についての分析、討論がなされ、少なくとも全員の力で打開していく手がかりはつかめたと思っています。

まずは9月公演『キジムナー・キジムナー』高橋正圀／作、松波喬介／演出（9／4～21、紀伊國屋サザンシアター他）を成功させ、それに続く『銃口―教師・北森竜太の青春―』『真珠の首飾り』『ケプラーあこがれの星海航路』の再演を大きく展開していきたいと考えています。

『キジムナー・キジムナー』の舞台は沖縄。主人公はひきこもりの青年 です。現地取材を重ねた高橋氏の意欲作。〝いやしの島〟沖縄で生まれ育ちながら〝いやされない〟

ぼくと、古くから沖縄の人々の生活と心の中に生き続けてきたキジムナーとの心の交流を『笑いと涙のチャンプルー』でお届します。ぜひ御来場下さい。（中谷 源）

〔劇団埼芸〕

こんにちは劇団埼芸です。埼芸では前々からの念願でありました稽古場での公演が実現しました。

4間×6間の空間を舞台と客席につくり変え、その他のスペースをロビーと、袖の控え、効果操作室、2階を照明操作室とし、白い屋内を、全部塗装し直し、劇団員の全員の休日、祭日、等を全部利用して、作り替えました。約60席の客席ができました。

上演作品は、第78回公演、『雪やこんこん』作／井上ひさし、演出／川村武夫。

5月24日・25日と5月31日・6月1日、2時30分開演、それぞれ1ステージの4日間上演しました。お陰様で全日満席となりました。

ただ難点はちょっと駅から離れてまして不便ですが、劇団員の車を利用しての送迎しました。

夏場は暑いので公演不可能です、早くクーラーを何とか調達しなければと、思いますがそれは、贅沢かもしれません。

今年、劇団は創立35年になりました、創立メンバーでありました、岡田律子が逝って1年が過ぎました、劇団員は、追悼公演と意識し公演を無事終了しました。次の上演の準備にかかっている、毎日です。（森本拓治郎）

〔京浜協同劇団〕

はじめに悲しい知らせです。

劇団創立メンバーの一人で、全リ演議長団としても活躍した中澤研郎（72歳）が4月22日肺炎のため死去しました。通夜、告別式は劇団葬として執り行いました。全リ演議長こばやしひろし氏をはじめご遠方にもかかわらず大勢の方々に参列していただきました。並びに各方面よりご弔電を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

＊さて、第31回かわさき演劇まつり『きばのないおおかみ』鈴木計廣／作、藤井康雄／演出により7月26・27日に上演します。劇団イムザック・演劇講座参加者・劇団新人・一般公募の小学生を交えての稽古も中盤戦を迎え、岡田京子さんの音楽、西田堯さんの振り付け稽古も加わり、物語そのままの「タイヘンダー」の状況です。

公演の目玉は、改訂により森の動物たちの世界がより身近になったこと、ミュージカル仕立てでバンドマンには「文化の仲間」や、劇団員も参加しての生演奏と楽しみいっぱいの演劇まつりになりそうです。とは言え、肝心の劇団員が仕事の都合で集結が「イマイチ」、気力と時間との闘いです。

＊そして、劇団は来年（2004年）創立45年を迎えます。45周年記念公演には創作劇の上演の希望が実現します。

―この川崎だから創れる芝居を―と執筆を萩坂心一氏（川崎市在住）に依頼。

川崎医療生協育ての親「赤ひげ先生」の、命を守る壮大なロマンの物語、仮題『いのちの砦』ただ今鋭意執筆中、来年6月川崎・横浜にて上演予定です。

＊それに先がけてこの秋は、待望の藤田傳／作、内田勉／演出による『収容所から来た遺書』を11月スペース京浜・12月横浜本多劇場で公演しま

す。一昨年の『とりあえずの死』に続く藤田傳氏の2作目への挑戦です。こんどは男性陣の魅力タップリの舞台をご期待ください。

（稲垣美恵子）

〔劇団やまなみ〕

◆梅津幸三演劇活動50年記念公演　井上ひさし／作『父と暮せば』の1週間前、3ステージとも満席（500×3＝1500人）になりました。役者はもちろんスタッフも、当日に向けて最後の調整をしている今日です（この通信が演劇会議誌上に掲載される時期には公演はおわっていますが）。

◆劇団運営がますます大変になってきています。ここ数年依頼公演が重なり、劇団の自主公演が『鉄道員（ぽっぽや）』以来ないため、チケット普及での力が弱体化してきています。また、劇団員の休団（仕事の関係）も多く実働14人。団費がとどこうると税金や稽古場維持に支障をきたします。劇団員を増やすことが急務ですが、入団者をむかえた場合の教育体制の確立はもとより、中堅層の例会への出席や稽古への集中も高めていかなければならないなど問題は山ほどあります。

◆今秋は〝こうふ演劇祭〟の年です。隔年で開催するこの行事には、毎回6～8の劇団が参加します。私たちも参加する予定ですが、まずは記念公演を成功させて、その余力でつっぱしっていければと密かに目論んでいるところです。

◆懸案だった稽古場の台所、トイレの改修と水道の整備（これまでは井戸水をポンプで汲み上げていたのですが、鉄分が多いため蛇口がつまり水道の役目を果たさず）しました。今度は稽古場でおいしいコーヒーが飲めるのが楽しみ。けれど一番喜んでいるのは女性劇団員です。改築費用は劇団員からの5年返済での借入です（稽古場建設の約2000万円の借金はあと28万円で完済です）

（河野通方）

〔劇団名芸〕

4月4～6日、創立40周年記念公演最終弾として、創作劇『ほたる追想』（作／栗木英章、演出／片野耕治）を上演しました。

米英軍によるイラク戦争が強行される情勢のもと、内容の今日性もあって話題を呼び、客数も730人と伸びました。公共ホールで助成金なしの自主公演にて赤字解消の展望が生まれたと言えます。

さて、一息つく間もなく、現在夏恒例の子ども劇場に取り組んでいます。

●『ユタとふしぎな仲間たち』（原作／三浦哲郎、脚色／栗木、演出／佐野むつみ）

7月6日　三好町サンアート小ホール

12日　天白文化小劇場

19日　南文化小劇場

原作者の快諾に応えて、親子で楽しめる舞台にしようとケイコに励んでいるところです。

秋は名古屋市民芸術祭主催事業・名古屋劇団協議会合同公演です。

●『風に紡ぐ―愛知織姫たちの青春より―』（作／栗木、演出／久保田明＝劇団名古屋）

60年前後の闘いを次代につなぐべく、現在台本の上演稿を目指しています。乞御期待！

夏のゼミナールで色々話し合えることを楽しみにしています。

（栗木）

〔劇団演集（名古屋演劇集団）〕

前号でお知らせした『がんばろう～柏木家の人々～』の稽古が1ヵ月を切り、稽古場全体に緊張が張っています（5月14日現在）。演集も55周年を迎えています。この節目の年を迎えた今、改めて「芝居作りの難しさ」「楽しさ」を味わいつつ、なんとかいい作品に仕上げようと思います。

この『がんばろう』に登場する三池の組合活動家や労働者、失業者の生きざまを見ていると、「演集の歴史に似ているな」と思いました。それは、これまでの演集の歴史を振り返ってみると何となくそう思えるのです。『がんばろう』は、まさにそんな演集で今活動している我々の決意そのものであるといってもいいと思います。観劇してくださった皆さんには、また感想などをお聞かせ願えたらと思います。

さて今後の活動ですが、演集では「研究生募集」を呼び掛けていくことになりました。「仕事をしながら我々と一緒に演劇づくりを」という方針でやっていきます。まだまだ先は見えていませんが、こうした活動に積極的に取り組んでいきたいと思っております。

（磯谷誠）

〔劇団名古屋〕

○昨秋の名古屋市民芸術祭賞に続いて、春2月愛知県芸術文化選奨文化賞を受賞。創立して45年、とりわけここ2年の『多すぎた札束』『アンネの日記』『闇に咲く花』そして『こんにちは、母さん』の舞台成果に対してのものということでした。

○しかし、国の内外ともに歯軋りしたくなるような状況が続きます。春の公演、藤田傳／作『とりあえずの死―日本■民伝』（6月20日～21日公演）にも肩に力が入り過ぎてしまいます。しなやかに、したたかにありたいと思います。劇中歌の楽譜が見つからず、京浜協同劇団にお世話になりました。新人2人、河村陽子と石川裕理が入団、岩田史郎が復団。劇団員は9人に。しかし今回も客演を多く頼んでの公演です。

○全リ演はそれぞれの地域に独自な課題を持って向き合う劇団の集まりとは思いますが、それぞれの地での経験が教訓、示唆となって活かされ合うことがとても大切なことと思います。夏のゼミがそんな場になりますよう。

〔岡崎演劇集団〕

3月30日（日）に市民音楽劇『浄瑠璃姫の物語』の上演に協力し、やっと整理を終えて、ほっとしています。

次回は、8月9日（土）に松田正隆の『海と日傘』を岡崎市せきれいホールで上演予定です。

秋には、稽古場での子供劇場を、例年の様に計画しています。

〔劇団はぐるま〕

春の公演、『雪女郎　ヒダのスクナ夢語り』（作／林大輔、演出／汲田正子）は、1ステージの追加を含め、全13ステージで1073人の観客動員となりました。作者の林さんが「高速道路の建設が、故郷の山を削っていくのを見て、この芝居を書いた」と語っていましたが、開発と自然保護、都市と地方、失われゆく素朴な信仰など、考えさせられることの多い舞台でした。毎回満席で13回の公演を打てたことは劇団としては幸せなことなのですが、札止めのためお客様をお断りする、という心苦しさも味わいました。スペースに限界のある御浪町ホールですが、狭いがゆ

えの魅力もあり、これからもこのホールを大切にしていきたいと思います。

夏のミュージカル劇場は、9年ぶりの再演となる『オズの魔法つかい』です。原作はフランク・F・ボーム、脚本は浅野公蔵、演出はなみ五朗です。7月19日、20日の2日間で4ステージを岐阜市民会館で上演します。現在は、ダンスの振り付けを中心に、各場面の返し稽古を行っています。初演を越える舞台にするべく、役者もスタッフも熱のこもった稽古が続いています。

秋には、劇団創立50周年記念公演として、『郡上の立百姓』を上演します。作・演出はこばやしひろし。12月19日～21日に長良川国際会議場メインホールでの上演です。とにかく多数の登場人物のため、一般公募での参加者を募っています（特に男性）。まだ募集は始めたばかりですが、たくさんの方に応募いただき、あの感動の舞台を再現したいと思います。

（内田　薫）

〔劇団たけぶえ〕

今世界で猛威を振るっている新型肺炎（SARS）の影響で、日本からの劇団が出演をキャンセルしたために（全リ演加盟の劇団ですゾ）わが劇団の代表・柴野が急遽韓国の「馬山国際演劇祭」に呼び出され参加致しました。劇団馬山の代表・李相龍さんとの堅い兄弟仁義（？）によるものだそうです。

周囲の心配をよそに本人は至極満足の体で帰国してきました。それもその筈、開会式と2時間程のシンポジュームに出演のほかはフリータイムで、かわいい女子大生の通訳に案内されての観劇と観光の毎日、そして帰国の折りには渡航費の上にシンポのギャラまでいただいたとあっては、決死の（？）訪韓もあながち無駄ではなかったようです。

それにさすが我が代表、来年に控えた劇団馬山との合同公演の詳細はしっかりと交渉して来たようですが、はて？それによれば、来年5月の合同公演は、韓国・モンゴル・中国（瀋陽）さらにはヨーロッパにまで及ぶ話……に、矢張り代表はSARSにやられたのではないかと団員たちは戸惑っております。

そんな浮世離れした話をよそに、劇団は連日11月公演「市民劇場」の準備に向けてフル回転しております。

一昨年までの様な劇団主催ではなく、全く活動形態の違う青年会議所とYOSAKOI踊りの団体との事業なもので、何かに付けて細かな打ち合わせが必要です。それと合わせての基本レッスンです。

6月上旬には台本が上がる予定です。SARSの潜伏期間中、代表は缶詰になって執筆に励んでいる筈ですが、例によって現物を提出してくれるまでは安心ができません。

市民劇場と平行して間もなく、子どもの公募劇「たけのっ子劇場」も始まります。

代表、いつまでも韓国の余韻に浸っている時ではありませんよ！

〔劇団すがお〕

新緑のすばらしい季節を迎え、芝居をする絶好のシーズンですね。わたしたちの小劇場は「冷暖房装置」のない稽古場ですから、この季節は見逃せません。やっと昨日3日間5ステージの公演が終わりました。

第66回公演・第14回ななわ小劇場

千葉茂／作　坂下和代／演出　「合縁奇縁」1幕4場

5月23日(金)から25日(日)5ステージ、一般前売1000円、学生800円

作品は、高山市の劇団無尽舎の座付け作家の書いたホームコメディ。2000年度の名古屋文化振興財団の公募作品で、名古屋文化振興賞入賞作品でした。劇団名芸で既に上演されたと聞き、上演許可を取ったものです。作家もわざわざ会場まで足を運んでくれ、作家が考えもしなかった部分も結構あり、リアルでおもしろかったと好評でした。一般のお客さんにも好評でした。この公演で、60歳の新人劇団員がデビューしました。その年そのままでの配役で、実に存在感があったと観客の評。残念なのは、いつもの小劇場は会場が満席で、お客さんに迷惑をかけていたので、今回から5ステージに増やしたのですが、観客が300人を割ってしまいました。お客さんはゆったりと見られたでしょうが、これから反省が必要です。

なぜかこの頃年配の劇団員の入団が目立ちます。昨年末に60歳の定年を迎えて婦人が入団。昨年50代の男女が2人入団しています。若い新人も入ってもらわないと劇団が高齢化します。

●次回公演

11月8日（土）9日（日）桑名市コミュニティプラザにて、作品はこれから決めますが、「わたしとわたしが出会うとき」あたりが候補に上がっています。

●桑名演劇塾

劇団すがおと公募市民が創る地場演劇の桑名演劇塾は準備中ですが、「桑名万古物語—炎ふたたび」栗木英章氏に依頼して第2稿が完成しました。演出と最後の詰めをしています。日本芸術文化振興基金も幸いにして認められました。また、これまで、桑名文化スポーツ振興公社の主催で経費も公社が見ていたのですが、今回は桑名市教育委員会が予算化してくれました。公演期日は、2004年2月28日（土）2ステージ公演の予定です。

劇団すがお／三重県桑名市睦美か丘1058　TEL&FAX0594-31-4210

http://www.intsorf.ne.jp/~sugao/HP のリンクをはらしてください。

〔劇団京芸〕

こんにちは、劇団京芸です。現在、4つの作品（『さよなら竜馬』『ラスト・ラン』『アスモデウス』『そうべえまっくろけのけ』）を毎日違う学校で巡演中、という忙しい状況です。今年からキャスト・スタッフに少し変更があり、その稽古を目一杯やって学校から学校へ走り回っております。5月からすでに体育館は熱気地獄の上に、雨で下着までびちゃびちゃ……毎年のことながら、「働いてるよねぇ」という実感が沸くのはとても嬉しいことです。

ところでこの「5月」というのが、なぜかここ数年京芸の鬼門になっておりまして、主役が倒れたり代表が骨折したりと事故の多い季節なのです。で、今年も発生いたしました。本番2日前に役者（しかもメインキャスト）が入院、ストレス性の心臓病！　結果的に大事に至らず、本人は病院からニトロ持参で楽屋入りして無事公演終了となりました。そのニトロも使うことなく元気に日常生活に戻っております。…が、本当に怖かったです…。これ以上何か起こらないうちに、速やかに5月が終わってほしい。自分の代りはいないということを念頭に健康管理をするのが役者の

仕事。ちゃんと食べて寝て遊んで、夏を迎えたいと思います。

（赤土綾子）

〔大阪府職員演劇研究会〕

春の心地良い時節から初夏へと向かっています。5月は本当に雨の多い月でした。これから本格的な夏がやってきます。私たちが本番を迎える時は本当にビールがおいしい時期になっているでしょう。

7月11～13日の公演のキャスト、スタッフも決定し、本格的にエンジンがかかり始めました。主要団員2人の休団なんてなんのその。4月は本読み稽古（テーブル稽古）を中心にやってきました（立ち稽古になった時に役者が動きやすくするため、場面での役者の動き、それぞれの役のその時の思いをしっかりとおさえておく意味）演出の杉田満は以前お伝えしました。

今回の話題としては、杉田演出と並んで富本舞監、さらにはあの田坪文一が去年に引き続き主役をつとめます。（今回は前回に引き続きまたまたおじいちゃん役）今年はどんな大ボケが飛び出すことやら。ハラハラドキドキの本番になること間違いなし。（おいおい）

5月にはGW（ゴールデンウィーク）に合宿を新三田のあるところで行いました。一丸となったところで半立ち稽古に入りこれから本番に向けてボルテージ上昇といったところです。

作品としてはバブル崩壊後に書かれたものですがテーマとしては今でも通用するものであると思います。家族の形態や夫婦の形態も多様化し、何が本当に正解とか判断の難しい時代。本当の家族とは夫婦とはいったい何なのだろうとお客さんに思ってもらえればと思います。（以前観ていただいている方には）ラストも見どころですよ。

（朝丸剛基）

〔劇団未来〕

大阪春の演劇まつり参加／第59回公演、作／ふたくちつよし、演出／森本景文『あした天気になぁれ』6月6日（金）～8日（日）4ステージ　森ノ宮・プラネットホールにて上演します。

公演まであと2週間。役づくり、大道具づくりなどイッパイ、イッパイの追い込みに入っています。幸いなことに舞台監督の藤岡英幸が3年ぶりに赴任先埼玉から帰阪、さっそくその力を発揮し、稽古場を盛り上げています。

さて、ふたくちつよしさんの作品ですが、場所の設定を大阪近郊の病院に変え、一部の人物を除いて大阪弁にして上演します。上演台本読まれた作者から「大阪弁のセリフの新鮮さに驚きました。また、新しい魅力がプラスされたようで『あした天気になぁれ』がますます楽しみになりました」と感想を寄せていただきました。作品の内容について触れておきたいと思います。

歯磨いた？　爪のびてない？　パジャマの裾を中へ入れるか入れないか…などにこだわる患者さんたちのちょっとおかしな日常生活にはじまり、夫婦間に破局の危機、入院中に職場を追われる厳しい現実、そして一人の死、へと意外な展開をしていきます。病院での生活も、まさに社会の縮図として、人間性豊かに描かれています。

この作品を、緊張感とユーモアあふれる舞台にしようと、終盤の稽古に励んでいます。この通信が皆さんに届く頃にはいろいろ評価されていることでしょう。目前の公演のことに終始してしまいました。西会議の皆さん、ゼミナールでお会いしましょう。楽しみにしています。

（則清）

〔関西芸術座〕

去る5月14日から18日に関芸スタジオに於いて、飯田栄彦／原作、宮地仙／脚色、大塚雅史／演出によります『ひとりぼっちのロビンフッド』を上演しました。

大塚氏は小劇場界でも注目を集めていますランニングシアターダッシュの主宰であり、演出家で、照明家でもあります。

大塚氏によって今回キャスティングされたのは関芸の若手8人でした。大塚氏の演出マジックによって8人は、今までにない刺激を受け、人間のエネルギーを常に満たした舞台をつくり上げました。仕上がった舞台は若さあふれる躍動感のある激しいものとなり、劇団に新しい風が吹き込んだようでした。

これからは全国の中学校や子ども・おやこ劇場などを巡演する予定です。

今年度第2弾として、9月4日から10日にかけて、妹尾河童／原作、堀江安夫／脚色、鈴木完一郎／演出によります『少年H』を予定しています。ご存知のように妹尾氏の代表作を舞台化するにあたり、今から胸を躍らせております。ご都合つきましたら、ぜひご覧くださいますようよろしくお願いします。お楽しみに。

（金谷克海）

〔劇団潮流〕

この号が出る頃には、一学期の学校移動公演も、終了に近づいていることと思います。やはり、学校公演の状況はかなり厳しいです。逆にこんな時こそ、鑑賞会をという先生方もたくさんいらっしゃいますが……。今年、潮流も新作での一般公演は行わないことになりました。

そのかわり、この夏は文学座の高瀬久男氏をお招きしてワークショップを実施したり、関西でのRADAワークショップに、多くの劇団員が参加したり、移動公演作品の集中的な稽古を行ったりと、しっかり充電の期間にあてる予定です。

また、一般・高校巡回公演で好評の『あひるの靴』を、7月16日（水）、クレオ大阪中央で公演します。まだごらんいただいていない皆様、もう一度見たいという方々、ぜひお越しください。

新しい高校公演の作品も、古代ファンタジーを題材に、劇団内の作・演出で現在創作中です。次号では、もう少し詳しく紹介させていただけると思います。

（堂崎茂男）

〔劇団息吹〕

『言うべきことは絶対に言う！』

『やるべきことは絶対にやる！』

『そんな行き方　いまどき流行らんわい！』

『そんな格好悪いこと　止めてほしいわ！』

息子、娘、が猛反発

『けど　言わな　分らん！』

『やらな　良うならん！』

『なに！　鶏がくさ～いやて!?』

『えっ？　牛が狂牛病にかかったやて!?』

頑固おやじは、

今日も　村を　駆け巡る！

右の文章は、劇団息吹が総力をあげて、取り組む、45周年記念公演、東川宗彦さんの、書き下ろし作品、人情喜劇の『日本の牛』のチラシに書いてある、宣伝もんくです。

笑って、泣いて、ケンカして、人の不幸は見捨てておけ

ぬ、権力あるものにはたちむかう、弱きを助け、強気をくじく、嫁さん、子どもに、ばかにされ、それでも、がんこおやじは……？

今年、1年間はこの作品を上演することになっています。大阪春の演劇祭り参加として7月25日から27日まで4ステージ　森ノ宮プラネットホールで

秋には、大阪新劇フェスティバル参加として　10月4日と5日、2ステージ　八尾プリズム小ホール

あと、1ヵ所か2ヵ所、やれるところがあればと、探しているところです。（柳辺）

〔劇団コーロ〕

こんにちは　劇団コーロです。

新作『聖の青春』に向けて着々と準備が進んでいます。

3月30日、31日と演出菊池准氏、脚色いずみ凛氏を迎えワークショップを行いました。

久しぶりの劇団全員で取り組む作品に皆燃えています。

暑い暑い夏になりそうです。

『聖の青春』
原作／大崎善生（講談社文庫刊）
脚色／いずみ凛
演出／菊池准
美術／加藤ちか
衣裳／加納豊美
音楽／上田亨
効果／須川由樹
舞台監督／恒川勝也
制作／澳利子
日時／2003年9月12日（金）6：45
9月13日（土）2：30／6：45
9月14日（日）2：30
場所／近鉄小劇場
料金／一般前売3000円（当日）3500円
小・中・高・シニア前売2500円（当日）3000円

皆さんぜひたくさんの人が見に来てくださいますよう、劇団員一同首を長くして待っています。

（四橋）

〔劇団大阪〕

大阪新劇協合同公演『乱世山城国伝』の劇評は前号に劇団支木の中野健氏が寄せてくださっている。続く3月の研究生公演『海と日傘』は好評で、目標に1人足りない199人の観客に観ていただいた。そして、春の公演『スナーを探して』（広島友好／作、熊本一／演出・谷町劇場・5月16～18、22～25日）10ステージが終わり、ホット一息ついているところです。舞台は日により出来不出来のバラツキがあり、観客の入り具合によって役者のノリが違うなどもありましたが、後半は良い舞台に仕上がったのでは。アンケートだけの反応ですが、作品のテーマは十分に伝わり、一応好評と言っていいかと思います。しかし、今回の公演も制作面で課題を克服する事ができませんでした。（目標800人に対し679人）定年退職者が増え、以前のように職場から観客を呼ぶことができなくなり、若手は観客を呼べる職場を持たない。今一度、「何のために芝居をするのか」その原点に立ち返る必要がありそうです。

次回公演
11月8日（土）9日（日）近鉄小劇場
「アトリエ」作／グランベール、斎藤誠／演出

〔劇団四紀会〕

前号から今号が発行される間に成された、イラク戦争・有事法制成立という、日米の世界平和に対する逆行ぶりは、目に余るものがあります。演劇人としてできることを、実践していかねばと痛感しています。

さて、わが劇団の方はと言いますと、公演までまさに秒読み段階に入ったところで、作品の中身同様てんやわんやしているところです。

問題の作品は、既報ながらウチでは若手（？）の森卓也が書き下ろしました『冬の桜』今号発行時には「ああ、いい仕事をした」と振り返られるよう頑張ります！

次いでの公演としては、7月に演劇教室卒業公演、11月には「非核の政府を求める兵庫の会」行事での上演も兼ねた、井上ひさし／作『父と暮せば』が決まっています。

現在、運営委員会を中心に今後2年間のスケジュールと稽古場・倉庫の維持等について議論をしています。47年目がスタートし、いま大きな曲がり角に来ているところです。

何はともあれ、総会・ゼミでお会いしましょう！　それではまた。（里中）

★神戸働くものの演劇教室
第34期生卒業公演
『天使は瞳を閉じて』
作／鴻上尚史・演出／狂井たかし　7月12日～13日、新開地まちづくりスクエア2Fホール

★『父と暮せば』
作／井上ひさし・演出／無法松猪吉　11月2～3日　兵庫県民小劇場

〔劇団あしぶえ〕

2003年7月13日から19日、カナダ・ハリファックスで開催される「2003世界演劇会議とフェスティバル」で『セロ弾きのゴーシュ』（宮澤賢治／作、園山土筆／脚本・演出）を、2ステージ計2000人の観客の前で上演します。世界15ヵ国から16劇団が参加、観客も90ヵ国から集まる大きな大会です。ゴーシュは、初演から14年で106回上演してきましたが、今回の公演を機に作品を改めて深く掘り下げ、演じる側のメッセージを観客にどう伝えていくかを追求しました。

イラク戦争後のテロや新型肺炎と、カナダ公演の不安の種は尽きませんが、世界から集まる多くの方の反応を楽しみにしています。また、カナダ公演のプレ上演として、5月25日、6月1日、14日、15日に、しいの実シアターで6ステージの公演を企画しましたが、本番2週間前に全席売切れました。

10月からは、新作の『彦市ばなし』（木下順二／作、園山土筆／演出）公演を「しいの実シアター」で予定しています。この公演では、子どもたちにターゲットを絞り、小さい頃から芝居のおもしろさに触れ、観劇する楽しさを知ってもらいたい、と準備を進めています。こちらもどうぞ、お楽しみに。（小岩崎里瑠）

■彦市ばなし
10月5日、19日、26日
11月9日、23日
いずれも11時・14時の2回。
詳しくは、ホームページをご覧ください。www.yitf.org

〔福岡現代劇場〕

皆さんこんにちは、お元気でご活躍のことと思います。

福岡現代劇場も今年で45周年を迎えます。記念公演の第1弾として、英国劇壇の大御所J．B．プリストリィー／作『夜の来訪者』を、演劇集団「ばぁくぅ」との合同公演で、5月24日～31日まで、10回公演をアトリエ戯座にて行います。

役者には、3つの作業があると言います。（心の）解放、集中、想像です。今まさに、この作業に渾身のエネルギー

を注いで役者たちは頑張っています。その熱い情熱は、言葉では表現できないほどです。

アトラクティブ（魅力的）な役づくりをするために、どう自分を奪い立たせ、役と向かい合っていくか。正念場です。

スタッフのみんなも、少々バテ気味ですが、粘りづよく創造作業に参加しています。

記念公演第2弾は、10月29日～30日に井上ひさし／作、猿渡公一／演出で、『マンザナわが街』の公演を、少年科学文化会館で予定しています。こちらの方は、中堅、若手の女優陣がてぐすねを引いて、今や遅しと待ち構えています。

（新平）

〔テアトルハカタ〕

平成15年度本公演を『貧乏物語』井上ひさし／作、黒江昭治／演出　5月31日(土)14時～　18：30～　6月1日(日)12時～　16時～　会場ぽんプラザホール。

舞台は昭和9年春、相生町の二軒長屋、時代のうねりの中で健気にたくましく生きた女たちの物語です。

前回ご報告しました。5月25日（日）『悟空の大冒険』、8月24日（日）『新ももたろう伝説』。10月12日（日）『アリババと40人の盗賊』。追加としまして11月16日『悟空の大冒険』少年文化会館。現在苦闘しております。プロデュース公演の、ある企業主の波乱万丈の出世一代記。ノンフィクションの台本創作に苦戦しております。

『貧乏物語』の本番前の追い込みに汗しています。

（中村）

（劇団石るつ）

03年1月は東京芸術劇場（池袋）で『鍋屋の紐はなぜ朱い』（小松重男／原作・原題『年季奉公』）を3ステージ上演し、秋に向けて準備をしてきました。

小数劇団なので半分近かくが客演者という状況で公演活動を持続しています。

10月24、25、26日、5ステージ。『人口と出口』ユワコフスキー／作（ポーランド人。1927年生れ、第二次大戦中、レジスタン組織の高校で修学、戦後ロヅ大入学、モスクワ大学、1966年、ワルシャワ大学で開かれたポズナニ蜂起10周年祝賀講演会での講演――祝うべきものは何もない、何が改善されたのか――が原因で、ポーランド労働者党より除名。1968年、2、3月、チェッコの改革運動と並行したワルシャワ大学の学生運動にからんで、4月、ワルシャワ大学から除籍。1968年12月、カナダ、モントリオール大学に就職。現在はポーランドにもどっているといわれる）を上演します。

不条理劇ではありますが、日本の閉塞的状況に問題提起となる舞台だと思います。

この舞台は、江東区佐賀町にある劇団芸術劇場の稽古場で行います。この建物が1900年代初期の洋館の趣があり、舞台の楽しさが一層ひろがると考えます。

『人口と出口』――イェンセン神父の人生観――と合せて、ブレヒト、ケストナーの詩の朗読と音楽。楽しい舞台になりそうです。ぜひ見にきてください。

（NAOMI）

栗原省の『ガラスの動物園』

――和歌山で見た地域演劇――

ぶどう座主宰・劇作家　川村　光夫

栗原省の存在を知ったのはたしか1979年だったと思う。その頃の本誌編集長だった萩坂桃彦が、「あなたの文章を読んで、ある時期私に希望を抱かせてくれた忘れ得ぬ文章があると書いてる人が居るよ」と教えてくれた。私は昔（1959年）に、地域演劇論（一）という文章を書いていたので、そのことだろうと思った。それにしてもその反響が20年もたってから返ってきたことに驚いた。反響を返してくれた主が栗原省だったのである。以来私と栗原は友人となった。

さて『ガラスの動物園』だが、文庫本の解説によれば、これはアメリカの劇作家テネシー・ウイリアムズの出世作で、初演は1944年だが、舞台となった時代はさらに遡って、激動の1930年代に設定されている。

舞台は大都会の下層生活者の住むアパート。下手にそこが出入口となる鉄製の非常階段。中央に居間。その奥に紗のカーテンによって仕切られた食堂（場面によってカーテンが開閉され効果的）。居間下手寄りにソファ、上手前にガラスの動物をいっぱい並べた人形ボックス。続いてラッパ付の旧い蓄音機、これも旧式の電話機（まあよく集めたものである）。

会場となった栗原の住む吉備町のきび会館は公民館なので舞台は狭い。そこをなんとかしてという栗原の熱意が間口5間、奥行1間半の張出しを作ってしまった。しかもそこから伸びる客席壁面にまで舞台の状景が描かれている（装置・板坂晋治）。それに応えるように照明も少ない器材で頑張る（大谷健）。

さて物語だが、これも解説によればほとんど自伝的作品で、トムは作者自身の姿の投影であり、姉ローラは彼の姉ローズそっくり、母アマンダもまた劇中人物同様の女性だったらしい。酒好きの父親は蒸発してしまい、アマンダは2人の子どもローラとトムを一人前の人間に育てあげようと懸命なのである。

足が悪く自閉症のローラは家に引きこもって終日レコードをきき、ガラスの動物を眺めているだけの暮しである。母アマンダはそういうローラを職につけようと、タイピスト学校に入れようと図るが失敗。次には結婚相手をみつけてやろうと息子トムに友人を連れてこいと強要する。そして現れたのが靴会社の同僚ジム

である。人嫌いのローラは訪ねてきた客を玄関に迎え入れることさえ出来ない。だが現れたのは高校時代のあこがれの人ジムであり、ジムの親切に彼女の心もやがて溶けてゆく。2人は手をとりあって踊り、唇まで交してしまう。

だが実はジムには婚約者がいたのだ。「あーあ、まったくね。お見えになった紳士が婚約ずみだなんて！」、母アマンダの科白である。「ローラ、何か言ってくれよ」というジムの科白に、ふるえる唇をかみしめて微笑んだローラは、踊りに夢中になって壊してしまったガラスの動物ユニコンを彼の手に置き、「今夜の記念に」とつぶやく。「さようならローラ」ジムは去ってゆく。

母アマンダはいら立つ。「おまえはなんにも知ろうとしないんだ。自分勝手に楽しみにふけるがいいんだ。さあ行きなさい、映画に！」「ああ行くとも！　ただし行く先は映画じゃないぜ！」トムはグラスを床にたたきつけ非常階段をかけ下りてゆく。ローラの悲鳴。

こう書くといかにも暗たんとした芝居のように思われようが、舞台はそんなに暗くはない。ところどころに幻灯のようなもので映像やタイトルが挿入されるので、異化効果となって笑いをさそう。いっぽう陰影にとんだ会話が叙情的世界をつくる。リアルでありながら幻影をみてるような独得の世界である。

戯曲を読んでいて次のような言葉と出会った。「ドイツではヒットラーの甲高い演説がヨーロッパ中の空に流され、スペインでは、フランコ将軍の軍隊がゲルニカを無差別爆撃しました。そして中国では日本軍による大量虐殺。―ところがここアメリカでは、若者はジャズと酒とダンスホールにバー。映画とギャンブルとセックス…」、ジムに言わせた作者の言葉である。

別の場面ではこうも言う。「考えてもみろよ。あのハリウッドのスターどもが、アメリカ中の若者が憧れる冒険という冒険をスクリーン上でやって見せてくれる。それを俺たちは暗がりの椅子に座ってワクワクしながら見つめている」。映画という言葉をテレビと置きかえれば、日本の現実そのままではないか。

この作品にはたくさんのことが書かれている。そのことに配慮しながらも栗原演出は盲目的に子どもを愛し、その将来に期待しすぎる母によって傷つき、絶望の淵に追いこまれてゆく一家に焦点を合わせているように見た。

その選択は誤っていないだろう。戦後日本の現実の中で、右肩上りの経済同様、子どもたちへの期待もまた右肩上りだったように思うからである。今ようやく人びとはそれに気づき始めた。

終演後楽屋を訪ねた。アマンダ役の有田初美に「あなたお子さんいます？」とたずねると「はい」と答え、あとは言葉にならなかった。ローラを演じた栗生香林は16歳だという。トム役の吉井孝紀と比べる10歳ほどの齢下だ。そのトムの姉の役を演じるには若すぎる。だが自閉症という難しい役をよく演った。それに地域の観客はそんなことにこだわらず、むしろだれが何を演るかを含めて楽しんでいるに違いない。そういう意味では地域の観客は優しい。みんなに声をかけた後で、「何といっても、一番は栗原先生だよね」と言ったら、皆んなぱっと顔を輝かせて一斉に拍手した。演出家を信頼しているのだ。

終演後も立ち去り難い様子でうろうろしている一群がいる。まだ劇の興奮がさめない人たちなのだろう。劇は成功したのである。ようやく私は、なぜ栗原が吉備の地でこの劇をやりたかったのかがわかり始めてきた。私たち地域演劇人はなんと遠い道程を歩んでいることだろうか。

観劇雑感

劇団湖（三笠）『幌内鉄道明治一番列車』

―わが街三笠Ⅱ・鉄道編―

劇団新芸　宮津　泰子

私は北海道演劇祭で7本観劇した。招聘作品の『母』を除けば、この『明治一番列車』がいちばんおもしろかった。新芸の鹿角と広光が客演しているせいで身びいきなのかな？　とも思ったが、観劇で充たされる快さはいちばんだった。

まず脚本の展開がうまい。明治15年。札幌から幌内までの鉄道工事が急ピッチで進められていた。しかも、11月開通を目指していたのに、ある事情から2ヵ月も早く特別列車を走らせなくてはならないのだ。それは、東京から囚人150人を空知集治監に護送するためだった。こうして囚人に加えて看守の家族70人を加えた220人の大移送が開始されるのである。

1幕目はこの列車を走らせるための任務の厳しさが描かれる。俳優たちの実人生の重みが風格ある存在感になり誇張のない演技は清々しい。男たちの葛藤（かっとう）が適切に描かれ、たんたんと展開される一場一場に胸に迫る説得力がある。ただ、肩に力が入り過ぎて、慎重に台詞を言っており、流れが少し滞ったのが残念だった。

2幕に入って汽車が動き出すとそ

の欠点もなくなった。芝居も列車のテンポに合わせるように走り出した。ドキドキハラハラさせられてすっかり舞台に入り込んでしまう。ハラハラの原因は二つ。予定通りの期間でさえギリギリの日程なのに、2ヵ月も早くなって220人もの命を安全に輸送できるのか。ずさんな工事になるのではないか。大事故にならないか。もう一点は囚人の中に逃亡の企てがあり、列車襲撃の準備が進められていたのである。

舞台は、やや上手よりの前方に囚人たちや看守たちの場が描かれ、一尺高い後方で破壊された鉄道の修復作業や、囚人の手下たちによる襲撃の本当の目標物、イチリキリ橋の爆破を未然に防ぐために命をかけた工事関係者の戦いが描かれる。このドラマに描かれた仕事に懸けた男たちは素敵だった。

油の乗ってる渋谷氏の台本を、飯田氏はその力量どおりに見事に仕上げた。できあがった作品は、キリッとしていて情感のある良い舞台だった。

我孫子氏の名台詞に、良い舞台はスタッフもキャストもみんな良いというのがある。この舞台もその通り。その中でも特に良いのが中村隆の音響である。一幕の東京での集治監看守長の長田宅のシーンで、夏の終りの両国の花火が遠くに上ってる。照明の花火も良いが打ち上げられた音に風情があった。二幕の、東京からの船が港に入って汽車に乗るまで滞在する小樽の宿に聞こえる新内流し、列車が走り出してレールを刻む車輪の音とそのリズム。効果音が、役者を乗せ観客を柔らかく芝居に誘なってくれる。俳優では、加藤元さんも竹田さんも佐藤さんも良かったけれど、なんと言っても主役の長田看守長の加藤つよしの毅然として職務を尽くす姿にひかれた。

男たちが仕事を遂行してゆく流れの中で情のシーンがある。東京に病身の母を置いてゆく別れの場である。母の役は加藤桂子さんにあてて書かれていた。病気入院中の桂子さんの復帰を待っていたのである。しかし劇団さっぽろの北本さんの客演で仕上げざるを得なかった。妻が残って母の看護を申し出る夫婦の情愛も良かったけれど、妻子を連れてゆきなさい、私にとっての家族は亡くなった夫だから自分は残る、という母の言葉を受けとめている長田看守長になんとも言えない哀感があった。そして秋がすぐそばにきていることと別れの切なさと寂しさを虫の音が包んでいた。

一つ腑に落ちない点があった。看守の家族の1人と思われる設定で年配の女性が列車に乗ってきた二幕の後半のことである。髪や和服が現代のままだった。札幌三笠会の方に舞台に上っていただいたという趣好かと思ったけれど異和感が残った。

（2002年9月16日　かでる27）

けいこ場公演からの発信に寄せて

演劇ライター　鈴木　太郎

劇団が自前のけいこ場をもち、その特性をいかしたけいこ場公演ができることは、なによりの財産となることだろう。本誌110号の劇団大阪の訪問記をみてもけいこ場をもち、その場が小劇場となることの意義の大きさを伝えている。

専門劇団をみても、東京・信濃町にある文学座アトリエでの文学座の公演は意欲作の連打であり、客席にも熱気がある。昨年は創立65周年を記念する連続公演を成功させて評価を得て、紀伊国屋演劇賞団体賞を受賞している。また、燐光群の梅ケ丘BOXをみても、マンションの地下、わずか15坪ほどの空間であるが、この狭い空間をいかして上演された「屋根裏」（坂手洋二／作・演出）によって、紀伊国屋演劇賞や読売演劇大賞（最優秀演出家賞）を受賞している。

劇団が本拠地にけいこ場をもち、その空間を最大限に活用して公演することは、多くの可能性をはらんでいるといえる。すでに、京浜協同劇団の先駆性からみてもあきらかである。それは、その空間の機能をもっともよく把握し活用することであり、けいこの時間も十分にとることができることである。さらに、観客との交流も存分にできる。と、いうようなことを前提に、2劇団のけいこ場公演の舞台をみた。

東京芸術座『ウメコがふたり—露地裏の虹』

安藤美紀男／原作　さねとうあきら／脚本
杉本孝司／演出

井上鉄夫という個性的な俳優の持ち味を存分に発揮した舞台という印象をもった。「ウメコがふたり」というタイトルからもわかるように、ひとりのウメコは小学6年生の子どもであり、もうひとりのウメコはうさんくさい、いわくありげに登場する老婆である。「わしかて久保山ウ

メコ」と名乗る。この老婆を井上鉄夫が熱演、全体をひっぱって、勢いのある舞台に仕上げていた。

日中戦争たけなわの1939年（昭和14年）の京都の貧しい露地裏にすむ6年生のウメコ。学校でいじめにあって元気がない。となりに住むデベソという男の子にもからかわれている。父親のハゲツルさんは新薬の発明とかで家をでていく。そこへ登場するのが老婆のウメコ。娘の家に入り込んでしまうが、警察に追われている身。そして、ふたりのウメコは「君が代」の歌を妙な節まわしでうたって喜びあう。戦時下の庶民の暮らしぶりとともに、苦しくともしたたかに生きようとする姿が描かれていく。

劇団としては80年の初演、その後再演、全国巡演を経て、今回は再々演である。今日の政治状況からみて、上演に踏み切ったのであろう。戦争を追体験することは大切なことではあるが、こうあるべきだというような表現の舞台でいいのかなという思いもした。役者が役を演じ懸命であればあるほど、客席いる身としては、どこかで息抜きがほしいのである。京都の街の路地裏からの発信としては、ほどよい「はんなり」とした雰囲気がほしかった。安田かほるが丸坊主になってデベソに挑んでいたがその姿勢には真剣さがあってよかった。Wキャストのため星班のみで月班はみていない。

今回のアトリエ公演ではセットでの工夫がほしいと思った。たとえば、上手のウメコの部屋がはじめのうち白い布でおおわれていたが、これは舞台を狭くみせて逆効果。そのため中央奥につくられた地蔵尊がみにくく路地裏のイメージがわかなかった。また、後半、ウメコが橋の下からでてくる場面でも、川の流れが感じられなかった。アトリエの機能を存分にいかされていないのが残念だった。

（4月1日、東京芸術座アトリエ）

劇団埼芸『雪やこんこん—湯の花劇場物語』

井上ひさし／作　川村武夫／演出

創立35周年記念・第1回稽古場公演である。上尾市の郊外、畑と雑木林のなかに建てられたけいこ場である。劇団員の長年の夢だっただけに感慨深いものがあることだろう。最寄りの駅から劇団員が車で送迎してくれたのはありがたかったが、やはり遠い。道路事情も配慮して開演時間も15分遅らせるなど、けいこ場公演らしい。客席は70くらいの椅子が置ける広さで、なかなかいい空間である。ところが、開演後、客席でビデオを手にもって撮影している人がいる。暗転の意味もない。だれも注意しない。学芸会でもあるまいに、と思ってしまう。

さて、舞台は、雪が舞い散る北関東の湯治場にある芝居小屋の楽屋。時は戦争が終わった年の暮れである。ここに人気が落ち目の中村梅子一座の座長である中村梅子とその座員たちがくる。雪が降って客がくるのか、公演は打てるのか。旅の途中でにげだした座員もいる。出し物はなにをするのか。給金をもらっていないと嘆く座員たち。それでも芝居にかける情熱はひとしおである。小屋の女将・佐藤和子や番頭の立花庫之介をまきこんで、二転三転と物語は展開していく。

作者の井上ひさしは「旅芝居好き、大衆演劇好き」としても知られ、旅芝居の名台詞はノートにとりつづけていた。それだけに、この作品に登場するせりふも名文句の連続、見得をきる場面も数多く用意されている。そのところの面白さが魅力の芝居でもある。登場人物ひとりひとりがみんな芝居好きである。座長と女将の親子の名乗りもあるものの、どこまでが本当で、どこまでが芝居かわからないという展開もしたたかである。計算されつくした舞台の妙味である。

この大作に挑戦した埼芸の心意気は評価したいと思うし、その熱意は伝わってきた。この日も渋澤洋俊、高嶋敬治などのベテラン陣の奮闘もよくわかるものの、全体に硬さを感じてしまった。せりふにも動きにも、もう少し息をぬく間合いといったものを、みるものは欲しているのだ思った。そうでないと、舞台の硬さが客席の硬さになってしまって、せっかくの名せりふに酔わせてもらえないという結果になってしまうことに

なる。和子役のただのれいこがいい雰囲気をだしていたのが救いであった。

残念なことに、こまつ座の舞台をまだみていない。資料によると「雪やこんこん」の初演は87年であり、鵜山仁の演出、市原悦子、草薙幸二郎、池畑慎之介、浅利香津代らが出演している。そして浅利は佐藤和子の演技で第23回紀伊国屋演劇賞を受賞している。この顔ぶれを知ってみると、正直な気持ち、もう一度、どこかで上演してくれないかと思ってしまった。

今回は、Wキャストで4日間4回公演であった。ということは結局2回の本番ということになる。その2回の内で1回しかみる機会がなかったのが残念であった。せっかくのけいこ場公演の旗揚げである、もう少し長期上演を考慮してもよかったのでないかと思った。

（5月31日　劇団埼芸稽古場）

「正統派」であり続けるということ

演劇評論家　星野　明彦

福岡現代劇場・演戯集団ばあくぅ『夜の来訪者』

J・B・プリーストリィ／作　内村直也／訳　猿渡公一／演出

大阪から諫早へ転勤して一月余り、福岡市で作られている情報誌で、福岡現代劇場創立四五周年記念公演『夜の来訪者』を見つけた。

九州の劇団はほとんど観たことがなく、合同公演の相手「ばあくぅ」の名も初耳だったが、もちろん福岡現代劇場と演出の猿渡氏の名は知っていた。アトリエで一一日間公演とは、今の関西の劇団ではできないことである。そして楽しめることはわかっている『夜の来訪者』。初の福岡行も兼ねて出かけたものだ。

新興財閥の一家が娘の婚約者を交えたパーティーを開いている晩、突然、警部と名乗る男が訪れる。そして今夜一人の女が自殺したと告げ、この場にいる全員がその死に責任があることを暴いていく。一九六五年生まれの僕は、東野英治郎が「警部」を当たり役にしていたという俳優座の舞台は観ていない。しかし一九九二年の俳優座劇場プロデュース（八木柊一郎翻案・西川信廣演出）は強く印象に残っている。同じ台本を使った二〇〇〇年の劇団息吹（木田昌秀演出）も観応えがあった。

都心のビルの一室、定員百人前後のアトリエは平日昼間にもかかわらず超満員である。開幕後、当主・アーサー（佐藤順一＝ばあくぅ）や妻・シビル（青木あつこ＝同）を見て改めて意識させられたのは、初めて原作版、一九一二年のイギリスの地方都市を舞台にした「翻訳劇」に接したということだ。これまで観た八木台本の舞台は一九四〇年の日本だったのだ。それはつまり、比較的若い「ばあくぅ」の俳優たちの扮装や演技が、「西洋人」に近づこうという、いささか古めかしいものだったことでもある。

しかしグール「警部」（下川一弘＝福岡現代劇場）が登場すると、やはり引き締まった。かなりの年配、終始穏やかで淡々とした口調を崩さない（英国紳士役を得意とする声優・中村正を思い出させた）。しかしそれだけにかえって、一人ずつ執拗に問い詰めていく姿に得体の知れない迫力が出た。それは無表情に朗々と喋り続けた俳優座劇場の磯部勉とも、怒りを露にした息吹の大坊晴彦とも違うものだった。

「警部」は一人ひとりが死んだ女の仕事を奪ったり、弄んで捨てたりしたことを明らかにして去る。しかしその後、警察に該当する人物はおらず、この町で今夜自殺した女などいないことがわかる。当主夫婦と婚約者は暴かれた罪のことなど忘れたかのように喜び、「警部」の言葉に動かされていた娘と息子は反発するのだが……。この芝居の真の中心は「警部」の派手な活躍ではなく、彼が消えた後のブルジョア一家の反応である。今回いささか物足りなかったのはその点だった。

俳優座劇場では鈴木瑞穂と稲野和子が、「警部」の追及を受けての狼狽と、彼が去った後の開き直りを大芝居で見せた。そして日下由美が「お嬢様」の素直過ぎる改心を生き生きと演じた。そうした「お芝居の楽しさ」は、アマチュアのベテランである息吹の岩崎徹・佐藤栄子・池内利津子にもあったのだが……。今回の佐藤、青木、娘シェイラ役・のだのぶこ（福岡現代劇場）はそこまでには至らなかった。佐藤と青木は真剣

な熱演だがやや固かったし（例えば「警部」が女の写真を見せた時、二人ともほとんど反応しない）、のだは台詞こそ明瞭だったが、いつ「改心」したのか見えて来なかった。

リアリズムでは説明のつかない「警部」の存在にしても、五人が偶然一人の女性に関わっていたという設定にしても、この作品はまず「（あざといほど）よくできたお芝居」であり、あり得ない寓意劇である。だからこそ作者も、発表の時点（一九四五年）よりずっと以前の設定にしたのだろう。観客はまずその「芝居臭さ」を楽しめばよい。そのうちに自然と上流階級への憤りや、誰もが他人の人生に対して責任を負っているという重い主題を受け止めるはずだ。今回は律儀だが遊び心に乏しかった。例えば一家が本当に報いを受ける幕切れで、年配の女中エドナ（前崎圭以子＝福岡現代劇場）に無言でひと芝居させてほしかった。

婚約者ジェラルドの坪内白蓮（ばあくぅ）は長身で華があるのが何より。息子エリックの中川好仁（福岡現代劇場）は最初、現代日本のすねた茶髪少年にしか見えなかったが、後半反省し変わっていく姿は素直で真情を感じさせた。致命的なミスが一つ。「警部」が去る時の「血と炎と怒り」によって復讐されるという捨て台詞が今回なかったのに、後でシェイラが口にしていたこと。とちりか上演台本の手落ちか、あまりにも観客に不親切。

パンフレットによれば、創立一五年の「ばあくぅ」も福岡現代劇場と同様、定評のある作品を中心に公演を続けて来たという。東京の劇団が大ホールでしか観られない九州で、地域劇団が小空間で正統派の舞台を作り続けていることは喜ばしい。だからこそ「名作」を本当に生かすためにも、律儀なだけでなく、戯曲が本来持っている流れをつかんでほしい。

（5月28日　アトリエ戯座）

2人がひとつであること

関西芸術座『ひとりぼっちのロビンフッド』

飯田栄彦／原作　宮地　仙／脚色　大塚雅史／演出

演劇評論家　神沢　和明

舞台上で少年と犬がぶつかった瞬間に合体する。そして雲をつく巨大なイノシシと光速で戦う。そのイノシシの体からは無数の光る玉が飛び散り、その命の卵が死にかけた少年の体を生き返らせる。学校公演用の舞台だから、大がかりな仕掛けはできない。脚色者のわがままがつまった舞台の演出を、リアリズム演劇の老舗の「関西芸術座」が、優れた小劇場系劇団のひとつ、「ランニングシアター・ダッシュ」の大塚雅史に依頼した。この組み合わせは大阪では希有なこと、良いことである。

以前、新劇団協議会の合同公演で、「南河内万歳一座」の内藤裕敬が、手塚治虫原作『陽だまりの樹』の脚色・演出を担当して話題となった。しかし今回は関芸単独の公演、脚色も座内作家である。大塚にすれば、相手の陣地で仕事をすることになる。しかも経験のない、学校公演用という制約がある。もともと「ランニングシアターダッシュ」は演技者の身体表現にポイントを置くエネルギッシュな動き（昔の「南河内万歳一座」のようにプロレスじみたものではなく、マスゲームのように洗練されている）が売りで、装置にたよることはしないから、移動公演には適している。だが、優れた照明家でもある大塚の大きな武器、ライティングの魔力がかなり制限されるだろう。大塚の起用は脚色者の希望だと聞いた。「おもろい」と「どないなるやろ」。つまり、この芝居の演出には関西では大塚が最良だろうという期待と、関芸の役者が演出者の要求についてゆけるのかという不安である。

舞台は関芸の許容度を示すものに

なった。どちらの劇団をも見慣れた目からいうと、関芸が「ランニング」化していた。

裸舞台に、半円状に箱が並べられ、四方の奥に柱が立つ。各々色違いのジャージを着た8人の演技者たちが箱に腰掛け、「ガサガサ」「ヒューヒュー」と声で空気を動かし始める。取り囲まれた中央空間は、教室にも家にも、山中にもなる。想像力が働く限り、すべての場所である。皆に見つめられながら、主人公・武（松本幸司）が走り出す。物語の始まりだ。「疾走」がこの芝居の基調になっている。冒頭の、夢の中のマラソン大会から、巨大イノシシ・金目大王との戦い、そして魂が抜けて死にかけている武の身体を救うために、命の卵とともに武の魂と猟犬・テツ（水城なおき）が駆けつける最後まで。

武とテツが合体する場面は、ジャージの上着を取り替え、2人の動きをシンクロさせることで表現した。はじめにそれを強調した後は、2人がそれぞれに動いてゆくが、それでも2人（1人と1匹?）は一体なのだということを、同じ車を運転する、ジェットコースターに同乗する等のジェスチャー演技で、確認している。飛躍する連想が軽快で面白い。また金目大王は、2人以外の演技者の一体演技で表現し、死闘はテツ対6人の激しいファイティング場面で盛り上がる。

しかし全体として、「消化不良」の印象をもったことは否めない。演技者たちは心身を解放した、はじけた演技を要求され、それに応えようとしているのだが、方法論の違いが今回の初めての顔合わせでは克服されていない。「ランニング」の役者は「本当に走る」のだが、関芸の役者は走りを「演じて」しまう。多くの演技が無対象なのだが、「ランニング」の役者はそれを「運動」の一部として取り込み、躍動感と流れを感じさせる。だが今回の舞台では、リアリズムにのっとった裏付けのある「科」と、ただの「サイン」の間で宙ぶらりんになって、美しくない。役者も楽しくないのではないか。

だが、これはあくまでスタートだ。今後、上演を繰り返せば練られてゆくはずだし、演出者との共同作業も回数を重ねれば、より良くなっていくだろう。全体としては、面白く見られるのだから。金目大王が、義賊「ロビンフッド」と呼ばれる理由、彼が人間と戦い続けながら守ろうとしたもの（命・自然）が、舞台の表面上の面白さに負けないでもっと強く伝わってくれれば、感動も深まるに違いない。

（5月15日夜　関芸スタジオ所見）

劇団大阪『スナーを探して』

広島友好／作　熊本　一／演出

スナーは鯨のこども。絵本作家の龍一が書いた物語に登場してくる。海の水をきれいにしようと研究しているタンブーラ博士が、スナーをさらった。お父さんクジラは潮をふきながら、果てしない海の中、スナーを探し回る。

龍一が書いたこの物語に、絵本のパートナーである画家のミチルが不審を投げかける。お母さんクジラは出てこないのかと。言われて、龍一はハッと気付く。自分の意識の中に、妻である都輪子が仲間として存在していないことに。いや、むしろ彼女の存在を排除しようとしている無意識の自分に。

3年前、都輪子が運転する車が事故を起こし、一人息子の守が死んだ。都輪子も下半身不随で車椅子から離れられない。それでも都輪子は、病院の検査技師として働いている。売れない作家の龍一の収入では生活できないからだ。龍一と、学生時代からのパートナー、ミチルとは親密な関係にある。それに対する都輪子の苛立ちが、事故の要員の一つであったことも否定できない。家族を成り立たせていた「こども」の存在を失って、龍一と都輪子はお互いを必要とする「理由」を見失ったまま過ごしてきていた。

都輪子は、子どもと死別した親たちの会「小さな虹の会」を主宰している。失った子どもへの思い、自分の心の傷を言葉に表し文章につづることで、守の記憶を人々に残してもらいたい。そう思っている。しかし、悲しみから脱却できないまま、守との思い出を自分の中でそっと残してゆこうとする龍一は、都輪子のそうした活動に違和感を感じずにいられない。

中村みどりの都輪子には、心と体に負った重荷につぶされまいと、仕事と社会活動に向けて自分を奮い立たせている強さが感じられる。神津晴朗の龍一にはまた、大きな悲しみによる脱力感から抜けだせずに、虚しさをかみしめる男の気分が漂う。そして2人が、互いに相手に対して抱いている違和感、不信感が伝わってくる。いつ壊れても不思議でない2人をつなげているのは、守の記憶だ。それは事故の直前に龍一と組み立てていた未完成のブロックの消防車であり、かじりかけのまま冷蔵庫

に残されたアイスキャンディーといった具体的なモノで、提示されている。

都輪子の妹・朝子と行男の夫婦も壊れかけている、都輪子たちよりもわかりやすい形で。行男は競馬にはまり、それを責める朝子に手をあげる。しかし生活費は入れているし、一人娘の和美をかわいがっているのだから、そうひどくもないだろう。許せないのは行男が朝子より都輪子を好きだということ。都輪子に向かってそう言ってしまう朝子には、無神経というよりは、自分と行男をつなぐものは何なのか、それが見えなくなってくることへの怒りがあるだろう。それは行男にもある気持ちだ。「スナー」は和美のことかと思ったと行男が言う、そこに同じ方向を見ていながら、別々に悲しみ、悩んでいる、夫婦・家族の姿が、現在において普遍的であることが示されている。

岡部紀子の朝子は自分の気持ちをどんどん口にして、ある意味で芝居の重苦しさを戻してくれる役割である。明るさとつらさの配分が難しいと思う。都輪子たちが深刻な分、滑稽な要素が大きくなった。行男は身勝手な夫だったり、都輪子に迫ったり、龍一とミチルに別れろと言ったり、それらはいずれも都輪子への愛情から出ていることで一貫しているとはいえ、便利に使われる役の感じがする。朝子が都輪子に預けた離婚届を、龍一が自分たち夫婦のためのものだと勘違いして「壊れる」ことを覚悟するなど巧いトリックだが。熊谷志朗の行男からは、彼の表面的な部分しか見えなかった。

龍一が、自分の童話から「都輪子の声」を失っていたことに気付く。それに気付かせるのが行男であり、ミチルであるのが面白い。都輪子は東京でのシンポジウムで「スナー」の童話を朗読し、それを最後に「小さな虹の会」を退会しようと決意する。2人がお互いを見つめ直し、互いの存在の必要性を確認するところから、新しい人間関係を再生してゆこうと決意する。その結末は、観客にも希望をもたせる。

劇中でスナーの物語が語られ、その挿絵がスライドで映される（絵：島野千鶴子）。素朴ですっとしたスケッチ風のタッチで、かわいらしく話にマッチし、とても効果的である。なお上演は秋桜班、桔梗班のダブルキャストで、秋桜班を観た。

（5月16日　谷町劇場所見）

熟年パワーを描く兵庫の劇団

演劇評論家　今泉　おさむ

期せずして、兵庫県の3劇団が熟年老年世代を中心においた舞台を取り上げた。現在、世はまさにその方向に向かっている。そして、健康保険・年金それに生命保険までが危うい状態になろうとしている。若年世代も大変だろうが、働きに働き続けたこの世代も、まさに受難の時代である。

そして、その世代を描く、明るさをもって。これは時流に合っていそうだが、上演となると、そう簡単なことではない。まず、それだけの舞台の年輪を刻む活動をした、それ相応の役者が揃わなくてはどうしようもない、難しいがこれが前提である。3つの舞台を見て、感じるのは、素直に素朴にしっかり脚本を舞台に描こうとしていることである。ややもすれば、最近の舞台技術に頼ろうとしての衒いなどそこにはない。ここに、私がよく観る〈京阪神〉の舞台の中では異なる舞台づくりがあると見たのだが……。

もう一つ、老人をこれまでによくある〈老人らしく〉演じることは必要ない。これは、自分たちがそれ相応の年齢に達して初めて気づいたことであろう。

劇団四紀会「冬の桜」

森卓也／作　村井伸二／演出

「神劇まわり舞台」参加作品。劇団内若手作家による最新コメディと謳っている。舞台は、地方デパートにある、言わば客寄せアトラクション。音楽に乗って、生身の人間が演じる〈カラクリ時計人形〉の舞台裏の控え室。正面には表舞台に回り出る2階建て舞台が設置され、それは電動で動く仕掛けである。人形を演じているのは52歳から64歳までの現・元社員たち5人、言わば嘱託世代である。脚本は彼らの日常会話、その喜怒哀楽とデパート業界の盛衰が書き込まれている。

演じるのはいずれも劇団暦40年を

数えるベテランたち、大西衛一・友田民子・古山捷子・江口慶一・白上房子、それに古沢瑛子が加わる。この社員としての喜怒哀楽は当然、劇団員として過ごした喜怒哀楽にも重なるようである。なるほど、このカラクリ時計も40年の歴史があるとしている。人形の派手な衣裳で踊る。一見楽しそうだが、演出がパンフレットに書いている。身体は硬い、リズムに乗れない、セリフが入らず会話のテンポが上がらない、すぐ疲れる、等々「マイッタ」と。これには想像して笑ってしまう。しかし、一方で「ネバル！　ねばる！」と。これも同世代として肯ける思いである。人形に扮してのダンス、余裕とまではいかないが、結構楽しんでいる。各々の人となりがにじみ出ている。精一杯の努力が伝わってくるのも微笑ましい。

ただ、脚本には不満が残る。この世代、60年・70年の安保世代である。それが「学生運動」というコトバ一つで片付けられている。5人の人生が、まだ働く必要があるかないかの現在の状態しか描かれていない。したがって5人が集団としての存在以上に、個として際立ってこない。また、カラクリ時計廃止の理由が「不況」と「人が入ってもお金を落とさない」ということで片付けている。だが、商売の最優先課題は人集めではなかろうか。根本の芯がぶれてしまっている。

しかも、彼らと同世代の社長を登場させながら、添え物以上には活かされていない。企業と個人の対立は見据える必要がありはしないか。このあたり、〈この世代の生き様に対する聞き書き〉が必要ではなかったかと思われる。それによって膨らみも出ただろうし、ラストの華やかさにも余韻が流れるのではないだろうか。

（5月31日昼　KAVCホール）

劇団かすがい「銀色の狂騒曲」

高橋正圀／作　楢崎英三／演出

シルバー世代、もう一つのテーマは「色恋」である。「セックス」と言い換えてもいい。平均寿命が伸びれば、色恋沙汰寿命も延びるのは当然のことであろう。一昨年、『神戸職演連』が上演し、その時の批評も書いている。劇場の特性を活かして、深く奥行きある舞台装置を設え、どっしりと構える芝居ができた。ならば、下手の玄関口にも工夫がほしい。それと、上手奥の2階への階段に掛かる欄間の切り出し位置はやや目障りになった。

主役となる66歳の未亡人・和花を年寄り臭くなく創ったのがいい。演じた田中晴子は劇団の応援団「かすがいくらぶ」所属というが、劇団員に遜色ない出来である。若々しい。現在のシルバー世代はこういうものだと再認識した。カルチャーセンター、合唱団、太極拳等々忙しい毎日、元気いっぱいである。だから、お節介焼きの妹・結花が、仲人50組記念にと再婚話を持ち込んでくる。同居の高校教師の長男は恥ずかしいと大反対。しかし、和花は満更でもない様子。そこへ農地が道路計画に架かり土地成金となった72歳の従兄で寡男の平助が性懲りもなく3度目の若い相手を連れて、全財産を背負って家出してくる。この2人のシルバー世代をめぐってのすったもんだが島村家の狂騒曲となる。

登場人物はすべて優しさにあふれている。それが和やかな気持ちで舞台を見つめていられるのだろう。演出は上品にではなくにぎやかに、喜劇タッチでややハイテンポに舞台を創り出し、2幕目では自然と客席から笑いが出るようになった。これだけでも、この舞台は成功である。出演者たちのアンサンブルもしっかりしている。身近にありうる話として、作り物でない人々が生き生きと活躍している。特に、長男太郎の中島竜司（客演）が笑わせる演技をよくこなしている。そして、「愛とは心で抱いてくれるもの」というコトバも大事だが、この世代の生き方として、「心配なんて起こってから考えればいいさ」。「生きがいとは誰かのために尽くすこと」というコトバがより現実味を持って聞こえてくる。

ただ、平助のリョウ・チン（客演）は外見をあまりに喜劇的に創りすぎ、現実味をなくした。相手の朱美は脚本には40歳と指定があるのだろうが、あの若さと態度では到底そうは見えない。しかし、実際ここで演じて見えたように、年齢が離れていようと、20代後半から30代前半程度の設定でいいのではないか。その年齢で充分納得できる。

（6月6日夜　ピッコロシアター大ホール）

神戸ドラマ館ボレロ「こんにちは、母さん」

永井　愛／作　三村省三／演出

「神劇まわり舞台」参加。東京下町。神崎福江は70歳も半ば過ぎ、夫に先立たれ、1人息子はとうに家庭を持ち、1人暮らし。といっても、近隣の女たちと作った、外国人留学生のためのボランティアサークル「ひなげしの会」で活動し、「源氏物

語」読書サークルでは、講師の元大学教授・荻生直文と親しい仲になりつつあり、毎日は充実している。

そこへ、2年も顔を出さなかった息子の昭夫が突然やってくる。彼は自動車会社の人事部長に出世したが、現実は何千人と首切りを遂行するリストラ対策部長である。会社人間だった彼は、心身ともに疲れ果て、妻とは離婚寸前である。その彼を追いかけて、首切りを通告された同僚・木部が押しかけてくる。それに直文のプロポーズを受け入れようとしたが、彼の息子に反対され、福江の身辺は急に慌ただしくなっていく。それでも、めげずに家出してきた直文と一緒に暮らそうと決心したが、昭夫も転がり込んできたので、微妙な3人の生活となる。そして荷物も運び込み、新しい生活の出発の日、直文は心臓発作で急死する。老いとは残酷である。舞台は、真ん中に福江の住まい。取り巻いてやや上方に近所の3軒の家と下手にこの家の物干し台。場面をうまくしつらえてある。

舞台はゆっくりとしたテンポでじっくり描いている。昨年から練習に入り、石川淑子＝福江、松澤弘＝昭夫、三村省三＝直文の三人が、各々の個性のアクセントを強めて、しっかりと作りあげている。劇団として上演を熱望していた想いが伝わってくる。石川淑子は自分のありのままで演じている。やや若いかと感じもするが、台詞を自分のものにしているから迷いは感じられない。それが強みとなっている。松澤弘は始終不機嫌である。だが次第に演じようとする昭夫像が固まってきた。三村省三はこれまでにない役柄を演じた。それが次第に様になっていくのは積み重ねた年輪だろうか。他では小林じゅん子（客演）＝荻生康子（長男の妻）が好演である。

下町育ちと学歴のある山の手、付かず離れずの昔ながらの近所付き合い、企業が生き残るための情け容赦ないリストラ、情の交流を失った夫婦の破局、それらを遂には母と息子のあっさりとしているようで、互いの心をさらけだす会話でまとめて、流石はいま人気の高い作者の作品、（現在）を捉えている。

福江は言う。老いの怖ろしさとは「昨日できたことが、今日できなくなることだ」と、そして諦め、諦めていくのならば、現在を精一杯生きることである。近所の年寄り仲間と毎晩電話を掛け合う。「生きてますか」と、笑えるようでいて、現実はそうであろう。190分の舞台を見応えある出来に仕上げている。

（6月7日夜　KAVCホール）

結婚申し込み

楠本幸男／作

「ささの葉さらさら」より

病院の病室

病室の窓に飾られた笹の葉には願いごとを書いた短冊がつけられている。

上原は車椅子の上に座り、紙に何か絵を描いている。

木野　（上原のベッドの布団をなおしながら）明日、退院と思うと、今夜はうれしくて眠れんかもしれんね。

上原　……

木野　下着なんかはちゃんと包んだ？

上原　ええ。

木野　明日の朝には退院ね。……何、描いてんの？

上原　僕の、自画像です。

木野　（絵をのぞき込んで）……上手……。上原さん、才能あるね。でも、あんまり似てない。

上原　……

木野　これ、どうして、悲しそうな顔してるの？

上原　さあ……明日は、天気ええですかね。

木野　（窓のところに行き）ええんじゃないですか。雲も出とらんようやし。…………この花、しぼんじゃったね。確か、吹上国民学校の生徒さんが見えた時、持ってきてくれた。新しいのに替えて……もうその必要はないか。

上原　ほんとに、感謝してます。今まで。

木野　何言うてんのよ、看護婦の務めでしょ。

上原　……木野さんは、看護婦の務めとして、そこの花を替えてくれたんですね。

木野　……

上原　……

木野　隣の鈴木さん遅いね。ちょっと涼んでくる言うたのに……。

上原、鉛筆を床へ落とす。

木野、拾って上原に渡してやる。

上原　ありがとう。

木野、立ったまま看護記録に記入している。

上原、今度はわざと鉛筆を落とす。

木野　……

上原　拾ってください。

木野　……

木野、鉛筆を拾って上原に渡す。

上原　ありがとう……。

木野　（冷たく）あんまり人に甘えてばかりいたらあかんよ。できることは自分でせんと。傷痍軍人はあんただけとちがうんやから。

上原　……（傷ついている）

間

木野　……ごめんなさい。

上原　いや、いいんです。気にせんでください。

木野　私、あちこちの病院へ応援に行くでしょ。外地から転送されてきた人、空襲にあって瀕死の人。そういう人ばっかり見てきたから、足の一本二本、手の一本二本なくてあたりまえ、片方の目がつぶれても、もう一方の目があるやない、そういう感覚になってきてしまうんね。自

分がそういう目におうたら、どんなにひどいかわからんのに……

上原　……

木野　でもね、ひどいのは兵隊さんだけやないんよ。……大阪の空襲の時はひどかった。

上原　大阪にいたんですか。

木野　そう。空襲で両親と一番上の妹を亡くして、今は下の妹と、末っ子の弟と暮らしてる。家に帰ったら母親代わりよ。

上原　……

木野　こんなこと言うたの初めてでしょ。今日でお別れやからね。私、湿っぽい話は、いやなの。

上原　……

木野　でも、和歌山に来て、よかった。

上原　……

木野　和歌山も安心してられんけどね、空襲。

上原　木野さんは、強いなあ。

木野　から元気よ。それと、この、病院の忙しさのおかげ。

上原　木野さんが病室に入ってくると、電気がついたみたいにぱっと明るくなる。

木野　そう。すると私は電気代節約の貢献で表彰してもらわんとあかんね。……(笹の葉に目を留めて)小学生が書いてくれたんね。(読む)「兵隊さんの病気が早く治りますように」「早く元気になってください」「おなかいっぱいご飯が食べられますように」……これは自分の願いごとを書いたんね。……「兵隊さんにお嫁さんが来ますように」、おませやわ、この子は……

上原　……

木野　この笹、川へ流さんと願いごとがかなわんのにねえ。帰りに流してこようか。

上原　もう、遅いよ。

木野　そうね。(窓の外を見て)流れ星でてないかなあ、お願いするんやけどなあ。

上原　何を?

木野　もちろん上原さんの足がようなることよ。

上原　……

木野　でも、岡野医師も言ってた。何とか切り落とさずにすんだのは奇跡に近いって。それに訓練すれば松葉杖で散歩ぐらいできるようになるって。そうなったらええね。

上原　……

木野　体温はかっときましょうか。(上原の脇に体温計を挟む)

上原　今日は、木野さん、うきうきしてるね。なんかええことあるんですか。

木野　そう?……ふふ、ええことあるんよ。

上原　……

木野　これから妹と弟つれて叔母とこへ泊まりに行くの。

上原　……

木野　和歌山にいる唯一の親戚よ。本町で仕立物やってるの。いろいろと愚痴聞いてくれるしね。私にとっては唯一の気晴らし。

上原　……

木野　5号室のね、嶋村さん、今日私にトランプ占いしてくれたんよ。

上原　……

木野　どう出たと思う?

上原　……

木野　私は、晩年は幸せになるんやって、ふふっ。

上原　ええやないですか。

木野　晩年なんていやよ、若いうちに幸せになりたいわ。

上原　……木野さん……

木野　……

上原　結婚する予定はありませんか。

木野　……突然何いうの。

上原　正直に言うてください。予定はありませんか。

木野　……結婚なんて、考えたことないな。毎日戦争やから。

上原　よかった。

木野　……

上原　ちょっと、この写真見てくれませんか。

木野　なに?(写真を見る)これ、りりしい顔。……上原さん?

上原　……僕の、兄です。

木野　そう。よう似てるわ。

上原　僕より三つ年上ですが、今、住友金属へ行ってます。二度の召集で満州やらフィリピンやらへ行って来ましたが、運の強い男です。どうか、嫁に来てください。お願いします。

木野　……何て?

上原　どうなんですか、だめなんですか……。

木野　ちょ、ちょっと、何で私、上原さんのお兄さんと……それも今写真見て今決めよって、無理な話でしょ。

上原　……あまり、気、進まないんですね。

木野　だからそういう問題じゃないって。

上原　じゃあ、どういう問題なんです。僕はあなたのことよく知ってます。

木野　でも私はお兄さんのことなんか知らない。

上原　僕と兄弟なんです。それだけで十分じゃないですか。

木野　……

風が出て、風鈴がなる。

木野　どうして、お兄さんなの。

上原　木野さんが兄の嫁に来てくれると、僕も時々はあなたに会える。

木野　どうして……お兄さんなの。

上原　独身やし。

木野　あなたも独身でしょ。……どうしてお兄さんなのよ。

上原　僕は、こんな体やから……

木野　そんなこと!

上原　……

木野　上原さんは、なんか、あきらめてる。そんな考え方、嫌い。

上原　……じゃあ、僕となら結婚してくれるんですか。

木野　……

上原　……もうええです、もうええ。おばさんとこへ、はよ行ってください……。

木野　……なんでそんなひねくれた考え方するの。

上原　僕の足はもう自由に走ったり歩いたりできんのや、結婚してもあなたが不幸になるばっかりやないですか。

木野　頭が残ってるでしょ、目が残ってるでしょ、手が残ってるでしょ、お兄さんがいるでしょ、お父さんもお母さんもいるでしょ、支えてくれる人がいっぱいいるやない、これ以上何贅沢言うてんのよ、私には父も母もいない、支えてくれる人は誰もいないの、そのかわりに私には支えなきゃならない人ばっかり残ってんのよ!……

上原　そやから僕はこれ以上そんな負担をあなたに……

木野、うしろから上原の頭をぐいと抱く。そして、床に泣き崩れる。

木野　……ごめんなさい、取り乱して。看護婦失格ね。

上原　いや……

木野　急に言われたんで、気持ちの整理がつかへんの。今晩一晩ゆっくり考えさせて。

上原　ええですよ。どんな結果になっても、気にすることないですから。

木野　（時計を見て）もう、行かんと。

上原　あ、体温計……

木野　（体温計を受け取って）……三十九度、四十度、四十五度、嘘！（反射的に何度も体温計をふる）

暗転

お問い合わせは
楠本幸男
〒640-8391
和歌山市加納271の14
TEL　0734-73-7589

公園―待ち合わせ

作／広島友好

時　現代

所　とある街のニュータウンの一角にある公園のベンチ

登場人物

Ⅰ場　男1
女1（男1の妻）
男2
女2
男3

Ⅱ場　男1
女1
男4
男3

Ⅰ　場

とある街のニュータウンの一角にある公園のベンチ。

女1の声　大丈夫？　そこまで歩ける？

女1が男1の身体を支えながら来る。男1は胸を押さえている。女1は辺りに注意を払いながらも男1を気遣いベンチに腰掛けさせる。

男1　（少し息をつき）ここが――そうか。

女1　ええ。

男1　知らなかった、こんな公園……。ここに引っ越して――

女1　七年――

男1　七年になるけど――団地の近くにこんな公園があるなんて。

女1　あの子はよく来てたそうよ――

男1　ああ、そう。

女1　このベンチになんか座って――煙草――吸ってたって――

男1　……。

女1　聖地の池があるのよ――

男1　聖地の池――

女1　この奥に――あの子がそう呼んでたらしいの――

男1　聖地の池――

男1は胸に手を当てている。まだ苦しいらしい。

男1は紺のスーツに地味なネクタイ。女1もかしこまった服装だが、色は赤で割に派手である。二人は菓子箱の入った紙袋を持っている。

女1　（意を決して）わたし――ハンカチ濡らしてきます――トイレで――

男1　待って――行かなきゃダメか――

女1　行かないと――待ってるのよ、わたしたちのこと――

男1　待ってるのか、本当におれたちのことを――

女1　――

男1　おれは行けそうにもないけど――

女1　とりあえず――見てきます――

男1　そっとな――そっと――

女1、去る。

男1　これでいいんだろか――このままでいいわけない――。しかし――

男2、来る。手に男1・女1と同じ紙袋を持っている。スーツ姿。ネクタイがくたびれている。

男2　ここ（ベンチ）、よろしいですか――

男1　あ、――ええ。

男2、ベンチに座る。紙袋からパンと紙パックの牛乳を取り出し食べる。

男1　（一人溜め息をつく）

男2　（男1の様子に気づき）どうです――（とパンを差し出す）少しは元気になりますよ――

男1　いいえ――

男2　（パンをぱくつきながら）あなたも、あれでしょ――（ト前方の先の方を手で示す）

男1　あれって――（ト指された先を見る）

男2　（男1を見て）――これ、これってことですよ。（ト片手で首を切る動作をする）

男1　え――！（内面で激しく動揺する）

男2　でしょ！（男1の様子を見て得心する）

男1　何が「でしょ！」です？　何か知ってるんですか――（ト紙袋を抱えて逃げ腰になる）

男2　え――違うの――じゃお宅、爆弾犯！（ト男1の抱えている紙袋を指す）

男1　爆弾犯？（意外な言葉に驚きながらも半ば拍子抜けする）

男2　そうじゃないでしょ――じゃ、やっぱり――

男1　これは（紙袋）――今からある人のところへ行くつもりなんです。その手土産――

男2　だから、これ（首切り）でしょ――

男1　――

男2　首切り――

男1　――

男2　リストラ。

男1　リストラ――

男2　首切りにあって――新しい就職先に手土産持ってお願いに行くんでしょ。

男1　どうしてわたしが――首切り――リストラなんです？

男2　驚いてたじゃない――（首切りの動作）さっき。
男1　――
男2　同じだからですよ、同じ首切り、リストラ組――
男1　――？
男2　その先の（ト手で前方を指す）ハローワークを出て、ああきょうもいい勤め口が見つからなかった、失業保険ももうすぐ切れちゃうし、かみさんにはまだ会社首になったって話してない、ああおれこれからどうしたらいいんだろうって、お宅みたいに溜め息つきながらトボトボ歩いてると、ちょうどこの公園のこのベンチにぶつかっちゃうんですよね――
男1　その先にハローワークが――
男2　みじめなもんですよ、男なんて、家に居場所はありませんからね。子どもたちも変にすねてて。家内がね、甘やかして育てたもんだから――
男1　――
男2　わたしはここで待ち合わせなんですがね――（パンをかじる）
男1　子どもさんが――すねてる――
男2　え、ええ――
男1　奥さんが――甘やかす――
男2　そうなんですよ――難しい年頃でしょ――父親なんて煙たがられるばっかりで――
男1　――
男2　あなたも――
男1　え――
男2　そうですか――子どもさんでご苦労を――
男1　――
男2　そうですか、そうですか――どこも同じだ――ハハハ……

ト男2、パンをかじる。トそこへ女2（高校の制服姿）が来る。

女2　（男2に話しかける）だれ、その人？パパの友達――
男2　え、知らない人だよ――
女2　ふうん？（ト男1をジロジロ見る）
男2　さ、行こうか――
女2　（手を出す）
男2　何？
女2　行かないよ――
男2　え――
女2　くんなきゃ、行かないよ――
男2　きょうは持ち合わせがないんだ。わかってるだろ――これで（首切りの動作）、これなんだ。（ト両手を広げて肩をすくめて見せる）
女2　この間もそうだったじゃん。
男2　――
女2　もうつき合ってやんないよ――
男2　ま、ま――

ト男2は男1を気にして、女2を連れて横に逃げようとする。

女2　おこづかいくんなきゃあたし、家にバラすからね――
男2　待ってよ、家にバラされたらおれ、いるとこなくなっちゃうよ――
女2　だったら、その袋（男2の持っている紙袋）よこしなよ――
男2　これはダメだよ――
女2　じゃ――（ト手を出す）
男2　チッ。（舌打ち。内ポケットに手を入れようとする）
男1　やることはありませんよ――
男2・女2　え――

男1　やることはないんだ、こづかいなんて――
女2　何だよ、おっさん――
男1　親が子どもを甘やかすと――碌なことにはならないんだ――
女2　関係ないだろ――
男1　（男2に）そうでしょ――
男2　え、ええ――
女2　うるせえんだよ――親父は引っこんでな。人のことに口出すんじゃねえよ――
男1　（男2に）そうじゃないですか――甘やかしたばっかりに、こんなことに――
女2　うるさいってんだよ、金のないやつとは親だろうと何だろうとつき合えねえって の！
男1　（男2に）そうじゃないですか――
女2　うるさいって言ってんだろ！
男2　――（女2の頬を叩く）
女2　――！
男2　あ――、すまん。
男1　いいんですよ、いいんですよ、あやまることはないんだ、親が子どもにあやまることはない――
男2　でも――
男1　もっと叩けばよかったんだ――
男2　え――
男1　もっと叩けばよかったんだ――
男2　（鸚鵡返しに）叩けば――よかった――
男1　襟首つかまえて――あの子の目を見て――こうして、こうして――（ト あたかも目の前に自分の子どもがいるかのようにその子の頬を平手で殴るマイム）こうして――こうして――
男2　襟首つかまえて――こうして――こうして――（ト女2の襟首をつかまえて女2に平手打ちをする。がそれは本当に殴るのではなく、男1の言葉に魔法をかけられ、演技……マイムのようにやる。女2も殴られるたびに演技のようにその平手打ちを受ける）こうして――こうして――
男1　そう――こうして――こうして――あの子の中の魔物を叩き出してやればよかった――
男2　こうして――こうして――魔物を叩き出してやる――
男1　そう、魔物を――あの子の中から――こうして――こうして――（叩くマイム）
男2　こうして――こうして――（叩くマイム）
男1　こうして――こうして――
男2　こうして――こうして――
女1　（男1に）ダメ――叩いちゃダメ――
男1　――

女1、帰っていた。

女1　間違いだったわ、叩いちゃダメだったの――あの子には愛情が必要だったのよ――抱いてやればよかったのよ――甘やかしてやれば――
女2　（声を上げ泣く）
女1　あの子は異常なんかじゃない、あの子の中に魔物なんていない――
男1　――叩いてたのは――おまえじゃないか――
女1　――
女2　（泣く、身体を激しく震わせて）
男1　昼もなく夜もなく叩いてたのは――
女1　（耳を塞ぐ）

男1　叩いて叩いて、厳しくしつけようとしてたのは——

女1　（耳を強く塞ぎ背を向ける）

男1　あの子は泣けば済むと思ってた——（男2が女2の肩に優しく手をかける）おまえが怖いばっかりに——おまえから逃れるために——うそ泣きをしてたんだ——

女2　（泣く）

女1　やめて——

男1　あの子は自分が悪いなんてこれっぽっちも思っちゃいない——仮面を被ってた——いや、おれたちの前で透明になってたんだ——

女2　（ピタリと泣き止む——薄笑いを浮かべているようにさえ見える）

男2　（ト女2を抱く。きつく抱く。女2を慰めるように。がそれは父親のそれを越えて男のそれである）

女1　いつそれに気づいたの——

男1　え——

女1　いつ——あの子が透明になってただなんて——

男1　——

女1　いつ——

男1　それは——（答えられない）

女1　あなたは人に言われて初めて気づいたのよ——あの子のことに——

男1　——

女1　あの子の心の闇に——

男1　——

女1　あなたの存在なんてあの子の中にはなかったのよ——これっぽっちも——

男1　——

女1　あなたこそ——透明な存在だったのよ——

男1　——

ト女2がもう一つの紙袋を持って逃げ去る。

男3　あ——、待て——こら——

女2　だれだよ、おっさん——

男3　（女2を一瞬睨んで）ここの管理人。（四人の間を縫って歩きながら）この辺り最近物騒な事件が続いてましてね——地元の自警団が出てるの知ってるでしょ——地域の人もみんなピリピリしてるんですよ——。これ（紙袋二つ）——中身改めさせてもらってもいいですかね——

男1　（紙袋の一つを取り上げ）いや、これは——ダメです——

男3　ダメ——どうして——

男1　いや——これは——

女1　わたしたちこれからあやまりに行くところなんです——

男1　（小声で叱る）バカ！

女1　あるお宅に——その手土産なんです、これは——

男3　しかし、だったら——いいでしょ——

ト女2がもう一つの紙袋を持って逃げ去る。

男3　あ——、待て——こら——

男3、男1と女1に気持ちを残しながらも女2を追って去る。

男2　ハハ、それじゃ、どうも——

男2も追って去る。

男1　まさか——あの親子が——

女1　何——

男1　爆弾犯——

女1　え——うそ——

男1　最近あったじゃないか、公園のベンチに置いてあった紙袋が爆発して人が重傷負ったって——。さっきもあの男——爆弾犯がどうのこうのって——

女1　待って——

男1　え——

女1　しっー　——！

男1　——

女1　それ、違う——

男1　何——

女1　（大声）動いちゃ——（小声で）ダメ！

男1　（小声）だから——何——

女1　違うの——

男1　違う——

女1　袋が違うの——

男1　え——

女1　それ（男1の抱えている紙袋）、わたしたちのじゃない——

男1　えー　——（ト紙袋を宙に放り投げてしまう）

女1、紙袋をあやういところでキャッチする——

女1　やめて——やめて——

男1　置け、置け、そっーと置け。

女1　（紙袋をベンチの上に置こうとする）

男1　（大声）バァッー　——

女1　——！（びっくり）

男1　——クダンだったらどうする——

女1　いいから、大声、出さないで——

男1　ごめん。（のどの辺りをさする）わざとじゃないんだ、声ひっくり返っちゃった——

女1　いいから（黙って）——

女1、紙袋をやっとベンチの上に置く。

女1　（男1に）見て——

男1　え——

女1　中、見て——

男1　何で——

女1　気になるじゃない——

男1　（一瞬中を覗こうとするが）自分がやればいいじゃない——

女1　わたし女よ！　いいから（やって）！

男1　わかったよ。（ブツブツと）都合のいい時女になるんだからな……

女1　え、何——何か言った——

男1　別に——

男1、紙袋の中を覗く——

女1　（大声）バァッー　——

男1　——！（びっくりして飛び上がる）

女1　——クダンってことないわよね——

男1　やめなよ、それ——

女1　ごめん、のどの調子が——自分でも（変）——

男1　やめてよ（お願いだから）。

男1、紙袋の中を見る。

男1　あれ、これ——
女1　（離れた所で）何——
男1　（取り出す）ビデオ——
女1　ビデオ——
男1　うん。
女1　ビデオ型バァッー　——クダンってことない——
男1　ない——
女1　（近づいて、見る）——本当に（ビデオだ）——
男1　さっきのあの男の持ち物だよ。どうするかな——
女1　これ、ちょっと——（紙袋の中に何か見つけた）
男1　何——
女1　やだ——！（嫌悪と好奇と恥ずかしさ）
男1　何さ——（女1が紙袋の中に手放した物を取り出す。小型の封筒に写真が入っていた）わっ——すげ！　丸見え！
女1　やらし！
男1　……あれ、これ——あの子だよ——あの子——
女1　え——
男1　さっきのあの子——高校生——
女1　うそ——（写真を見る）本当だ——

二人、写真を見る。トそこへ女2が来る。紙袋を持っている。

女2　かえてくんない——（下手に持っている紙袋を前に突き出す）
男1・女1　え——（びっくり）
女2　それと——（この紙袋）
女1　ごめんなさい。見るつもりじゃ——
女2　別にぃ——

紙袋を交換する。男1と女1は小声で何か言い合う。女1は女2に対し何か言うように男1を小突く。

男1　あ、あの——
女2　何——
男1　わたしがあれすることでもないんだけど——
女2　——？
男1　あの人——知ってるの、このこと——
女2　え、このことって——
男1　その、写真——
女2　知ってるよ——
男1　知ってるって——それで、何も——
女2　勘違いしてない——
男1　え——
女2　あの人のこと——
男1　あの人って——きみのパパ——おとうさん——
女2　パパだけどさ——あたしのおとうさんじゃないよ——
男1　おとうさんじゃない——
女2　ただのスケベ親父——マニア——写真とかビデオとかの——
男1　マニア——
女2　そ。なのにこづかいくんないなんて、最低でしょ——
男1　こづかい——ああ、そのこづかい——
女2　フン。
女1　恥ずかしくないの——
女2　え——
女1　こんなことして、恥ずかしくないの——。親御さんが知ったらどんな思いをするか——
女2　（突然笑い出す）キャハハハハ——
女1　何——

女2　すっごい、意見されちゃった——キャハハハハ——
女1　失礼でしょ。
男1　いいよ。（もう）
女2　（急に真剣な表情になって）あたし、読んじゃった——
男1　え——
女2　手紙——
男1・女1　——
女2　そん中の手紙——
男1・女1　——（自分たちの持っている紙袋の中を見る。そこには封筒に入った手紙があった）
女2　おばさんたちなんだ、あの子の親——会えて最高——
男1・女1　——
女2　ねえ、彼元気なの？　今どうしてんの——
男1・女1　——
女2　まだ逃げ回ってんだ——
男1・女1　——
女2　周りの大人は何て言ってっか知んないけど、あの子、ヒーローだよ、やっぱ——あたしらみたいなこっちにいるしかない人にとってさ——。あの子は違うもん——カッコいいし、頭いいし——向こう側にジャンプして——飛んでっちゃった——
男1　向こう側にジャンプして——
女1　飛んでっちゃった——
女2　（陶酔して）あたし、好き、あの子、怖いけど——
男1・女1　——
女2　もしかして、あたし——恋してるかも——。
男1・女1　——

暗転。

Ⅱ　場

1場から数日後のニュータウンの一角にある公園のベンチ。
男1・女1、来る。女1が辺りに注意を払いながらも男1の身体を支え、ベンチに座らせる。男1、苦しい息づかい。二人は紙袋を持っている。

女1　会いに行こうとするたび——そうなるのね——
男1　——
女1　ハンカチ濡らしてくるわ——
男1　また——だれか来そうな気がする。
女1　そう——そうね。（行こうとする）
男1　あ——袋は——
女1　取りあえず——（ハンカチ示し）行ってくる。

女1、去る。

男1　これでいいんだろか——このままでいいわけない——しかし——。あれ、これ——（トふとベンチに落書きされている絵を見つける。じっと見入る）……いや、違う——あの子の絵じゃない——似てるけど違う。だれかがテレビ見て真似したんだ、きっと——そうだ——そうに決まってる——

男4、来る。スーツ姿。濃い赤のワイシャツに黒のネクタイ。

男4　ここ、よろしいですか——

男1　あ、ええ――
男4　（ベンチに座り）よろしくないでしょう――やっぱり――
男1　ええ？
男4　え――いや、よろしいですかは――ベンチに座ってもよろしいですかという意味ですが――よろしくないでしょうってのは――このままではやっぱりよろしくないでしょう――てことです――
男1　何を言われているのか――
男4　どうです――きっちりけじめをつけられたら――
男1　え――？
男4　その袋――あれでしょ――今から謝罪に行かれるんでしょ――
男1　え――何――（紙袋を抱える）
男4　わかってます――わたしたちはあなたのことを何から何まで知ってるんです――どこのご出身で、どういう経歴の持ち主で――どうあの子を育てたのか――
男1　あなただれです――
男4　申し遅れました、わたし、こういう者です。（名刺を出す）
男1　凹凸出版――
男4　（名刺を取り返す）――本出しませんか――
男1　え――
男4　本。タイトルは考えてあります――「息子A　この子を育てて……父と母　懺悔の手記」――ね、いいでしょ――ベストセラー間違いなしだ――
男1　わたしは、そんなつもりは――
男4　賠償金、半端じゃないでしょ――
男1　――
男4　仕事も――この先あると思えませんよ――
男1　――
男4　下のお子さんもいるんでしょ――二人――その子たちも育てていかなきゃ――そのためにも先立つものがなければね――
男1　しかし、突然言われても、わたしにはまだ信じられないんです――あのことが――
男4　あのことが――信じられない――
男1　ええ――
男4　こんな大騒ぎになってるのに――まだ――
男1　ええ、まだ。
男4　そりゃ、ま――親だったらそういうこともあるんでしょう……。しかし、金はいるでしょ――ね、やっぱり――
男1　――
男4　それに世間はあなた方両親があのことについて何と言うのか注目してます。逃げられやしませんよ――それに、責任あるでしょ、親として――相手方にも申し訳ないと――（思うでしょ）
男1　そりゃもちろん、だから――（ト紙袋を持ち換える）
男4　わかりました、こうしましょう――教育論です――
男1　教育論――
男4　教育書ですよ――あなたがどんな風にあの子を育てたのか――しつけたのか――
男1　どんな風にも――わたしは普通に――
男4　普通に――どうしたんです――（ト小型のテープレコーダーを取り出し録音し始める）
男1　普通に、いいことはいい、悪いことは悪いと――やめてください、何です、これは（テープレコーダー）――
男4　いいんです、気にしないでください。どんどんしゃべってください。それをわ

たしが文章に起こしますから。構成もします。細かい添削もこちらでします。お望みでしたらご希望の作家の文体にもして差し上げます。何の心配もいりません。本が出版されればあなた方の責任も少しは果たされるし、何より話せば気が楽になる――
男1　責任を果たせる――
男4　そう――
男1　気も楽になる――
男4　そう、――それにお金も――
男1　（気持ちが少し動く）でも、何をどうしゃべればいいのか――
男4　（男1の気持ちがこちらに傾いたことを察して）例えば――何か変わったことは――
男1　変わったこと――
男4　前兆といいますか――きっかけというか――あの子が変わる――
男1　前兆――きっかけ――いえ、何も――
女1　わたし、見たんです――
　女1、帰ってきていた――
男4　え、何を、（テープレコーダーを女1に近づける）何を見たんです――
女1　あの子が――猫を殺すところを――
男4　猫を――殺すところを――！　それはどういう――
女1　初めは猫と遊んでいるのかと――でもその前からイヤなことがずっと続いていたので――もしかして――
男4　イヤなことって何です――イヤなことって――（自分の口元にテープレコーダーを持って行き、また女1へ戻す）
女1　ここら辺りの猫が――うちの近所の野良猫が――
男4　野良猫が――
女1　足を切られたり――舌を抜かれたり――
男1　違う――あの子じゃない――
女1　それで――もしかして――
男4　もしかして――あの子がやったと――
女1　わたし見てないんです――何も――
男4　でも、さっき見たと――
女1　あの子のうしろ姿です、しゃがんで――それと、猫の声――絹を引きちぎるような――
男4　じゃ、やっぱりあの子が――
男1　（朗らかに笑う）違うよ、あの子じゃないよ――（ト瞬間女1との芝居になる――まるで家の居間にいるような）
女1　（男1に）でもわたし、見たの――
男1　うしろ姿だろ。しゃがんで、あの子のうしろ姿で――何してるかははっきり見えなかったんだろ――
女1　いえ、それと――
男1　それと――絹を引きちぎるような猫の声。でも――舌を抜かれて猫が声なんか――
女1　見たの――
男1　え、――でも、今見てないって――
女1　違うの――映画で――
男1　映画――
女1　そんなシーンがあったの。ペンチで猫の舌を――その時確かに猫が鳴いたの――あれと同じ――
男1　それをだれと――
女1　え――
男1　だれと見てたの――？
女1　――
男4　だれと見てたんです――？
女1　それは――
男4　だれと――？
女1　あの子と――

男1　好きなんです、こいつ——
男4　え——好き——
男1　そう、好きなんです——
男4　その、猫の舌を——抜くのが——
男1　いいえ——
男4　——
男1　映画——
男4　ああ、映画。
男1　ホラー映画。
男4　ホラー映画。
女1　わたしやったことありません、猫の舌なんか——
男1　だれもやらないさ、だれも——
女1　——
男4　でも、あの子は好きだった——
女1　え——
男4　猫の舌——いえ、ホラー映画——
女1　——
男1　もっと言いましょうか——
男4　——
男1　こいつなんです——初めに猫を殺したのは——
女1　——
男4　猫を——殺した——
男1　いえ——殺そうとしたのは——
女1　やってないわ——
男4　どういうことです——
男1　自分でエアガンを買ってきて、家の庭に入り込んでウンチする野良猫を、こいつ——
男4　（引き金を引く真似）撃った——
男1　撃ったんです——
女1　やってないわ、やってない——
男1　違うだろ——当たらなかっただけだ——
女1　——
男1　それから——
女1　やめて——
男1　それから——
男4　それから——何です——
男1　——
女1　——
男4　それから——それから——
男3　それまでだ——（ト男4のテープレコーダーを取り上げる）

男3が来ていた。

男4　あ——
男3　今度はどこの雑誌に売るんだ——
男1　何——何です——
男4　困るなあ、商売の邪魔されちゃ——持ちつ持たれつでしょ——お互い——
男3　（男1と女1に）騙されちゃいけませんよ——本を出すなんてうそなんだから——
男1・女1　うそ——
男4　チッ。——へへ。（うしろ頭を掻く）
男3　この男は有名人の情報をかき集めて、大手の雑誌に高く売るケチな情報屋なんですよ——本を出す力なんてないし、ましてやあんたたちの人権なんてこれっぽっちも考えてない——
男4　本当、困るなあ——
男3　（男4に）これは預かっとく。（とテープレコーダーの中のカセットテープを取り出し自分のポケットに入れる）もうこの人たちには近づくな、いいな。（とテープレコーダーを投げ返す）
男4　（受け取って）困るなあ、本当、困るよ、へへ。（去る）

男1と女1は顔を見合わせヒソヒソ言い合っていたが——

男1　だれです、あなた——ここの管理人なんてうそでしょ——
女1　さっき、あの人、持ちつ持たれっって——
男3　（キョロキョロしながら）ここで待ち合わせか、気づかなかった——
男1　何のことです——
女1　だれですか、あなた——
男3　協力してもらわなきゃいけませんよ——（ト警察手帳を見せながらも辺りを見回し絶えず動き続け——つまり男1と女1とを見ないで）そう約束したでしょ——連絡あったら教えてくれるって——それがあの子のためだって——

男1、ベンチに倒れ込むように座る。ト紙袋を胸に抱え込む。女1、心配する。

男1　だれも来ませんよ——だれも——
男3　——。そう——やっぱりだれか来るんだ——
男1　ううう。（胸を押さえ苦しがる）
女1　大丈夫、心臓——
男3　（キョロキョロしながら）この間のね、サラリーマン——
男1・女1　——
男3　逮捕しましたよ——あの少女も補導しました——
男1　逮捕——
女1　補導——

男1と女1は「逮捕・補導」の言葉に激しく動揺する。男3、二人を睨む。

男3　その袋——見せてもらえますか——
男1・女1　——

ト男3、紙袋に近づく。

男3　その中に入ってるんでしょ、金やあの子に必要な物が——下着や服や漫画なんかが——
男1　ううう。（さらに胸が苦しくなる）
女1　大丈夫——わたし、ハンカチ濡らしてくるから——

女1、駆け去る——

男3　さ、その袋をこちらへ——
男1　あの子は来やしませんよ——
男3　だったら、その袋をこちらへ——
男1　あやまりに行くんです、これから——その手土産です、これは——
男3　だったら見せてください——
男1　いや——ダメだ——
男3　いいから、見せてみろ——

男3、男1から紙袋を奪い取る。中には包装された四角い箱と小型の封筒が入っていた。男3、封筒の中を覗く。

男3　この金は、何です——この金は——
男1　——
男3　何なんですか——
男1　誠意です——
男3　誠意——？
男1　「誠意を見せろ」の誠意ですよ——これからわたしたちはあやまりに行って、相手方の前で土下座をします——（男3は男1の台詞の間に四角い箱の包装紙を破り中身を見る。が中は土産用の菓子だった——男3は腹立ちまぎれに菓子箱を地面に叩きつける）土下座をしてあや

まります――しかしそんなことをしても、言葉に言葉を重ねても、泣いてみても、どんなことをしても誠意が見えないと言われるでしょう――その時のそれが誠意です――今のわたしたちの精一杯の誠意――

男3　これが誠意（手に金の入った封筒）――。相手がこれを望んだんですか――

男1　いえ――そうじゃありません。わたしたちが考えたんです、そうじゃないかと――

男3　でも、これが二度目の誠意なんでしょ――（ト封筒を男1に返す）

男1　いえ、恥ずかしながらわたしたちまだ一度も行ってないんです――勇気がなくて、足がすくんで、まだ一度も相手方には行ってないんです――

男3　え、でも――

ト女1が帰ってくる。手にハンカチはない。菓子箱の破られているのを見て――

女1　どうしたの――これ――

男1　何でもないさ――どっちにしろ、きょうはもう行けないってこと――

女1　そうね――

男1　行こう――

女1が手早く菓子箱を片付け、男1を支え行こうとする。

男3　（さっきから腕組みをして考えていた）ちょっと待って――

男1・女1　――

男3　さっき二度目じゃない、初めてだって言いましたね――

男1　いえ、初めてじゃなく、まだ一度も――

男3　でもこの前あんたたちはこの公園にいた、その時も謝罪に行く途中だったはずだ――その時も紙袋を持っていた――

男1　（同時に）あれは――わたしが――勇気がなくて――

女1　（同時に）この人が――心臓が――

男3　が、実際は一度もまだ被害者の家には行ってない――

男1　行こう。（トするが足がふらつき、ベンチに座り込む）

女1　大丈夫、心臓――

男3　（ハッとして）奥さん――どうしたんです――

女1　え――

男3　ハンカチ――

女1　――

男1　――

男3　ハンカチ濡らしに行ったんじゃ――

男1・女1　――

男3　しまった、トイレだ！　トイレが待ち合わせだ――

男3、走り去る。

男1　あの子はやってない、やってないんだ！

男1・女1、立ち上がり、男3の去った後を目で追う。

女1　（手を合わせ）どうかあの子を捕まえて――捕まえてください――

男1　あの子はやってない――やってないよ――

女1　いつ聞いたの、それ――

男1　え――

女1　いつ、あの子から――やってないって――

男1　聞いてない。そう信じてるんだ――

女1　ブタ野郎――！

男1　え――

女1　ブタ野郎って――あの子――わたしのこと――

男1　――

女1　さっき、あそこで、わたしのこと睨んで、ブタ野郎って――。あの目――あの子に違いないわ――あの子に――

男1　信じない、おれは信じない――

女1　あの子の目を見ないからよ――あれはわたしを、わたしたちを憎んでる――

男1　――

女1　見たでしょ、あなた、あの子のノート――あの子の作った神様の絵――

男1　神様の絵――（ベンチの落書きを意識する）

女1　あれ、人を殺すことをあの子なりに正当化しようとして作ったものだったのよ――もう一人のあの子があんな恐ろしい神様を――

男1　信じない、そんなこと。ただのマーク さ、子どもならだれでも考える――遊びだよ――

女1　そうよ、遊びよ、ゲームよ、ゲームであの子――人を殺しちゃったのよ――

男1　それもし認めたら――おれたち――犯罪者の親になってしまう――

女1　犯罪者の親なんてもの、あるもんですか――あの子の親がわたしたちで、育てたのがわたしたちで、その子が間違いを犯したってこと――

男1　同じじゃないかな――

女1　違うわ――

男1と女1の向こうで（客席の方で）男3が「あの子」を追いつめている――

男1　あ――ああ！

女1　逃げて――逃げて――！

男1　――！（女1を見る）

女1　いや、いや、そうじゃない――捕まえて、あの子を――違う――違う――戻ってきて、戻ってきて――

男1　（客席の方を見て）ああ！　こっちだ――こっちだ――

女1　こっちへ戻ってきて！（両手をひろげ待っている）

男1　（同時に）こっちだ！

女1　（同時に）こっちへ！

暗転――

（幕）

上演希望はこちらまで

広島友好
〒755-0039
山口県宇部市東梶返３丁目18－７－１
TEL & FAX　0836－22－4065
E-mail　hiroshimatomoyoshi@yahoo.co.jp
ホームページ
http://hirosimatomo.~infoseeks.livedoor.com/

研さん　さようなら

弔辞

中沢研郎、私たちは平生研ちゃん研ちゃんと呼んでいたから、研ちゃんと呼ばせていただきます。人間死ななければならないということを知っていますが、とうとうその日がというのが私の率直な実感です。そうです、その日がきたのです。辛い思いで私は今研ちゃんの前に立っています。

研ちゃんは早稲田大学の劇研から変革の創造を求めて、労働者の創造を求めて、労働者の街川崎の建設座に入ってきました。建設座には黒沢参吉、萩坂桃彦がおり、「日鋼室蘭」を上演していました。この2人は地域演劇労働者演劇のパイオニアだったのです。

そして川崎協同劇団、さらに京浜協同劇団と発展していきました。中沢研ちゃんは創造的にも組織的にも常にその中心にいました。人間の組織ですからいろんな矛盾が起こります。それだけでなく京浜協同劇団は二度も稽古場建設という大事業も成し遂げています。そうした中、研ちゃんは困難にぶち当たり、その困難の壁をこじあける労をいつもいとわなかったのです。

黒澤参吉がなくなってからはあらゆる責任も重くなってきました。全日本リアリズム演劇会議の議長も務め、劇団の創造面の責任も全面的に背負うようになったのです。

私は研ちゃんの演出をあまり観ていませんが、「902番船進水」「郡上の立百姓」の舞台、キャストとしては「金冠のイエス」の哀愁が今も脳裏に残っています。どちらも見事に観客をひきつけていました。座付き作者も大切ですが、演出が定着するかどうかが全リ演の発展の要と思っていましたから、創造リーダーとしての研ちゃんと京浜の未来に私は希望をもったのです。ああすればよかったこうすればよかったと稽古の過程でもなかなか寝つかれないものです。私でもいつも酒に頼ります。酒がないと寝つかれないのです。そして女房にしかられるのです。

その女房がいません。その奥さんを研ちゃんは早く亡くす。

中沢研郎氏の葬儀右から2人目が1人娘の土子さん
左端がこばやしひろし議長

ところが創造者というものは孤独なものです。どんなに評価を受けてもそう創造者として満足できるものではありません。またそうでなければ創造者としての発展はないのです。

しました。奥さんの宮崎昌子さんがいつなくなられたか存じ上げていないのですが、生きておられたらと思うと、そう、生きておられたら研ちゃんはまだ元気で活躍しているに違いないと思います。男というものは、いや、人間というものは実に脆いものだとしみじみ思います。きっと奥さんもあの世でそう思っておられることでしょう。

アルコール依存症はますます進み、入院して断酒しなければならなくなったのですが、一度は光明を見出し再出発が期待されたのです。再び全リ演の議長として復帰してもらえるのを待ったのです。しかし、喜んだのもつかの間、脆いものです。実に脆い。禁断の木の実に手をつけた寂しがり屋の研ちゃんはもう底のない奈落に転がり込んでいったのです。そして迎えるべくして今日を迎えました。

寂しがり屋の研ちゃん、あの世でじっくり奥さんに叱られてください。元気な時の研ちゃんを思い出し、全リ演議長団として活躍した研ちゃんに私たちはありがとうとお礼を申し上げたい。研ちゃん長い間ありがとう。私たちは研ちゃんの初心を忘れず地域演劇の発展にこれからも努力します。見守っていてください。さようなら。

全日本リアリズム演劇会議
議長団代表
こばやしひろし

中沢研郎
1932年、長野県生まれ。1959年、京浜協同劇団の創立に参加。演技者、演出家。全リ演議長団としても活躍。数年間の療養生活を経て2003年4月、死去。享年71歳。

兵庫県劇団協議会　——創立35周年記念——

懸賞戯曲募集の最終結果

『兵庫県下の地域の生活に密着した作品で上演可能な未発表の作品に限る』とした、募集要項に基づいて応募いただいた数は5作品でした。

選考委員会による慎重選定の結果、残念ながら入選該当作はありませんでした。

佳作入選作として次の2作品を選定しました。

規定に基づき一篇10万円を贈ります。

島田九輔／作
『……そして神戸・東亜ホテル物語』
東京都練馬区在住

北島道誉／作
『城のある町で』
神戸市灘区（故人）

兵庫県劇団協議会
『懸賞戯曲選考委員会』
代表　須永克彦

〈住所変更〉

●東会議議長団・中野健氏の新住所は
〒038-0024
青森市浪館前田1-13-23
TEL・FAX
017-781-8542

●佐藤則元（佐藤逸平）氏の住居表示が変わりました。
〒331-0811
さいたま市北区吉野町
1-334-12

第68回公演「煙が目にしみる」アンケート

劇団ひの№173から

一部を紹介させていただきます。

●開幕から終幕へとどんどん集中して観ることができました。この緊張感が高まり、感動が深まり続けていく過程がなんとも快感でした。加藤健一のもみましたが、やはり劇団「ひの」しかできないつくり方で、心の芯があつくなりました。（女）

●芝居を観たのは初めてでしたが、ひきこまれるようで感動しました。途中涙でそうだった、というか泣いた…今度は子どもと観にきます。（男・33歳）

●たいへん良かったと思います。人間、生きている間に良い思い出をたくさんつくり人生を大切にいきなければと、この年で改めて考え直しました。（男・54歳）

●子どもと3人で見させて頂きました。ステキな芝居小屋で、ステキなお芝居をありがとうございました。（女・38歳）

●初めは少し抵抗がありましたが、最近身近に自分に起きた事とフィードバックしていつのまにか観入ってしまいました。普通の人の普通の小さな思いがとてもよく伝わってきました。願いや思い、生きている人、亡くなられている人、どんな人に対しても感動や愛を忘れずにいたいと思えたひとときでした。（女・28歳）

新刊のおしらせ

稲葉　稔彦著

『痴呆の母に感謝して』

痴呆の母を介護するなかでの笑いや涙、とまどい、いらだち、そしてよろこびが素直につづられています。

主な内容

1 母が倒れた
2 介護SOS発令
3 あんたは、どなたさんで？
4 症状の進行にあわせ用意ドーン
5 おばあさんの流儀？
6 自宅での最後の日

A5判　200頁
定価 1200円（税込）（送料310円）

㈱シイーム出版　TEL 06(6707)3833　FAX 06(6799)3833

2003年7月中旬以降の公演

●劇団通信の中から7月中旬以降の公演や行事をまとめましたので、都合のつく方はぜひ観劇しあってください。

●公演予定については、公演日・会場・タイトル・作・演出を劇団通信にはっきりとお書きください。

劇団蒼生樹	7/11～13	横浜市教育文化ホール	マクベスの妻と呼ばれた女	篠原久美子／作　勝碕若子／演出
劇団名芸	7/12	天白文化小劇場	ユタとふしぎな仲間たち	三浦哲朗／原作　栗木英章／脚色　佐野むつみ／演出
〃	7/19	南文化小劇場	〃	〃
劇団四紀会	7/12～13	新開地まちづくりスクエア	天使は瞳を閉じて	鴻上尚史／作　狂井たかし／演出
〃	11/2～3	兵庫県民小劇場	父と暮せば	井上ひさし／作　無法松猪吉／演出
劇団潮流	7/16	クレオ大阪中央	あひるの靴	水上勉／作　藤本栄治／演出
劇団はぐるま	7/19・20	岐阜市民会館	オズの魔法つかい	フランク・F・ボーム／原作 浅野公蔵／脚本 なみ五朗／演出
劇団息吹	7/25～27	森の宮プラネットホール	日本の牛	東川宗彦／作　木田昌秀／演出
劇団ひの	8/2・3	八王寺市いちょうホール	夏の夜の夢	シェイクスピア／作
岡崎劇団集団	8/9	岡崎市せきれいホール	海と日傘	松田正隆／作
関西芸術座	9/4～10	関芸スタジオ	少年H	妹尾河童／原作　堀江安夫／脚色　鈴木完一郎／演出
青年劇場	9/4～21	紀伊國屋サザンシアター	キジムナー・キジムナー	高橋正圀／作　松波喬介／演出
東京芸術座	9/11～14	六本木俳優座劇場	稲の旋律	旭爪あかね／原作　平石耕一／脚本・演出
劇団コーロ	9/12～14	近鉄小劇場	聖の青春	大崎善生／原作　いずみ凛／脚色　菊池准／演出
劇団銅鑼	9/12～15	東京芸術劇場小ホール	Big brother	小関直人／作　山田昭一／演出
劇団あしぶえ	10/5～11/23	しいの実シアター	彦市ばなし	木下順二／作　園山土筆／演出
劇団新芸	10/4	小樽マリンホール	小樽・運河・桜坂第2部	渋谷健一／作　飯田信之／演出
劇団石るつ	10/24～26	江東・佐賀町芸術劇場	入口と出口	コワコフスキー／作　境野修次／演出
福岡現代劇場	10/29・30	少年科学文化会館	マンザナわが街	井上ひさし／作　猿渡公一／演出
演劇サークル麦の会	10/24・25	麻布区民センター	わがババわがママ奮斗記	門野晴子／原作　杉浦久幸／脚色　吉岡利根雄／演出
劇団大阪	11/8・9	近鉄小劇場	アトリエ	グランペール／作　斉藤誠／演出
劇団海鳴り	11/9	紋別市文化会館	恋歌がきこえる	小池倫代／作　神山昭／演出
釧路演劇集団	11/22・23		響鐘・完結篇～昭和20年7月14日・釧路大空襲より～	

全日本リアリズム演劇会議　住所録

東　会　議

ブロック	劇　団　名	〒	住　　所	電　話	FAX
北海道	劇団さっぽろ	063-0053	札幌市西区宮の沢3条4-14-8	011-663-6259	011-663-8198
	ドラマシアターども	067-0074	江別市高砂町37-90　安念智康方	011-384-4011	011-384-4012
奥羽	劇団弘演	036-8275	弘前市城西3-94-10	0172-35-4670	同左
	劇団支木	030-0822	青森市中央2丁目4-6	0177-77-4677	同左
	黒石演劇研究会	036-0305	黒石市乙徳兵衛町51　加賀谷方	0172-52-4097	
	劇団やませ	031-0804	八戸市青葉2-2-13　大舘登美子方	0178-43-8893	0178-43-8226
	劇団未来半島	035-0053	むつ市緑町26-2 ㈱丸二物産内　仁木方	0175-24-1189	
東北	劇団山形	990-2423	山形市東青田町5丁目8-5	0236-32-4105	
	劇団だいこん座	997-0832	鶴岡市青柳町43-32　たんぽぽ保育園内	0235-24-1688	
	仙台小劇場	980-0011	仙台市太白区長町1-9-29　高松ビル3-C	022-746-3485	同左
関東	劇団群馬中芸	371-0101	群馬県勢多郡富士見村赤城山大河原626-498	027-288-2700	027-288-2792
	劇団埼芸	362-0032	上尾市日の出町4-508-1	048-777-4430	同左
	劇団久喜座	346-0003	久喜市中央1-3-13　江原方	0480-21-0664	
	青年劇場	160-0022	東京都新宿区新宿2-9-20　間川ビル4F	03-3352-6922	03-3352-9418
	劇団銅鑼	174-0064	東京都板橋区中台1-1-4	03-3937-1101	03-3937-1103
	東京芸術座	177-0042	東京都練馬区下石神井4-19-11	03-3997-4341	03-3904-0151
	劇団展望	166-0004	東京都杉並区阿佐谷南3-3-32	03-3393-2739	

ブロック	劇　団　名	〒	住　　所	電　話	FAX
関東	劇団石るつ	134-0088	東京都江戸川区西葛西3-15-8-701　いとうエリコ方	03-3804-0507	
	演劇集団土くれ	120-0003	東京都足立区東和5丁目12-7-103　石塚方	03-3629-3286	同左
	劇団ひの	191-0012	東京都日野市日野403-3	0425-84-3436	同左
	京浜協同劇団	212-0052	川崎市幸区古市場2-109	044-511-4951	044-533-6694
	劇団蒼生樹	220-0046	横浜市西区西戸部町2-192-14　濱田方	045-242-3584	
	三浦半島劇団海	238-0102	三浦市南下浦町菊名56	0468-88-3142	
山静	劇団やまなみ	400-0867	甲府市青沼1-8-5　梅津方	0552-33-9556	同左
	劇団静芸	420-0871	静岡市昭府町1丁目10-37	054-273-0604	
	劇団からっかぜ	431-0201	浜松市篠原町21505	0534-49-0937	同左
	劇団火の鳥	420-0941	静岡市松富3-60-30-3　泉地守方	054-273-0718	
中部	岡崎演劇集団	444-2123	岡崎市鴨田南町8-11	0564-28-3363	同左
	劇団名芸	468-0011	名古屋市天白区平針1丁目1808 （急ぎ、小包類は　457-0016 名古屋市南区汐田町11-8（栗木））	052-803-2922 052-821-3691	052-803-2922 052-821-3691
	名古屋演劇集団	451-0016	名古屋市西区庄内通4-16-3	052-524-5975	052-916-6468
	劇団名古屋	456-0018	名古屋市熱田区新尾頭町2-2-19	052-682-6014	
	劇団上野市民劇場	518-0873	上野市丸の内　共同ビル3F	0595-23-5252	0595-24-6444
	劇団すがお	511-0943	桑名市森忠睦美丘1058	0594-31-4210	同左
	劇団夜明け	508-0022	中津川市北野町丸山	0573-65-4937	同左
	劇団はぐるま	500-8882	岐阜市西野町1-11	058-265-1852	058-262-1652
	劇団たけぶえ	915-0857	武生市四郎丸町2-2	0778-23-0147	0778-23-4095

西　会　議

ブロック	劇　団　名	〒	住　　所	電　話	FAX
大阪	関西芸術座	557-0042	大阪市西成区岸ノ里東2-10-2	06-6661-2112	06-6661-2060
	劇団潮流	557-0034	大阪市西成区松1-6-17　橘モータープール内	06-6658-2315	06-6656-4121
	劇団未来	536-0007	大阪市城東区成育1-4-25	06-6939-5777	同左
	劇団きづがわ	551-0031	大阪市大正区泉尾4-2-7	06-6551-3481	同左
	劇団大阪	542-0012	大阪市中央区谷町7-1-39　新谷町第2ビル103	06-6768-9957	同左
	劇団コーロ	546-0024	大阪市東住吉区公園南矢田2-4-7	06-6695-6401	06-6695-6405
	人形劇団クラルテ	559-0015	大阪市住之江区南加賀屋3-1-7	06-6685-5601	06-6686-3461
	大阪府職劇研	540-0008	大阪市中央区大手前2-1-59　大阪府職労4F書記局内	06-6941-3130	
	劇団息吹	578-0913	東大阪市中野224-14　かわち勤労会館内	0729-64-4441	同左
京都	劇団京芸	612-8279	京都市伏見区納所北城堀31-18	075-631-2609	同左
	人間座	606-0865	京都市左京区下鴨東高木町11	075-721-4763	同左
和歌山	演劇集団和歌山	641-0022	和歌山市和歌浦南1-1-14	0734-45-4537	
神戸	劇団四紀会	650-0022	神戸市中央区元町通2-9-1-612	078-392-2421	078-392-2422
	劇団どろ	652-0803	神戸市兵庫区大開通7-4-7　谷垣ビル4F	078-576-6488	同左
	神戸職演連	650-0011	神戸市中央区下山手通9-9-7　西藤ビル	078-351-6969	同左
	劇団かすがい	660-0881	尼崎市昭和通1-17-1　石和久ビル3F	06-6489-8984	同左
	神戸ドラマ館ボレロ	650-0011	神戸市中央区下山手通9-9-7　西藤ビル2F	078-361-9870	同左
中国	劇団月旺会	730-0851	広島市中区榎町4-27　岩井方	082-234-9656	同左
	劇団若者座	755-0003	宇部市則貞3-12-5	0836-32-7424	
	劇団演劇街	753-0056	山口市湯田温泉6-3-28　柳沢方	0839-20-2379	同左
山陰	劇団あしぶえ	690-2105	島根県八束郡八雲村平原481-1　しいの実シアター	0852-54-2400	0852-54-2411

ブロック	劇　団　名	〒	住　　所	電　話	FAX
四国	劇団こじか座	790-0821	松山市木屋町4-35-1　酒井方	0899-24-3415	同左
九州	福岡現代劇場	810-0022	福岡市中央区薬院1-6-5-410	092-751-7982	092-831-1696
	劇団生活舞台	815-0083	福岡市南区高宮1-4-12-201　松尾方	092-531-1166	
	劇団道化	818-0103	太宰府市朱雀4-2-7	092-922-0737	092-922-9738
	劇団テアトルハカタ	810-0004	福岡市中央区渡辺通5-24-3-201　末安ビル	092-737-7685	092-737-7689

	氏　名	〒	住　　所	電　話	FAX
個人加盟	桜井　裕子	921-8157	金沢市山科3-6-10　早川方	0762-44-2802	
	大橋　喜一	211-0006	川崎市中原区丸子通2-682-604	044-733-0627	
	岡田　和義	176-0003	東京都練馬区羽沢2-12-8	03-3991-1723	
	こうじ谷　一郎	924-0805	松任市若宮町2-4	0762-75-2755	
	小松　徹	662-0947	西宮市宮前町8-8　ネオハイツ宮前町401	0798-36-8341	
	栗原　省	643-0111	和歌山県有田郡吉備町庄684-32	0737-52-5963	0737-52-6099
	又川　邦義	673-0883	明石市中崎2-4-1-1310	078-913-6629	
	阿部　好一	565-0851	吹田市千里山西3-30-16	06-6385-3330	
	松永　英樹	753-0067	山口市赤妻町1-67	0839-22-6071	
	東川　宗彦	581-0865	八尾市服部川9-48	0729-41-0554	
	藤原　重孝	753-0041	山口市東山2-9-10	0839-22-0393	
	川島　柳一	270-2251	千葉県松戸市金ヶ作57-57	0473-84-6207	同左
	島田　たろう	476-0002	愛知県東海市名和町中首羅8-71	052-609-4554	
	よしだ　はじめ	178-0061	東京都練馬区大泉学園町7-15-30	03-3924-6107	
	石上　慎	090-0801	北海道北見市春光町5-5-2	0157-61-4659	同左
	星野　明彦	854-0021	諫早市仲沖町14-20　ハイカムール仲沖Ⅰ-103	0957-21-1253	

友好劇団

劇　団　名	〒	住　　所	電　話	FAX
アートステージくしろ	085-0816	釧路市貝塚1-6-19　加藤たけはる方	0154-42-8009	
劇団新芸	047-0261	小樽市銭函町3-23-162　鹿角優一方	0134-27-3746	
劇団新劇場	007-0871	札幌市東区伏古11条2-396-47	011-784-9908	
劇団河童	090-0036	北見市幸町8-3-4　扇谷国男方	0157-25-8348	同左
劇団湖（うみ）	068-2161	三笠市本郷町578-9　加藤元方	0126-72-3044	
劇団ペルソナ	062-0934	札幌市豊平区平岸4条12-8-4　秋元博行方	011-811-9036	
函館創芸	041-0844	函館市川原町2-5　長谷川潔方	0138-53-7520	
劇団海鳴り	094-0006	紋別市潮見町2-3-40　我孫子正好方	01582-3-3238	01582-3-3579
劇団うみねこ	047-0042	小樽市末広町1-10　吉川勝彦方	0134-32-0607	
劇団波	045-0031	北海道岩内郡共和町梨野舞納　駒形勝博方	0135-62-3797	
劇団にれ	047-0263	小樽市美晴町10-14　柴山良宏方	0134-62-4507	
劇団シアターⅡ	060-0005	札幌市中央区北5条西27-3-5-503	011-643-8238	
札幌ろうあ劇団舞夢	063-0802	札幌市西区24軒2条6丁目　身体障害者福祉センター聴力障害者協会	011-642-8010	
劇団風の子北海道	001-0033	札幌市北区北33条11丁目	011-726-3619	
劇団川	067-0056	江別市美原1695　春日基方	011-384-6064	
劇団鳶群別	048-2335	北海道余市郡仁木町銀山3-163　関孝心方	0135-33-5257	
劇団なよろ	096-0065	名寄市大橋90-1教員住宅21　松岡義和方	01654-3-1049	
釧路演劇集団	085-0026	釧路市寿町2-5　中山友征方	0154-23-6551	
繁次郎劇団	043-0052	北海道檜山郡江差町字茂尻町71　江差町文科会館内	01395-2-5115	01395-2-5594
演劇集団未踏	121-0816	東京都足立区梅島1-9-1	03-3880-0034	

劇　団　名	〒	住　　所	電　話	FAX
演劇サークル麦の会	133-0051	東京都江戸川区北小岩7-3-20	03-3659-8704	同左
川崎演劇塾	214-0005	川崎市多摩区寺尾台2-8-1-12-504	044-951-9819	
劇団津演	514-0027	津市大門31-28　仏教会館内　岸武雄方	0592-26-1089	
ドラマサークル演劇研究所	420-0948	静岡市秋山町2-1715	054-271-0177	
劇団はにわ	462-0831	名古屋市北区城東町4-85　サンパーク志賀本通402号　香川このみ方	052-981-5482	同左
演劇集団瞬（とき）	602-0000	京都市上京区芦山寺通り千本東入ル北玄蕃町51-7　山脇方	075-414-8624	
人形劇団京芸	611-0022	宇治市白川鍋倉山35-20	0774-21-4080	
劇団自立の会	620-0016	大津市比叡平2-35-5	077-529-8057	同左
シアター生駒	630-0222	生駒市壱分町67-17　岡昌美方	0743-77-0103	
演劇集団あり	683-0037	米子市昭和町23-2　宮倉方	0859-33-9302	0859-33-6592
劇団いこら	643-0111	和歌山県有田郡吉備町庄684-32　栗原省方	0737-52-5963	0737-52-6099

〈休会中〉

劇　団　名	〒	住　　所	電　話	FAX
劇団阿波っ子	770-0023	徳島市佐古三番町8-17　船越智子方	0886-23-5670	
岡山職場演劇集団	719-1144	総社市富原480-3　岩城方	0866-92-4325	
座わだち	572-0045	寝屋川市東神田町22-21　安田幸二方	072-828-1349	
演劇サークルトラム	753-0041	山口市東山2-9-10　藤原方	0839-22-0393	

議　長　団	劇　団　名	〒	住　　所	電　話	FAX
こばやし　ひろし	劇団はぐるま	501-0104	岐阜市寺田852　円成寺	0582-51-0490	0582-52-3694
後藤　陽吉	青年劇場	184-0014	小金井市貫井南町5-12-13	042-381-1590	同左

議長団	劇団名	〒	住所	電話	FAX
中野　健	劇団支木	038-0022	青森市浪館前田85-23	0177-81-8542	同左
藤沢　薫	劇団京芸	615-8152	京都市西京区樫原内垣外町25-1-A403	075-391-5039	同左
猿渡　公一	福岡現代劇場	814-0033	福岡市早良区有田2-2-9	092-831-1696	同左
熊本　一	劇団大阪	630-0135	生駒市南田原1230-60（西会議事務局長を兼務）	07437-8-2558	同左

顧問

仲　武司	関西芸術座	675-0104	加古川市平岡町土山953-8	078-944-5013	

事務局	劇団名	〒	住所	電話	FAX
城谷　護	京浜協同劇団	212-0051	川崎市幸区東古市場9-21（事務局長）	044-544-3737	同左
浅野　真理子	劇団はぐるま	500-8882	岐阜市西野町1-11　劇団はぐるま内	058-265-1852	058-262-1652
田中　実	劇団息吹	581-0081	八尾市南本町2-6-32（西会議事務局次長）	0729-99-9437	同左
清原　正次	劇団大阪	570-0079	守口市金下町1-12-13（西会議事務局次長）	06-6993-3113	同左
編集委員					
後藤　陽吉	青年劇場	184-0014	東京都小金井市貫井南町5-12-13	0423-81-1590	
境野　修次	演劇集団石るつ	272-0136	千葉県市川市新浜1-23-5-103	047-356-7217	同左
よしだ　はじめ	個人会員	178-0061	東京都練馬区大泉学園町7-15-30	03-3924-6107	
郡司　勇	東京芸術座	179-0072	東京都練馬区光が丘2-10-3-505	03-3976-9035	同左
栗原　省	劇団いこら	643-0111	和歌山県有田郡吉備町庄684-32	0737-52-5963	0737-52-6099
赤松　比洋子	劇団きづがわ	663-8141	西宮市高須町1-1-11-859　古川方	0798-45-3307	同左
楠本　幸男	演劇集団和歌山	640-8391	和歌山市加納271-14	0734-73-7589	同左

編集後記

☆自民党憲法調査会が27日に明らかにした安全保障に関する憲法改正要綱は「国防軍」の明記と、国民には、「責務」を課させることを盛り込んでいる。☆自衛権、国防軍、軍事裁判所、国民の責務、国家緊急事態の宣言、など。有事法制化、その発動と戦争への道、憲法第九条をなくしていく動き。軍靴の響きが聞こえるようだ。

☆横浜での憲法劇が他地域にも広がり、各地で憲法劇がやられるようになった今こそ、平和憲法の大切さと重要性を広める時期だ。

☆戯曲が2編、送られてきました。『舞い降りた兵士』（島田たろう・作）。笑劇『恋におちて』（伊藤一郎）――劇団支木アトリエ公演。

（境野）

〔原稿の送付について〕

・次号（11月号）の締切は9月20日です。

戯曲などは作品ができたときにすぐ送ってください。また、劇評なども各劇団で依頼して上演が終わり次第送ってください。

①戯曲は、境野修次または、栗原省へ。

②劇団通信および舞台写真は、㈱シイーム内　石田　章へ

③それ以外の原稿は、必ず、東会議は境野修次、西会議は赤松比洋子に送ること。

境野、赤松に連絡のないまま、シイーム（石田章・編集部）に直送した原稿は編集企画上掲載できないこともありますので、ご了承ください。

後藤　陽吉
〒184-0014
小金井市貫井南町5-12-13
TEL&FAX　0423-81-1590

栗原　省
〒643-0111　和歌山県
有田郡吉備町庄684-32
TEL　0737-52-5963
FAX　0737-52-6099

境野　修次
〒272-0136
市川市新浜1-23-5-103
TEL&FAX　047-356-7217

赤松比洋子
〒663-8141
西宮市高須町1-1-11-859
TEL&FAX　0798-45-3307

㈱シイーム
〒547-0027
大阪市平野区喜連5-1-45
TEL 06-6707-3833
FAX 06-6799-3833
E-mail
shiimu@lime.ocn.ne.jp

演劇会議　112号　2003年7月12日発行　　定　価　700円（送料240円）

編集長　後藤陽吉
編集委員　境野修次　よしだはじめ　郡司　勇　栗原　省　赤松比洋子　楠本幸男
発行所　〒212-0052　神奈川県川崎市幸区古市場2-109　京浜協同劇団
TEL/044-511-4951　FAX/044-533-6694

誌代振込先（郵便振替）口座番号00200-4-78639
全日本リアリズム演劇会議事務局（〒212-0052　神奈川県川崎市幸区古市場2-109　京浜協同劇団・城谷護）